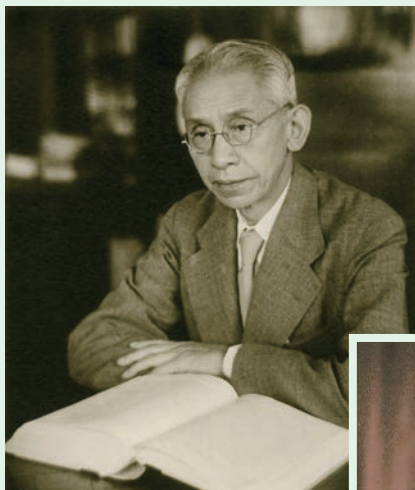


# 鶴翔会

令和2年4月1日発行 2020年 128号

## 岡山医学同窓会報



津田誠次 教授



津田誠次教授の手術風景



外来指導風景



敬天愛人

津田誠次

臨床講義風景



## 表紙の写真



つだ せいじ  
津田 誠次 (1893~1972)

鹿児島市出身。第7高等学校を経て大正6年（1917）東京帝国大学医科大学卒業後、直ぐ第二外科教室佐藤三吉教授の門下に入り、わずか2年後に台湾総督府医学専門学校教授として赴任。大正11年（1922）からドイツシャリテー大学病院病理学教室で病理学を専攻の後、大正14年（1925）12月、31歳で岡山医科大学第二外科教授に就任した。第七高等学校造士館時代より剣道に精進し、心身を鍛錬し薩摩隼人としての誇りを身に着けて「和を以て貴しとなす」「敬天愛人」の精神をもって在職中一貫して真摯な学術的態度と共に門下生の人間形成に大きな影響を与えた。「手術日の前日には、もう一度外科手術書を紐解け」とよく諭した。

教授就任からの10年間は、鉄筋5階建ての教室棟の建築や多くの門下生の入局による研究体制の充実等、施設、組織面の整備充実に努めた。次の10年の第二期は、昭和11年の第2回目の欧米留学後、かねてより教授が興味を持っていた急性すい臓炎に関する研究を系統的に開始した。その成果は昭和16年の第42回日本外科学会総会で宿題報告として完成された。その後太平洋戦争の影響を受け研究面、臨床面の制約も多く教室の運営は困難を極めた。出征した教室員の訃報が届くたびに白髪が増したという逸話がある。昭和20年6月の岡山空襲の際には、教室の屋上にも数個の焼夷弾が落下したが大事には至らなかった。しかし、空襲による負傷者が多く運ばれ、教授を先頭に数名の医師、学生が不眠不休で救護にあたり医師としての任務を全うした。終戦後、多くの門下生が復員し教室も活況を呈してきたが、社会事情も悪く、また戦時中の遅れを取り戻すため臨床修練に重きをおかざるをえず、研究活動を開始するには若干の時間を要した。

昭和25年に東京で開催された日米連合医学教育者協議会において、進歩した米国の外科学が紹介され、我が国の外科医は大いに鼓舞され、近代外科学の吸収に努め始

めた。この時期から退職までが津田外科の第三期であり主として胃がんに関する研究が行われ、胃がんの血清学的診断及び病態生理などの方面で多くの成果を上げた。昭和29年5月、地方都市では初め開催された日本外科学会総会を岡山市公会堂において主宰し多くの研究者が参集し盛大に行われた。教授は「胃癌の予後」の題で講演し貴重な業績として称賛された。

昭和23年に我が国初の縦郭洞皮様嚢腫の完全摘出に成功して以来、胸部外科の将来性に着目し、気管内麻酔の導入を契機に教室でも胸部外科に対する関心が高まり、肺結核に対する外科的療法に続き心臓外科の研究がはじめられた。昭和29年10月動脈管開存症の手術の成功及び昭和30年7月の選択的脳灌流冷却法による心房中隔欠損症手術の成功により心臓血管外科の基礎が確立された。

昭和31年、新設された岡山労災病院長を兼務した。昭和33年3月、定年により33年間にわたる第二外科教授を退いた。この間昭和13年、岡山医科大学附属病院長、昭和29年、岡山大学医学部附属病院長を歴任し岡山大学医学部及び病院の教育研究、診療で多くの業績を残すと共に後進の育成に努めた。また、日本外科学会、日本癌学会、日本癌治療学会、日本胸部外科学会、日本災害医学会の名誉会員として活躍した。

昭和3年より岡山大学医学部剣道部顧問をつとめ医学生の剣道を指導、支援した。昭和28年より岡山県剣道連盟初代会長、昭和30年より中四国学生剣道連盟初代会長を務めた。昭和6年岡山大学医学部剣道部OB会を菖蒲会と命名し開設し、剣道部の育成を支援した。“菖蒲会”は90年近く立った今も続いている。

津田教授の住居が「博士の家」の名で、地域（岡山市北区広瀬町）のコミュニティハウスとして公開されたことは、改めて津田教授の人望を感じさせられる。

（参考：岡山大学医学部百年史、博士の家HP、岡山大学呼吸器・乳腺外科学HP）

<b>巻頭言</b>	<b>1</b>
鶴翔会会長（医学部長） 浅沼幹人	
<b>ご挨拶</b>	<b>2</b>
山田雅夫教授 ご退任 加藤宣之教授 ご退任 白神史雄教授 ご退任 西崎和則教授 ご退任 CKD・CVD地域連携包括医療学講座教授に内田治仁氏  ご就任 岡山大学病院ダイバーシティ推進センター教授に片岡仁美氏  ご就任	
<b>医学部創立150周年記念事業</b>	<b>7</b>
岡山大学医学部・病院 創立150周年記念式典開催のご案内	
<b>会員動向</b>	<b>8</b>
人の動き（受賞者、人事異動、役員異動など） 学位授与 会員訃報	
<b>クラブ報告</b>	<b>12</b>
美術部 藏満紘枝、増山 寿 鹿田水泳部 竹川裕則	
<b>会員のこえ</b>	<b>14</b>
提言～同窓会報をより良くするために～ 池田重政 目医者をつぶやき「やまいは世につれ」 松尾俊彦	
<b>会員の近況</b>	<b>16</b>
ミャンマー国エーヤワディー管区チャウンゴン郡区における准助産師の育成と成果認定特定非営利活動法人「日本・ミャンマー医療人育成支援協会（MJCP）」 岡田 茂	
<b>同期会だより</b>	<b>21</b>
昭和26年卒のクラス会報告 奥村修三 昭和28年卒・クラス会 矢部芳郎 昭和34年卒業「ねぶち会」令和元年10月26日開催医学部創立150周年記念事業に寄付を決定 瀧谷泰博 37会同窓会 日野博夫 平成11年卒同級生 内田治仁君教授就任祝賀会 令和元年11月17日（日）於 Restaurant Lionni 原田馨太	
<b>関連病院だより</b>	<b>25</b>
医療法人東浩会 石川病院 石川泰祐	
<b>支部だより</b>	<b>26</b>
令和元年兵庫県鶴翔会総会 山本満雄 令和元年度鶴翔会山口県支部総会報告 青 雅一	

鶴翔会東海支部総会：分け隔てなく同窓が集まることを祈念して 平川聡史  
令和元年度鶴翔会近畿総支部報告 野上浩寛  
第53回鶴翔会新居浜支部総会報告 松原 稔

---

**新聞より** **31**

岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など (2019.9～2020.2)

---

**歴史の広場** **36**

岡山大学附属図書館医学部分館・資料室物語⑩ 幕末・維新の医学書とその時代 万城あき  
岡山大学附属図書館医学部分館・資料室物語⑪ (終回) 医学部の歴史資料にみる群像 万城あき  
「ウイリス動脈輪」のトーマス・ウイリス 久山秀幸  
医師養成の歴史と岡山大学医学部―その4 椋野 洋

---

**学生だより** **56**

系統解剖学実習を終えて 井上七海  
解剖実習を終えて 高橋拓真  
解剖学実習での学びと感謝 鍵田麻衣

---

**教室だより** **58**

海外への留学生一覧

---

**岡山より** **84**

岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会総会のご案内  
ご寄贈いただきました  
令和元年度 Student Doctor 認定式  
令和元年度岡山大学医学科学学位記授与式  
第114回 医師国家試験の結果  
(公財)岡山医学振興会より大学の改革は改悪か? 難波正義  
令和元年度卒年次別会費納入状況  
おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています!  
岡山大学医学部・病院発祥の地へ案内板設置される  
岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧  
鶴翔会会報 投稿内規

---

**編集後記** **94**



## 巻 頭 言

鶴翔会会長（医学部長） 浅沼 幹 人

岡山大学医学部同窓の先生方におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。毎年のように自然災害が各地で相次ぎ、さらに今年は予期せぬ新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大で、全国的に種々の活動、イベントが中止あるいは制限され、多くの方がその対応に追われていらっしゃるものと存じます。一日も早い終息を願ってやみません。

さて、令和元年度から岡山大学執行部の研究担当理事に那須保友前研究科長が、研究科長に大塚愛二前医学部長が就任され、医学部（医学系）の新体制が出来ましてから早いもので約1年が経ちました。文部科学省の「国立大学改革方針」を踏まえた国立大学との徹底対話の実施ならびに第4期中期にむけた各部局での将来構想の策定に追われた1年でしたが、よいブレーストーミングとなりました。大塚研究科長を中心に次世代を担う若手教員の方々に加わって頂き、①大学院学位プログラム制とオープンイノベーション研究体制の確立、②グローバル医学教育・研究体制の充実、③大学院リカレント教育、遠隔教育による地域医療への貢献、④研究医養成学部・大学院連携プログラムの充実、⑤メディカルデータサイエンスとIoTの医療への社会実装、⑥地域医療、多職種連携共同プログラムの確立、からなる「真に革新的医療を創生する医療人（医師・研究医）の育成」と題した医学系将来構想案を素案ではありますが策定しました。また、基礎系・臨床系将来構想委員会では真剣に研究力向上に向けた方策についての話し合いを行っており、今後議論を深めていくこととなります。

また、カリキュラムや学生生活における種々の問題に対しては、対応する委員会による改善強化を図っております。国際水準に適った教育カリキュラムへの改革を行い、日本医学教育評価機構が実施する国際基準

による医学教育分野別認証評価を受審しておりましたが、この度遡って2019年4月からの適合認定を頂きました。この認定により、今後とも本学医学科の卒業生は米国医師国家試験（USMLE）受験資格審査試験を受験することができます。

1870年（明治3年）の岡山藩医学館を礎とする岡山大学医学部は、いよいよ今年2020年で150周年を迎えます。医学部創立150周年記念事業に対してのルネッサンス基金には、多くの同窓の先生方、地元企業の後援会、学内職員からのたくさんのご寄付を頂いておりますことを改めて御礼申し上げます。現在、吉野正創立150周年記念事業実行委員長、大塚研究科長、山田雅夫教授のご尽力により、医学部創立150周年記念事業ならびに記念誌編纂が進められており、6月末には鹿田会館（旧生化学棟）の歴史的大讲堂の大改修が完了する予定です。今年11月3日には創立150周年記念式典を挙げる予定で、数々の興味ある歴史的資料も盛り込んだ創立150周年記念誌を同時に発刊できると存じます。また、3月から始まった山陽新聞特集連載「医を紡ぐ 岡山大医学部150年」では岡山大学医学部の現在の特色ある教育・研究・医療の取り組み、学外で活躍されている同窓生や傑人を紹介して頂きます。さらに、岡山市歴史のまちしるべ事業に申請を行い、現東山公園に「岡山藩医学館・大病院跡」の記念碑を設置していただきました。地域に支えられ世界を目指す岡山大学医学部の50年先を見据えたあり方を皆様と考える節目の年としたいと思います。医学部創立150周年記念事業は今年以降も継続して参ります。今後とも、同窓各位の多大なるご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げますとともに、皆様の益々のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

## ご 挨拶

### 山田雅夫教授 ご退任



#### ご 挨拶

このたび、令和2年3月に定年退職するにあたり、これまでご支援を賜りました皆様にご挨拶を申し上げます。

私は、平成9年4月ウイルス学教授に就任しましたが、実は学生時代から1年の内地留学と2年の米国留学を除けば、ほぼ

岡山大学医学部で過ごしました。さらに津島の官舎で育った高校までを加えると、自分でもびっくりするほど長く岡山大学にお世話になったように思います。

大学院では、大阪大学から着任したばかりの新居志郎教授（当時）の下で単純ヘルペスウイルスについてご指導をいただき、以来これまでずっと、ヘルペスウイルスの研究を続けさせていただき、臨床の先生とも共同研究の機会をいただき、平成27年には日本臨床ウイルス学会を新装間もないJホールで開催させていただきました。

教授になってしばらくのころ、本学部では大学院の重点化・部局化が急がれておりました。その申請には外部評価が必須だということで、故二宮善文教授とともに当時の難波正義医学部長に命じられて、生理系、病理系、社会医学系、内科学系、外科学系、病院系の外部評価委員をお招きして評価委員会を開催し、報告書まで3か月の突貫工事で仕上げました。その甲斐あって平成13年大学院医歯学総合研究科が設立されました。その後、津島で法人化の制度設計のなかで目標・評価の座長を担当し、引き続いて2度の大学機関別認証評価の自己評価書及び第一期・第二期中期目標・中期計画期間に関わる達成状況報告書と現況調査票の執筆と取りまとめを評価センター長として務めました。いずれも大学にとっても初めての取り組みでしたが、多くの教職員の皆様と相談しながら、緊張感の中にも素晴らしい時間を過ごさせていただき心から感謝申し上げます。

この原稿は1月に書いています。周囲の冬景色を物ともせず青々とした麦がひと際元気です。岡山大学医学部と鶴翔会の益々のご発展を祈念し、私の退任の挨拶

とさせていただきます。

#### 略 歴

- 昭和54年3月 岡山大学医学部卒業
- 昭和58年3月 岡山大学大学院医学研究科修了
- 昭和58年4月 岡山大学医学部（ウイルス学講座）助手
- 昭和63年3月 米国ウイスター研究所へ研修渡航（至平成2年2月）
- 平成元年7月 同講師
- 平成5年4月 同助教授
- 平成9年4月 岡山大学医学部（ウイルス学講座）教授
- 平成17年4月 岡山大学医学部医学科長（副医学部長）（至平成19年3月）
- 平成21年4月 岡山大学評価センター長（至平成29年3月）
- 令和2年3月 岡山大学定年退職

### 加藤宣之教授 ご退任



#### ご 挨拶

平成11年8月、東京築地にある国立がんセンターより縁もゆかりもない岡山大学に赴任してはや20年、研究生活も40年を越え、心身とも充実して来たところで、「ご挨拶」ということになってしまった。赴任当初は国

研と大学との違いに多々遭遇した。後悔しそうになりつつも赴任5年目には教室の体制が整い研究に邁進することができ現在に至ったことは幸運であった。

研究主体の教室への赴任であったことから前任地での研究も含めて長い研究生活を振り返ってみる。化学合成から出発し、酵素研究や遺伝子を含めた核酸研究で多くの実験手法を修得し、米国留学時からウイルス学へと転進して内在性レトロウイルス、白血病レトロウイルス、C型肝炎ウイルス（HCV）そしてB型肝炎ウイルスを研究対象として来た。「科学」研究においては、HCVゲノムの解明、HCVの遺伝子型や超可変領域の発見、HCV増殖に係わる宿主因子の発見、抗HCV薬リバビリンの作用機序の解明などが主要な業績となった。一方、「技術」研究においては、HCV

の複製増殖システムや薬剤アッセイ系の開発、HCV感染防御剤ラクトフェリンの発見、抗HCV薬スタチン剤の発見などが主要な業績となった。

我が国では、「科学技術」という言葉が1つの単語のように長らく汎用され、「科学」と「技術」の本来の意味が忘れ去られている。「イノベーション」とか「革新的」というような耳触りの良いフレーズとともに「技術」研究が施策面においても偏重され、様々な事情により大学もその波に呑まれている。最近の様々なデータから「技術大国」という看板は当面維持されるものの「科学小国」への道を辿っていることが読み取れる。さらに、現在の3Y社会（夢なし、欲なし、やる気なし）に生きる若者の「科学」離れも問題だ。などなどが頭をよぎる。だが、昨今流行っている「日本病」には罹患したくない。まだまだ未来志向で前進あるのみを信条にするつもりでいる。

平成4年に乳がんのため天に召された妻（36歳の若きがん研究者）が「まだやれるよ」と言っているはずだ。今後も特命教授として活動を継続し、「科学」研究にも携わっていこうと思う。末筆ながら、お世話になった皆様に深謝申し上げ、岡山大学の発展を祈念致します。

#### 略 歴

昭和52年3月	北海道大学薬学部卒業
昭和54年3月	北海道大学大学院薬学研究科（薬学専攻）修士課程修了
昭和54年4月	国立がんセンター研究所研究員（ウイルス部）
昭和60年3月	米国メリーランド州NCIフレデリック癌研究所（博士研究員）
平成4年4月	国立がんセンター研究所主任研究官（ウイルス部）
平成5年5月	国立がんセンター研究所室長（分子遺伝学研究室）
平成11年8月	岡山大学医学部教授（分子細胞医学研究施設病態分子生物学部門）
平成13年4月	岡山大学大学院医歯学総合研究科教授（分子生物学分野）
平成17年4月	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授（分子生物学分野）
平成20年4月	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授（腫瘍ウイルス学分野）

## 白神史雄教授 ご退任



#### ご挨拶

退官にあたって想うこと

今年度で、7年間の短い岡大大学院眼科教授を退任することになります。

思い返すと、劇的に医局の変革を行いました。網膜硝子体グループの拡充、緑内障グループの充実、川崎医大眼科第2教室

の充実、岡大斜視グループの充実、これらの各種手術の教育、関連病院の充実、同門会の土曜日への移動、岡大眼科研究会のホテルでの開催、教授室、准教授室の縮小、そのかわりにカンファレンスルームの開設などです。また、人事に関しては、最終的には私が責任を持ちますが、人事委員会の会議で決定します。関連病院では2人以上で可能な限り4人以上にしました。また金銭面においては、国内外を問わず講演者には旅費をだすこと、論文の校閲費、論文の出版社への支払いを委任経理金から出すこと、研究費は思う存分使ってよいこと、競争的資金は可能な限り取得することなどです。これらが可能になったのも同門の先生方の支援があったからです。この場を借りて心より感謝します。そのおかげで、多くの英文論文ができました。平均すると1年に10編以上です。

さて、個人的には、最愛の家人が2年目の8月に他界しました。香川大学教授当時から卵巣ガンを患っていてずっと看病をしていました。亡くなった後から今まで淋しくつらい毎日をずっと送ってきました。今もなお、仏壇の前では自然に涙が出てきます。家内のところに早く行きたいと思うのですが、退任まではがんばって生きなければと思う毎日でした。彼女の思い出に浸りながら静かに生きていきますが、早めに迎えに来てくれたらなあと思っています。

今年3月までの計7年間、同門の先生方には本当にお世話になりました。心からお礼申し上げます。さらに、大月名誉教授には私の好きにさせていただいたことを厚くお礼申し上げます。私も後任の教授には一切口出ししない考えです。いずれにしても本当にありがとうございました。

#### 略 歴

昭和55年	岡山大学医学部卒業
昭和59年	岡山大学医学部大学院修了



平成3年 岡山大学医学部眼科講師  
 平成9年 岡山大学医学部眼科助教授  
 平成10年 文部省長期在外研究員 エモリー大学  
 平成14年 香川医科大学眼科教授  
 平成15年 香川大学医学部眼科教授  
 平成25年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授  
 (眼科学分野)

## 西崎和則教授 ご退任



### ご挨拶

この度、令和2年3月をもちまして定年退職するにあたり、これまでご支援を賜りました皆様に退任のご挨拶を申し上げます。

私は昭和54年に岡山大学医学部を卒業し、岡山大学医学部耳鼻咽喉科に入局いたしました。その後、助手・助教授の職を経て、平成12年1月に耳鼻咽喉・頭頸部外科に就任いたしました。

在任中の研究活動としては、文部科学省および日本学術振興会が交付する科学研究費助成事業「骨髄および組織幹細胞移植による嗅覚機能回復に関する研究」や「骨髄移植による嗅覚中枢投射神経細胞の再生と嗅覚神経回路の再構築に関する研究」などで研究代表者を務めたほか、AMED研究班や厚労省研究班の研究分担者を務め、これらの研究を通して、骨髄細胞を用いた嗅覚組織の再生をはじめ、クオリティ・オブ・ライフに深く関連する聴覚や嗅覚などの感覚器に関する先進的な研究に取り組んでまいりました。また、学会活動としては、日本耳鼻咽喉科学会第18回専門医講習会実行委員長(2004年)、第23回耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会(2005年)、第52回日本小児耳鼻咽喉科研究会(2005年)、第50回日本鼻科学会総会(2011年)、第7回日本小児耳鼻咽喉科学会(2012年)を開催し、退任後の今年5月には第121回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会の開催を予定しております。これまで医局員一丸となって学会を開催してこられたことは、苦労もありましたがとてもよい経験でした。5月の学会がこれまでの経験の集大成となればと思います。また、私の教授就任後に入局した医局員について、48名連続耳鼻咽喉科専門医認定試験一発合格という学会的にもおそらく前例のない快挙を成し遂げることができ

ました。さらに平成29年には、教室から国際医療福祉大学耳鼻咽喉科と熊本大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科にそれぞれ教授として送り出すことができました。優秀で勤勉な医局員に恵まれたことも私の誇りです。

岡山大学医学部は2020年に150周年を迎え、耳鼻咽喉科学教室も2007年に開講100周年を迎えました。明治40年での耳鼻咽喉科学開講は全国的にも10番目にあたり、歴史ある岡山大学医学部とともに今後益々発展することを望んでおります。最後になりますが、これまでのご支援に深謝いたしますとともに鶴翔会会員の皆様のご健勝を祈念し、退任のご挨拶とさせていただきます。

### 略歴

昭和54年3月 岡山大学医学部 卒業  
 昭和54年4月 岡山大学医学部附属病院耳鼻咽喉科入局  
 昭和54年6月 岡山大学医学部附属病院耳鼻咽喉科医員(研修医)  
 昭和55年1月 川崎医科大学附属川崎病院 研修医(研究生入学)  
 昭和56年1月 岡山大学医学部附属病院耳鼻咽喉科医員(研修医)  
 昭和56年5月 岡山大学医学部附属病院耳鼻咽喉科医員  
 昭和56年10月 岡山大学医学部附属病院 助手(耳鼻咽喉科)  
 昭和57年2月 神戸市立西市民病院 医員(研究生入学)  
 昭和60年2月 岡山大学医学部附属病院 助手(耳鼻咽喉科)  
 昭和62年4月 岡山済生会総合病院耳鼻咽喉科 医員  
 昭和62年9月~11月 岡山済生会総合病院から東京国立がんセンターへ派遣  
 平成3年1月 岡山大学医学部附属病院 助手(耳鼻咽喉科)  
 平成3年4月 岡山大学医学部附属病院 講師(耳鼻咽喉科)  
 平成5年6月~平成6年7月 スウェーデン国ウプサラ大学耳鼻咽喉科学教室 客員研究員(主任教授 Matti Anniko)  
 平成8年1月 岡山大学医学部 助教授(耳鼻咽喉科講座)  
 平成11年12月 岡山大学医学部 教授(耳鼻咽喉科講座)  
 平成13年4月~令和2年3月 岡山大学大学院医歯薬学



総合研究科 教授（耳鼻咽喉・頭頸部外科）

（現：岡山大学大学院医歯薬学総合研究科）

## CKD・CVD地域連携包括医療学講座教授に内田治仁氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび2019年（令和元年）11月1日付けで、医歯薬学総合研究科CKD・CVD地域連携包括医療学講座教授を拝命いたしました。これもひとえに同窓の

先生方の多大なるご支援のおかげと心より感謝申し上げます。

私は1999年に岡山大学医学部を卒業し、榎野博史先生（現岡山大学学長）が主宰されておりました第3内科（現腎・免疫・内分泌代謝内科）に入局いたしました。初期研修を終えた後、榎野博史先生のご高配を賜りアンジオテンシンⅡがもたらす高血圧・心腎血管病に関する研究テーマを頂きました。学位取得後2006年から米国ケンタッキー大学心血管研究センターに留学、2009年帰国以後も一貫して同テーマで研究を続けています。また帰国後には榎野博史先生、和田淳先生（現腎・免疫・内分泌代謝内科学講座教授）および杉山齊先生（現岡山大学血液浄化療法人材育成システム開発学講座教授）のご高配により慢性腎臓病診療に関わらせていただくようになり、2014年からは当講座前任である前島洋平先生（現株式会社カワニシホールディングス代表取締役）の後任としてCKD・CVD地域連携の推進・拡充にも従事してまいりました。

CKD（慢性腎臓病）は21世紀における新たな国民病であり、CKD重症化予防および、CKDによるCVD発症予防が、国民の健康寿命延伸における重要な課題です。たくさんの諸先輩の皆さまにご指導を賜りつつ、岡山県、岡山市、地区医師会の多大なるご協力を頂戴しながら進めてまいりました。岡山県下におけるCKD・CVD対策は、最近日本全国でも有数のCKD対策先進地域として厚労省からも認められるに至りまし

た。今後は、地元岡山県において患者会との連携を深めCKD・CVD対策のさらなる推進・拡充・質の向上を目指すとともに、日本全国レベルでのCKD対策・普及啓発にも活動領域を拡げ、日本国民の健康増進に少しでも貢献できるよう、微力ではございますが一生懸命努めてまいりたいと存じます。

最後に、鶴翔会会員の先生方の益々のご発展とご多幸をお祈り申し上げますとともに、なお一層のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、宜しく申し上げます。

### 略歴

- 平成11年3月 岡山大学医学部卒業
- 平成11年4月 岡山大学医学部第3内科入局
- 平成11年10月 呉共済病院 内科研修医
- 平成18年3月 岡山大学大学院医学研究科修了
- 平成18年7月 米国ケンタッキー大学 ポスドク研究員
- 平成21年4月 岡山大学病院 腎臓・糖尿病・内分泌内科 助教
- 平成22年1月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 腎・免疫・内分泌代謝内科学 助教
- 平成26年9月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 CKD・CVD地域連携・心腎血管病態解析学講座 准教授
- 平成28年11月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 CKD・CVD地域連携包括医療学講座 准教授
- 令和1年11月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 CKD・CVD地域連携包括医療学講座 教授

## 岡山大学病院ダイバーシティ推進センター教授に 片岡仁美氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、令和2年1月1日付けで岡山大学病院ダイバーシティ推進センター教授を拝命致しましたので、御挨拶申し上げます。

私は平成9年に岡山大学を卒

業と同時に、槇野博史教授（現 岡山大学学長）の主  
宰されておりました第三内科学教室に入局しました。  
内科研修後は四方賢一教授の御指導のもと糖尿病性腎  
症の研究を行い、大学院修了後は小出典男教授のもと  
総合診療内科医員として臨床に従事、医療教育統合開  
発センターでは越智浩二教授のもと医学教育分野に携  
わりました。その後米国Thomas Jefferson大学に研究  
留学し、糖尿病性腎症の研究と並行して医学教育セン  
ターのGonnella教授に師事しました。

留学後は平成19年度文部科学省医療人GPに採択さ  
れた「女性を生かすキャリア支援計画」の取組責任者  
として、森田病院長の御支援のもと女性医療人のキャ  
リア支援・復職支援を行い、柔軟な勤務体制の確立、  
病児保育ルームの設立等に取り組みました。この活動  
を通じてNPO法人岡山医師研修支援機構地域医療部  
会、岡山県医師会、岡山県病院協会、岡山県とも連携  
体制を構築することができました。岡山県からは委託  
事業として継続した御支援を頂いております。

平成20年からは金澤右教授、尾崎敏文教授、大塚文  
男教授のもと卒後臨床研修センター副部門長として研  
修プログラムの構築と研修医、学生の支援を行いました。  
平成22年には岡山県の寄付講座である地域医療人  
材育成講座の教授を拝命し、佐藤教授とともに地域医  
療教育に従事しました。地域の医療機関の先生方のあ  
たたかい御支援を頂き「地域で学び、地域で育ち、地  
域を支える」をモットーに地域基盤型教育に取り組む  
中で、地域の先生方の医療にかける思いや後進への親  
身な御指導に触れ、得難い経験をさせていただきました。

ダイバーシティ推進センターは今年度設立され、金  
澤右病院長、大塚文男副病院長の御推薦を頂き同セン  
ター長を拝命いたしました。これまで取り組んできま  
した女性医療人の支援をさらに発展させ、ダイバーシ  
ティの推進や働き方改革に取り組んでまいりたいと存  
じます。このような取り組みは点ではなく地域という  
面での取り組みが肝要と存じます。地域医療提供体制  
を守ることに医療人の健康の両立というミッションを  
果たすべく微力ながら努めてまいりたいと存じます。

末筆となりましたが、これまで教え導いて下さいま  
した恩師の先生方に感謝申し上げるとともに、同窓の  
先生方には、今後とも御指導、御鞭撻を賜りますよう  
何卒宜しくお願い申し上げます。

## 略 歴

平成9年3月 岡山大学医学部医学科卒業  
平成9年9月 公立学校共済組合中国中央病院内科研  
修医

平成15年3月 岡山大学大学院医学研究科（第三内科  
学講座）修了  
平成15年9月 岡山大学医学部歯学部附属病院総合診  
療内科医員  
平成17年8月 岡山大学医療教育統合開発センター助  
手  
平成18年4月 Thomas Jefferson Universityに留学  
平成19年4月 岡山大学医療教育統合開発センター助  
教  
平成20年7月 岡山大学病院卒後臨床研修センター講  
師、同副部門長  
平成22年5月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科地  
域医療人材育成講座教授  
令和2年1月 岡山大学病院ダイバーシティ推進セン  
ター教授



## 医学部創立150周年記念事業

### 岡山大学医学部・病院 創立150周年記念式典開催のご案内

令和2年、岡山大学医学部は創立150周年を迎えました。この長い歴史の中で1万2千余の「すぐれた医師及び医療従事者を輩出し、中国四国地域はもちろん、我が国の医学、医療を支えてまいりました。これもひとえに諸先輩方の長きにわたるご活躍と並々ならぬご支援の賜物に他なりません。

平成22年からの10年間、私たちは、Renaissance Years to the 150<sup>th</sup> Anniversaryとして過去に学ぶと共に新しい時代への礎を構築する活動をしてまいりました。この間、私たちの活動に会員をはじめ関連病院並びに岡山の経済界など多くの方々から、ご理解とご支援をいただきましたこと、篤くお礼申し上げます。

私たちは、これからの50年、100年を貫く機軸をしっかり打ち立て、さらに大きく発展していくことが重要と考えており、ご支援いただきました皆様へのお礼と私たちの決意を表すため、下記のとおり創立150周年記念式典を挙行いたしますので、多数の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

#### 記

岡山大学医学部・病院創立150周年記念式典

日時 令和2年11月3日（火・祝）

13時から18時30分頃まで

会場 ホテルグランヴィア岡山

対象 鶴翔会会員

式次第

記念写真撮影（13時から13時30分：4階「フェニックス」）

記念式典

記念講演

理化学研究所生命機能科学研究センター

濱田博司先生（昭和50年卒）

記念祝賀会（会費1万5千円）

記念式典参加者数は総員で500名を予定しています。記念式典への参加申し込み及び会費は、本誌郵送宛名紙に付加しています郵便振込用紙をご利用ください。また、銀行振り込みによる参加申し込みも可能です。お名前、卒業年次を明記のうえ、次の口座あてにお願

いします。

中国銀行（チュウゴクギンコウ）

清輝橋支店（セイキバシシテン）

支店番号 110

口座番号 普通 1624545

ご不明な点など、お問い合わせは鶴翔会事務局へお願いいたします。

鶴翔会事務局 電話：086-235-7060

FAX：086-235-7052

e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

※みなさまご承知のとおり、COVID-19による影響がどうなるのか見通せない現下の状況であり、それによる変更等が生じる可能性があります。この点、ご高察、ご了承くださいますようお願いいたします。

以上

令和3年4月発行の会報第130号を「150周年記念号」として発行することになりました。

つきましては、150周年にふさわしい思い出に残る記事等がありましたら、下記によりご投稿くださるようお願い申し上げます。

字数：1600～2000字程度（書式は自由）

写真等ありましたらお添えください

締切：令和2年12月28日（月）

提出先：鶴翔会事務局（p93参照）

# 会 員 動 向



## 受 章

- 瑞宝中綬章 (昭32) 河 西 浩 一
- 〃 (昭37) 大 本 堯 史
- 〃 (昭40) 中 野 重 行
- 〃 (旧教員) 岸 幹 二
- 旭日双光章 (昭40) 田 中 茂 人
- 〃 (昭42) 廣 畑 衛
- 瑞宝双光章 (昭33) 青 地 一 郎
- 〃 (昭37) 星 加 晃
- 日本医師会優功賞 (昭41) 清 水 信 義
- 山陽新聞賞 (昭40) 石 川 紘
- 岡山県医師会学術奨励賞 (平21) 槇 本 剛
- 〃 (平31院) 江 尻 健太郎
- 令和元年度社会保険診療報酬支払基金関係功績者厚生労働大臣表彰 (旧教員) 片 山 望
- 令和元年度中国管区警察局長感謝状 (会員) 竹 内 龍 三
- 令和元年度学校保健および学校安全文部科学大臣表彰 (会員) 才 野 進
- 令和元年度労働基準行政関係功労者厚生労働省労働基準局等表彰 (平2) 難 波 靖 治
- 令和元年度公衆衛生事業功労者厚生労働大臣表彰 (会員) 大 西 武 生
- 令和元年度岡山県保健衛生功労表彰
- 岡山県知事表彰
- 公衆衛生 (昭40) 那 須 正 紀
- 〃 (昭44) 野 口 敦
- 〃 (昭47) 平 川 秀 三
- 〃 (昭53) 山 下 浩 一
- 〃 (昭57) 寺 谷 彰 芳
- へき地医療 (会員) 藤 本 喜 史
- 地域医療 (昭44) 島 村 淳之輔
- 〃 (昭44) 三 村 啓 爾

- 地域医療 (昭45院) 橋 本 威 郎
- 救急医療 (平1院) 前 田 徹 也
- 〃 (会員) 河 原 義 文
- 〃 (旧会員) 猶 本 良 夫
- 岡山県保健福祉部長表彰
- 公衆衛生 (昭43) 角 田 昭二郎
- 〃 (昭43) 吉 田 彬 子
- 〃 (昭44) 神 崎 悦 人
- 〃 (昭48院) 牧 山 政 雄
- 〃 (昭52) 野 田 憲 男
- 〃 (昭54) 河 原 伸
- 〃 (昭58) 長 田 建
- 〃 (昭58) 柚 木 正 行
- 〃 (昭61) 上江洲 篤 郎
- 〃 (会員) 宇 治 秀 樹
- 〃 (会員) 武 田 恒 雄
- 〃 (会員) 中 山 堅 吾
- 〃 (会員) 難 波 弘 志

がん征圧事業功労者表彰  
 岡山県知事感謝状 (昭47) 山 本 博  
 岡山県保健福祉部長感謝状 (昭60) 岡 田 富 朗  
 このたびの受賞に対し、会員一同心からお喜び申し上げますとともに、今後益々の御健勝をお祈り致します。  
 ※会員の方が各賞を受賞された場合は事務局にご連絡ください。

## 医学部・病院関係

- 定年退職**
- 病原ウイルス学 山 田 雅 夫
  - 腫瘍ウイルス学 加 藤 宣 之
  - 眼科学 白 神 史 雄
  - 耳鼻咽喉・頭頸部外科学 西 崎 和 則
- 教授就任**
- CKD・CVD地域連携包括医療学 内 田 治 仁
  - ダイバーシティ推進センター 片 岡 仁 美
- 准教授就任**
- 小児急性疾患学 鷺 尾 洋 介
  - 公衆衛生学 久 松 隆 史
  - ゲノム医療総合推進センター 遠 西 大 輔
- 講師就任**
- 放射線科 松 井 裕 輔
  - システム生理学 片野坂 友 紀
  - 薬理学 勅使川原 匡



心臓血管外科  
医療安全管理部

末澤孝徳  
大澤晋

清野正普  
三喜知明

整形外科  
整形外科

菅波由有  
高木航

総合内科学  
循環器内科学

坂本修一  
網岡尚史

消化器外科学  
循環器内科学

黒田和宏  
高尚澤

循環器内科学  
薬理学

福岡省吾  
THE MON LA

放射線医学  
生化学

角田慶一郎  
野村恵美

脳神経内科学  
脳神経内科学

劉夏  
磯岡奈未

脳神経内科学  
脳神経内科学

大森正泰  
皿谷洋祐

脳神経機構学  
消化器・肝臓内科学

高田斎文  
林啓悟

消化器・肝臓内科学  
消化器・肝臓内科学

大岩裕子  
西條昌之

腎・免疫・内分泌代謝内科学  
泌尿器病態学

牧尉太  
大越祐介

産科・婦人科学  
産科・婦人科学

高橋侑子  
池川俊太郎

呼吸器・乳腺内分泌外科学  
呼吸器・乳腺内分泌外科学

小牧稔幸  
杉山聡一

血液・腫瘍・呼吸器内科学  
血液・腫瘍・呼吸器内科学

福原隆一郎  
渡邊謙太

放射線医学  
放射線医学

高橋耕介  
岡崎勇樹

放射線医学  
眼科学

松本尚美  
THU THU HTIKE

整形外科学  
疫学・衛生学

安藤明美  
原田洸

法医学  
総合内科学

施暁雯  
市川啓之

総合内科学  
総合内科学

寺澤裕之  
花房香

脳神経内科学  
循環器内科学

花房香

消化器・肝臓内科学  
発達神経病態学

修士

令和2年3月25日 (医歯薬学総合研究科)

花北大輔  
尾川佳那子

公衆衛生学  
腎・免疫・内分泌代謝内科学

中尾大輝  
坂口和輝

細胞組織学  
人体構成学

寺町一希

システム生理学

関連病院関係

入会

石川病院 (岡山県)

退会

下松中央病院 (山口県)

学位授与

博士

令和1年12月27日 (医歯薬学総合研究科)

栗田佳彦	小児医科学
山口麻里	皮膚科学
大林芳明	精神神経病態学
薬師寺宏匡	細胞化学
石井賢造	麻酔・蘇生学
吉本順子	小児医科学
加藤睦子	細胞組織学
西廣真吾	脳神経外科学
肥後寿夫	血液・腫瘍・呼吸器内科学
谷村智史	腎・免疫・内分泌代謝内科学
福嶋遥佑	小児医科学
杉原悟	皮膚科学
榎本剛	血液・腫瘍・呼吸器内科学
赤木祐介	耳鼻咽喉・頭頸部外科学
長谷川功	総合内科学
本多寛之	総合内科学

令和2年3月25日 (医歯薬学総合研究科)

西山慶子	腫瘍・胸部外科学
久保田暢人	消化器外科学
川瀬宏和	麻酔・蘇生学
平野豊	呼吸器・乳腺内分泌外科学
入江真大	呼吸器・乳腺内分泌外科学
藤本将平	耳鼻咽喉・頭頸部外科学
森下美智子	腎・免疫・内分泌代謝内科学
小谷早葉子	産科・婦人科学
川端隆寛	放射線医学
家田偉史	消化器外科学
金井健吾	耳鼻咽喉・頭頸部外科学
岡崎良紀	整形外科学

稲 葉 晃 帆	システム生理学	岡部 将仁 坪根 遼平 古谷 凌一 脇 翔平
桂 大 輔	システム生理学	岡本 淳志 徳永 拓也 別府 匠 片山 理紗
澁 谷 慎	システム生理学	梶原 優太 友實 健人 許 敬高 久保 遥祐
有 岡 直 紀	細胞生理学	金光 俊 友直 良文 蒔田 郁人 曾田 祐民
柞 磨 亮 太	細胞生理学	北野 小春 土井田 進 檜山 誠人 本田真奈美
藤 井 祐 樹	細胞生理学	木股 由貴 中井 優 松繁 玄暁
向 井 裕 理	細胞生理学	
磯 村 直 弥	病原細菌学	
西 村 飛 音	病原細菌学	
上 田 三 起	疫学・衛生学	
豊 岡 晃 輔	疫学・衛生学	
土 生 裕	疫学・衛生学	
東 隆 司	疫学・衛生学	
藤 永 潤	疫学・衛生学	
滝 本 祥 子	疫学・衛生学	
松 田 憲 之	医療政策・医療経済学	
河 原 星 斗	分子腫瘍学	
塚 本 俊 平	組織機能修復学	

事務局からのお詫びと訂正

昨年10月発行の鶴翔会会報127号において誤りがあ  
りました。下記のとおり訂正し、お詫び申し上げます。

- 9頁 講師就任 中司敦子先生について  
(正) 腎臓・糖尿病・内分泌内科 ← (誤) 眼科
- 20頁 左段7行目  
(正) 大田 浩右 ← (誤) 太田 浩介

令和元年度(令和2年3月)  
岡山大学医学部医学科卒業者

長崎 直也	木村 凧	中居 祐大	松島 萌希
相原 一輝	木村祐理子	中野 克哉	松田 匡雄
小島 将司	栗山 裕	中村 薫	松原 弘樹
廣瀬 安章	皇甫 奈音	中山恵利香	松本 顕
西山 壮	近藤 花織	名村 咲音	丸野 真人
羽井佐康平	近藤 薫	新屋圭一朗	三上 翔平
藤沢 卓弘	斉藤 美瑛	西川 真璃	水澤 洋平
大濱 大瑛	佐々並三紗	西坂 直人	宮澤 慶子
池邊 茉莉	塩原健太郎	西堀雄一朗	宮原 秀彰
諫見 俊宏	渋谷 香苗	佐能 莉苗	宮本 孝平
石川 桃子	フットネン友佳子	波多野陽輝	向井 潤
石原 朋典	進 浩太郎	林 響子	六車 将
一宮 俊文	神 寛樹	藤田 佳奈	村上俊太郎
伊藤 知子	須江 崇彦	馬場 航平	師岡 和輝
井口 京介	スタナツ ショーン	坂東 優希	山口 雅也
今村 勇太	須山 敦仁	平井 唯隆	山田紗佑里
岩佐 賢一	高野 裕太	廣原 真芳	山本 隼究
上園 深希	高橋 侑也	福島 周平	山本 大地
上山 廉起	竹内 隆将	藤枝 弥結	山本 悠生
鶴川 聖也	田中 瑛美	藤岡 大貴	山本 諒
及川 輝	田村 奈悠	藤川 淳	横田 佳奈
大成 千晴	大道 勇介	藤本 淳志	由田 実沙
大西 友紀	都倉加保里	藤本 遼	吉本 史菜
岡 美苗	辻 彩花	藤原 正樹	米澤 尚汰

### 会 員 訃 報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

旧教員	麻 植 浩 樹	2019. 10
旧教員	安 治 敏 樹	2020. 3. 12
昭19専	渡 辺 渡	2020. 3. 20
昭21	梶ヶ谷 保 一	2020. 3. 10
昭23	青 木 徹	2013. 9. 21
昭23専	河 田 謙 二	2020. 2. 29
昭24	藤 本 富士郎	2014. 4. 9
昭24	鈴 木 武	2019. 11. 24
昭24専	広 兼 豊 明	2018. 10. 8
昭24専	高 場 仙 悟	2019. 11. 20
昭25	荃 田 芳 明	2019. 1. 6
昭25専	寺 岡 宏	2018. 12. 23
昭25専	小 野 延 宏	2019. 7. 2
昭25専	田 渕 典 久	2019. 2. 5
昭25専	信 岡 於菟彦	2019. 2. 15
昭26	三 宅 篤	2019. 11. 5
昭26専	藤 原 亀三郎	2019. 8. 22
昭26専	佐 藤 あいこ	2019. 12. 1
昭27	田 坂 賢 二	2018. 10. 7
昭27	中木村 昭 三	2019. 6. 13
昭29	湯之上 茂	2019. 11. 11
昭30	牛 田 達 之	2019. 11. 7
昭30	高 口 眞一郎	2020. 3. 24
昭31	渡 辺 昌 祐	2018. 10. 18
昭32	難 波 英 樹	2019. 11. 2
昭34	藤 井 慶 祐	2019. 7
昭37	鷹 野 護	2019. 9. 18
昭37	渡 辺 晃 次	2020. 3. 14
昭38	杉 田 勝 彦	2019. 12. 19
昭39	斉 藤 章	2019. 8. 2
昭40	片 岡 新	2019. 10. 20
昭40	古 川 哲	2019. 11. 3
昭40	古 元 重 光	2019. 11. 12
昭40	田 中 茂 人	2020. 2. 12
昭42	業 天 洋 三	2019. 10. 24
昭50	長 岡 清	2019. 12. 28
会員	太 田 隆 甫	2019. 9. 21
会員	原 功 一	2020. 1. 9
会員	野 村 正 博	2020. 1. 8
会員	前 田 典 子	2019. 4. 10
会員	鳥 越 波留海	2019. 12. 23



# クラブ報告

## 美術部

美術部部长 藏 満 紘 枝  
昭62 増 山 寿

鶴翔会の皆様には、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

美術部部长で歯学部3回生の藏満より、活動概要を報告させていただきます。

美術部は岡山大学医学部創設当時?からある歴史ある部でしたが、一度廃部になり、2004年に再建されました。故に、実際の歴史は長い一方で、人々の認識では比較的新しいとされ、ギャップを楽しむことのできる部活であると言えます。再建当初は非常に少数の部員で活動していましたが、年々増員し、現在は医学部、歯学部、薬学部の学生及び院生計16名で活動しております。活動内容の豊かさを誇っており、デッサン、水彩、油彩から切り絵や立体作品まで幅広い創作活動を行っております。日々の活動の成果を発信する場として大切にさせていただいているイベントの中でも、特に重要視しているものが半年に1度、春と秋に開催されます。それは、4月にある美術部単独での新入生歓迎展示会と、11月にある写真部との合同による鹿田祭展示会です。両イベント共に、数日間Junko Fukutake Hallにて作品を展示しております。部員の増加と意識の向上に伴い、出展数は増加傾向にあります。また、ご来館いただけるお客様の数も右肩上がりの傾向にあると同時に、出展作品に対するお客様からのアンケート回収数も徐々に増えております。このことから、美術部の知名度が年々上昇しているのではないかと、部員一同歓喜しております。



ここでは知名度上昇に寄与しているであろう通年イベントのうちの1つを紹介させていただきます。それは、岡山大学病院内での作品展示です。写真部と時期交代制ではありますが、3年ほど前から岡山大学病院総合診療棟1Fにて行わせていただいております。多くの方に活動を見ていただく機会をいただけることに、感謝と喜悦の情が溢れております。

最後にはなりますが、鶴翔会の皆さま方には深く御礼申し上げますと共に、美術部のさらなる発展を見守っていただければ幸いです。機会がございましたら部員による展示会に是非足をお運びください。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

2017年より前任の平松祐司教授より引き継ぎ、部の顧問をしております産科婦人科学の増山 寿（昭和62年卒）です。決して美術に造詣が深いわけではありませんが、美術部に刺激を受けて、出張の度に時間があれば各地のMuseumをめぐるようになりました。本物にふれて感性を磨きたいと思っているのですが。。

文化系の部活動としてactiveに活動しております。引き続き美術部へのご支援を宜しくお願ひ申し上げます。

## 鹿田水泳部

主将 竹 川 裕 則

鶴翔会の皆様におかれましては、ご清栄のこととお慶び申し上げます。現在鹿田水泳部の主将を務めさせていただいております、医学部医学科3年の竹川裕則と申します。

鹿田水泳部は医学科（17人）、歯学科（3人）、保健学科（11人）の3つの学科の部員で構成されています。その中でも、スイマーはベストを更新することや大会で得点をとること、マネージャーはスイマー達を支えていくことなど、部員一人一人が目的意識を持ちながら練習に励んでおります。スイマーまたはマネージャーとして、そして一部員として、個々が自分自身の成長のためや目標を達成するためにできること、部活のためにできることを考え、お互いの目標を尊重し合い、高め合いながら、日々の部活動に取り組んでおります。

また、日頃の練習や大会のほか、鹿田祭や夏旅行などの様々な行事を通して、学部の隔たりなく、部員同士のコミュニケーションを深め、チーム力を強めるこ





とができ、さらにはこの経験が有意義な大学生活、ひいては将来社会人ないし医療人となった折にも糧となることを確信しております。

さて昨年の西医体では男子総合2位という好成績を残すことができました。リレーメンバーや決勝に残った人だけでなく、正式ではない部員もベストを更新して雰囲気盛り上げたり、マネージャーもスイマーのサポートに取り組み、水泳部全員の力で勝ち取った男子総合2位であると考えております。今年はその流れを受けてOBの先生方から西医体総合優勝への期待が高まっているのをひしひしと感じております。今年鹿田水泳部が西医体の主幹であり、約1,200人を集めて4日間に渡って行われる大会の運営を任されています。しかしながら西医体の運営をしながらレースで結果を残すことは簡単なことではありません。しっかり前もった入念な準備をして、不測の事態が起きても臨機応変に対応できるようにしたいと考えております。今年例年以上に厳しい西医体となりますが、日頃からのOBの先生方のご支援やご理解へのお返しとして、よりよいご報告ができるよう、部員一丸となって励んでまいります。

最後になりますが、鶴翔会の皆さま方にはこれからも、鹿田水泳部の活動を暖かく見守っていただければ幸いに存じます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。





## 会員のこえ

### 提言

#### ～同窓会報をより良くするために～

昭40 池田重政

年2回発行される岡山医学同窓会報を毎号楽しみに待っている同窓会員である。会報は、母校の様子、引退した私には臨床医学、医学教育の状況を伝えてくれているが、最近では、拝読していても一方的な会報に感じられることもあり、母校との距離が次第に遠く感じられ残念に思っている。そこで、同窓会報がより良くなってほしいという願いを込め、いくつかの提言をしたい。

#### 1) より活発な議論の場に

会報がきっかけになり、母校がより発展するための活発な議論につながっていくことを願っている。そこで、88号(2000年4月)に始まった「編集者への手紙」(医学誌にあるようなLetter to the Editor, Correspondenceに相当する欄)の復活をお願いしたい。私は、投稿原稿や講演時のスライドの最後にメールアドレスを書いているが、読者や聴衆から質問や参考になるコメントがメールアドレスに直接送られてくることを多々経験している。会報原稿に著者の氏名とともにメールアドレスを付記することも提案したいと考えたが、個人情報の問題があるようなので、「編集者への手紙」を利用すれば、個人情報の心配なく意見の交換が出来るようになるのではと考える。このような工夫により、会報の誌面が同じように母校の発展を想う会員同士の活発な議論の場となり、ひいては、母校の様々な領域の発展に繋がってゆくのではないかと考えている。

#### 2) 鶴翔会に新しい風を

人材が風を作り、母校の発展が導かれるように思う。鶴翔会役員、会報編集委員に学外の同窓会員と学生を加えることを提案したい。同窓会の利点は、同じ分野で研鑽してきた幅広い年代、社会的立場の会員がいることにあると思う。常々、会報編集委員の構成が学部教授のみであることで、どうしても医学部を中心とした視点での会報編集となってしまうのではあるまいか

と想っていた。そこで、昨年の鶴翔会総会で、鶴翔会役員、会報編集委員に学外の同窓会員と学生を加えることを提案した(岡山医学同窓会報127号、p.83)。執行部の努力もあり、今年1月の編集会議には、編集委員に選ばれた学生2名が、学生の視点からの企画案を出し、新しい風を持ち込んでいると聞いている。更に30代、40代、50代、60代の各世代の学外の同窓会員の先生方が学外編集委員に加わることを提案したい。幅広い世代、異なった社会的立場にある人材が新しい風を吹かせてくれると思う。学外委員の編集会議への出席に距離、時間的な問題があるのであれば、Skype、FaceTime、電話を使つての編集会議に加わることも出来ると思う。

#### 3) 同窓会報の充実

より深く、建設的な内容の会報とするために編集委員による査読(peer review)をお願いしたい。学外委員の編集会議への出席に距離、時間的な問題はあるが、査読は同窓会事務局にemailで送られてくる原稿を編集委員に転送すれば学内、学外編集委員に差があるとは言えない。査読をすることにより、会報の内容もより間違いのない、建設的なものになると考えている。

毎号同窓会事務局より、「おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています!」との知らせがあるが、会費を納入しているのは、約40%である。会費未納の会員には会報は送られてない現状では、60%の会員は、最近の母校の様子も知り得ることができないばかりか、簡単ではあるが毎年10月発刊の会報で報告される鶴翔会の活動の様子をも知ることも出来ない。このような現状では、150周年記念事業への寄付が、他大学出身者を含む教職員からの寄付が目標額を超えているのとは対比的に、同窓会員からの寄付が一番低いのも理解出来るように思える。

昨年6月の鶴翔会総会で私の「鶴翔会の発展につながるよう見直しと検討をお願いしたい」との発言に対して、同窓会長から「前向きに検討する」との声を聞かせていただいたことから、鶴翔会、会報の新しい発展と変化を期待している。

鶴翔会会長、同窓会報幹事からそれぞれ会報の役割、編集方針を是非聞かせて頂きたいと思っている。一般会員の先生方からは提案、質問やご意見があれば、s40ikeda@gmail.com まで連絡をお願いしたい。

## 目医者をつぶやき 「やまいは世につれ」

昭60 松尾俊彦

2020年4月、私は卒業35年を迎えます。私たちの時代は、大学医学部卒業直後に医師国家試験を受験し、医師免許取得後も2年以上の臨床研修を行うように努める（努力規定）という臨床研修制度下にありましたので、私はこの35年間、眼科畑にどっぷり浸かっていたこととなります。そう短くはないように思える年月ですが、眼疾患の治療ということ言えば、その歴史は紀元前にまでさかのぼることができるそうですし、日本の眼科専門医の源流と言えそうな眼科の流派も南北朝時代には立っていたと言われます。詳しい歴史の話は先人の書に譲るとして、郷土の偉人にまつわる眼病のエピソードを一つ。

岸田吟香。その名をご存知の方も多いと思います。明治のジャーナリスト、事業家、没しておお出身地である現在の久米郡美咲町を「たまごかけごはん」で全国区にしてしまうという、非常に多彩な人物です。幕末に日本を訪れた外国人が、口をそろえて肺病と眼病が極めて多いと記述する社会状況で、彼もまた目を病みます。なかなか治らず苦しむ中で出会ったのがJames Curtis Hepburn。ヘボン式ローマ字のヘボンです。処方された液体目薬は数日で吟香の眼病を治癒させます。この出会いが和英辞書『和英語林集成』と点眼薬「精鑄水（せいきすい）」を生みました。ヘボン博士直伝と触れ込んだ硫酸亜鉛の水溶液は、眼病が蔓延する当時、爆発的に売れたといえます。

時代とともに社会環境が変わり、衛生・栄養状態の改善や医学の進歩に伴う治療の変化がみられ、疾病の動向も移っていくように感じられます。私が経験した35年、眼科領域の疾患に限っても頻度が変わらないものあれば、大きく変わった疾患もあります。

眼科の中で変わらないのは白内障手術の多さかもしれません。白内障手術の歴史は古く、日本でも平安時代末期、『病草子』の「眼病の男」に医療行為と思しき図が描かれています。残念ながらこの男がかかったのはニセ医者で、失明してしまったという話のようですが、昔も今もという病です。一方、関節リウマチの眼合併症として有名な強膜炎は、最近は見なくなりました。メソトレキセートや生物学的製剤の登場で関節リウマチのコントロールがよくなり、合併症が減った影響でしょうか。また、激しい糖尿病網膜症も見なく

なりました。1型糖尿病ではインスリン治療が適切にできるようになり、2型糖尿病では新機序の内服薬が出たことによってコントロールがよくなり、網膜症の急激な進行悪化がなくなったのではないかと推察します。2000年に入ったあたりまで、硝子体手術と言えば、増殖糖尿病網膜症による硝子体出血が多かったのですが、最近では糖尿病網膜症に対して硝子体手術を行うことは、ほぼなくなりました。

眼球は身体の一部なので、全身疾患の治療状況を如実に反映して眼疾患が現れます。逆に言えば、目から全身の疾病を覗くことができます。目医者歴35年を経て、まさに「目は全身の窓」だと痛感します。大学病院で継続して診療をしていますので、内科関連の眼合併症（眼疾患）をみることも多いためかもしれませんし、他科と同じように専門性が重視されてきた眼科診療で、専門外来として「ぶどう膜炎外来」「眼腫瘍外来」「小児眼科外来」を担当してきたために、そんな思いが強くなったのかもしれません。

今年2020年の話題では、新型コロナウイルス（COVID-19）。この文章を書いている今も、感染拡大についての報道が続いています。このウイルス感染でも、インフルエンザや Dengue 熱と同じように結膜炎が起きます。ウイルスは、陽性患者の結膜涙液からも排出されますし、逆に結膜からも侵入します。ですから、医療従事者は目も防護する必要があります。危機に対する欧米学会の機動性には驚かされることが多いのですが、今回の事態に際しても、アメリカ眼科学会（American Academy of Ophthalmology）の会員緊急メールが、1月29日付で私の元に届きました。結膜炎を診た場合、発熱があればCOVID-19も疑うべしという注意を喚起する内容でした。目医者松尾としては、通常行っている標準予防策に加えて、診察室のドアの内外の取手を1時間ごとにアルコールで拭くことをしながら診療しています。

やまいは世につれ、身体の窓を覗く目医者の旅は続きます。



# 会員の近況

## ミャンマー国エーヤワディー 管区チャウンゴン郡区における 准助産師の育成と成果

認定特定非営利活動法人「日本・ミャンマー  
医療人育成支援協会 (MJCP)」理事長

昭39 岡田 茂

### はじめに

ミャンマー国の医療については現在も多くの問題を抱えているが、全人口の70%を擁し、国土の大部分を占める農村部とその間に点在する都市部における医療格差は大きい。例えば、都市部平均寿命は男子66歳、女子71歳に対して農村部ではそれぞれ64歳と68歳であり、すべての国民が関連する周産期の医療においては、乳児（1歳未満）の死亡は出生1000人に対して都市部18人、農村部36人であり、幼児（5歳未満）死亡率はそれぞれ42人、80人となっている。母体死亡率においても1.31人から3.23人と大きく差がある（Myanmar Demographic and Health Survey 2015-2016, ミャンマー保健スポーツ省より）。ちなみに2017年における日本人の平均寿命は男子81歳、女子87歳であり、乳児死亡は2人、幼児死亡は4人、妊婦死亡は0.027人であった。

医療は国民の安心・安全にとって最も重要な行政部門であり、2011年軍事政権が終了し、それまでなおざりにされていた医療環境の向上も図られている。しかし、農村部の急激な改善はむつかしく、これらの地域ではボランティア保健活動が重要な働きをしている。

私たちは医療環境の整備がおこなわれているエーヤワディー管区のチャウンゴン (Kyaung-gon) タウンシップにおいてボランティア准助産師の育成を進め、無医療村の解消と啓蒙活動において一定の効果をおさめることができた。

今回はその経緯と得られた効果について報告する。

### ミャンマー農村の医療システム

ミャンマーは行政的には7管区（ビルマ族が多い地域）と7州（少数民族の名称を冠する地域）から構成される。管区・州は合計330のタウンシップ (township、郡区) に分けられており、各タウンシップには約20万人の人口が含まれ、都市部と農村部 (ward, village) が区別される。

典型的なタウンシップの医療システムを表1に示す。中心の都市には25-50ベッドのタウンシップ病院があり、母子保健センターが存在することもある。農村部では、1-2か所のステーション病院の下に直接住民と接触する地域保健センター (Rural Health Centre, 以下RHC)、およびその下部には村の数に応じていくつものSub-RHCがある。住民の、傷の手当、産前検診と分娩サービス、乳児検診、予防接種、学校の保健指導、感染症の予防活動などあらゆる保健指導を行っている。

しかし、実際にはミャンマー国全体において医療人材は不足しており、この農村部医療システムのなかで定員が完全に確保されている所は無いに等しい。特に、助産能力を持つ医療人材 (医師、看護師、助産師) は不足しており、Sub-Centreは建物すら存在しない村落もあり、住民の求める医療サービスは困難を極めていく。単独出産における事故 (助産師の補助なしの出産) がミャンマー疾病原因の第3位 (2014年、ミャンマー保健省統計) にあがっていることを見るだけでも問題点が多いことがわかる。ちなみに、1位、2位はそれ

表1 ミャンマーの行政単位であるタウンシップ (郡区) における医療施設の典型例

医療施設	ベッド数	数	スタッフ内訳
タウンシップ病院	20-50	1	タウンシップ医務官、 医師 (2-4人)
ステーション病院	16	1-2	医師 (1人)、 看護師 (2-3人)
母子保健センター	0	0-1	助産師
地域保健センター (RHC)	0	4-5	HA (責任者)、LHV、 PHS-1、助産師ら計3-5人
地域補助保健センター (SRHC)	0	10-30	PHS-2、助産師

RHC = Rural Health Centre, SRHC = Sub-RHC, HA = Health Assistant, University of Community Health 卒業生、LHV = Lady Health Visitor, 9カ月の研修後資格を得る、PHS-1 = Public Health Supervisor-1, 1年の研修後資格を得る、PHS-2 = Public Health Supervisor-2, 6カ月の研修後資格を得る。看護師、助産師は全国約50か所の看護学校、助産師学校で看護師3-4年、助産師1.5年間の教育を受け、資格を得る。養成所は保健・スポーツ省が管理しており、時代の流れにより卒業生の数は変動する。



ぞれ外傷・交通事故および妊娠・出産に関わる合併症であった。

ミャンマーの「国民健康プラン1977-78」が着手されて以来、農村医療では医療ボランティアの育成も重要な目標となっている。医療ボランティアには地域保健ワーカー（community health worker, CHW）と准助産師（auxiliary midwife, AMW）がある。いずれも医療の行き渡っていない村落から選ばれており、その出身地域と上部の医療機関を結ぶ役割を果たしている。それぞれRHCやSub-Centreの指導の下に保健衛生活動や助産業務を実施している。

CHWに対しては1カ月間、基本的な医療看護、病気の監視と制御、健康増進を行うための研修を行っている。AMWはこの国でボランティア医療活動のグループとしては最も大きいものであり、6カ月間の研修で資格を得る。保健省の指導により1978年に研修が開始された。無医療村出身の高校卒以上の学歴を有する者が対象となっている。AMWは正常出産を補助し、異常の見られる妊婦に関しては早期に上部医療機関へ紹介し、妊婦に対して、産前検診、ワクチン接種、栄養指導、出産準備、母乳栄養とか産後のケアにあたる。

**エーヤワディー管区での准助産師育成のための「あかね奨学金」**

以上の背景の下に、私たち認定特定非営利活動法人「日本・ミャンマー医療人育成支援協会（MJCP）」は2014年「農村地域の母子保健を強化するために、AMWの研修を行い、医療の行き渡っていない村落と医療の存在しない村落に配置する」という目標をたて、西山照子理事を委員長とする「あかね基金」を設立した。ミャンマー側の協働機関は「ミャンマー国民健康財団（People's Health Foundation, PHF、理事長Dr. Than Sein）」および「ミャンマー保健省保健局」である。

AMWの研修プログラムの実施地域として、保健省保健局AMW研修の計画書により、最も多くのAMW研修、配置が必要とされるエーヤワディー管区を選んだ。エーヤワディー管区内では5つのタウンシップが最も必要とされるが、私たちはこの中からチャウンゴン（Kyaung-gon）を選んだ。この地域はAMWの配置が最も必要とされる地域であるばかりではなく、地元からの要望が強く、協力が期待できること、タウンシップ病院の受け入れ設備、宿舎が整っており、タウンシップ医務官などス

タッフの教育意欲も強かったことなどがあげられる。

研修プログラムは、年間20人で5年間に計100人のAMWの育成を行動目標とした。各年、タウンシップの選考委員会が20名の村落出身女性を「あかね奨学生」として選び、チャウンゴンタウンシップ病院（タウンシップ医務官Dr. Aye Naing）にて研修を行うこととした。年間20人の研修費用としては、「あかね基金」にて計上し、PHF、保健省保健局、MJCPの協議を経て次の通り承認された（表2）。

表2 年間20人の准助産師養成費用の概算

項目	必要費用概算（米ドル）
1. 研修生費用	9,000
2. 指導費用	1,600
3. 宿舎費用	800
4. モニター/評価費用	600
合計	12,000

当面の授業計画作成とその実施はタウンシップ保健局長の責任で行い、「あかね基金」の提案として宿舎へ2段式ベッドを設置すること、6カ月の研修終了後はヤンゴンにおいて修了祝賀会を開催することなども提案した。

**准助産師（AMW）研修の開始は2015年3月10日**

エーヤワディー管区チャウンゴンはヤンゴンのほぼ西に位置し（図1）、車で約3時間の場所だ。人口は約17.3万（市街部1万4千、農村部15万9千）で、医療機関としてはタウンシップ病院（50ベッド）1、ステーション病院（16ベッド）2、母子保健センター1、RHC 9、SRHC 43、歯科医院 3、開業医 6を持つ典型的なタウンシップの一つだ。

研修開始（写真1）は2015年。第1期生は20人の予定であったが、ミャンマー国民健康財団の15人が追加され35人が1期生となった。写真は第1期生の授業開

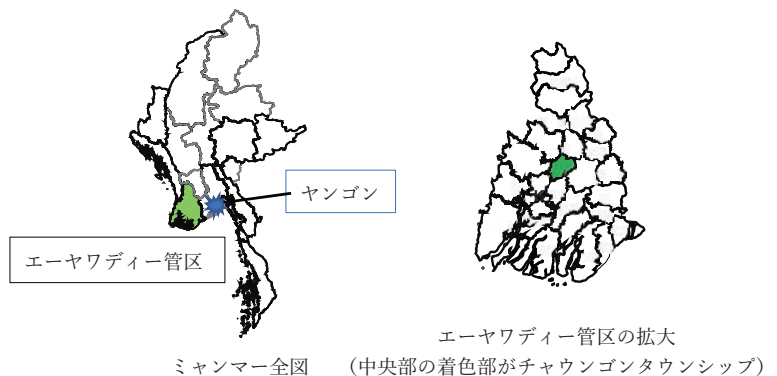


図1 エーヤワディー管区とチャウンゴンタウンシップ



始式。これらの研修生は6カ月の研修を終え、同年10月7、8日にヤンゴンに全員招待し、パンダホテルで祝賀会、国民健康財団で修了式を行った（写真2）。修了生には協会より「助産セット（お産に出かけるときに必要な医療器具一式、血圧計、聴診器、小児体重計、糸、針、メス、トレイ等々）」を各人に贈呈し、この後の活動の助けとした。

### チャウンゴンにおける准助産師の教育と成果

その後順調に教育は進み、入学式は毎年4月チャウンゴンタウンシップ病院で、修了式と祝賀会はヤンゴン市内で開催した。2019年4月第5期生100人の始業式を行い（写真3）、10月にこれまでの修了生も含めてヤンゴンに招待し、チャウンゴンタウンシップにおける准助産師育成のプログラムを終了した（写真4）。最終年における修了式には過去の修了生も招待し、多くの医療関係者も出席した。また、この最後の活動に



写真1 AMW第1期生たち。中央列は日本からの参加者、国民健康財団、教員など。



宿舎。（左）大部屋にござ一枚の簡素なものであったが、（右）私たちは棚付きのベッドを寄付して過ごしやすい環境とした。



写真2 修了式における第1期生 地元の関係者も多く集り、テレビなどの取材もあった。



表3 粗出生率、粗死亡率は人口1,000当たりの出生数、死亡者数を表す。乳児死亡率は1,000の生存出産に対する1歳以下死亡数、幼児死亡率は1,000の生存出産に対する5歳以下死亡数、母体死亡率は1,000の生存出産に対する母体の死亡数

項目 \ 年	2014	2015	2016	2017	2018
粗出生率	17	16.9	16.5	18.5	17.4
粗死亡率	6	5.9	5.9	6.2	5.5
全出産100に対する流産の数	4.6	3.7	3.3	2.4	2.8
乳児死亡率	13.6	20.4	14	18.3	15.4
幼児死亡率	15	23.9	16.5	23.3	17.4
母体死亡率	1.4	1.3	1.1	1.6	0.33

は岡山県主催の「岡山発国際貢献活動推進事業」からの支援も得た（写真4）。

17.3万の人口を有するチャウンゴントウンシップにおける出産に関わる統計（表3）をみると、2014年（プロジェクト開始前年）から5年間において、粗死亡率、粗出生率、乳児死亡率、幼児死亡率には大きな変動は見られないが、流産の数は漸減傾向がみられ、母体死亡は2018年には激減しているのが見える。

AMW育成の最終年度における修了式には過去の修了生もヤンゴンに招待して全員で祝いをした。その際に全員に質問を行ったところ、異常例はほとんどすべて自分たちが教育を受けたタウンシップ病院に紹介することができた、との回答があった。異常妊娠を早期に見出し、それを上級病院に紹介可能なシステムが構築されたことがこの育成の最も大きな成果であろうと思える。

今後の計画

チャウンゴントウンシップにおけるAMW育成が成

果をあげ、この病院がミャンマー保健省より表彰を受けたとの知らせを受けた。また、5年計画修了にあたり、この研修計画を継続して欲しいという要望もあり、話し合いを続けた結果、2020年度より3年間の計画でチャウンゴンの南に位置するミヤウンミヤで年間20人、計60人のAMW育成計画がまとまった。

終わりに

出産は女性の一生においては最大事業の一つとあってよい。そして、日本における現在の姿の助産師に至るまでには長い歴史がある。取り上げばあさん、産婆さん、助産婦さんの名称がそれぞれの時代を反映して残っている。また、私の若いころには「産後の肥立ちが悪くて……」という言葉もよく聞かれた。現在でもミャンマーの農村部における出産はまさにその時代にある。私たちの些細な力により100の村が安心のできる病院と直結した村に変わってきたのだと思っている。ミャンマーの医療環境が良くなり准看護師AMWがもう必要ない、という時代が理想的であると私は考えている。しかし未だその兆しは見えない。それまでは私たちの小さな努力が活かされるように祈っている。また、医療に関心を持つ若い人がこのような中から生まれて、これから日本の介護に力を貸してくれることも期待している。

チャウンゴン准助産師育成を可能にした「あかね基金」の確保に関しては西山委員長の方多額な寄付に加えて、会員、同窓会の皆さまからも多大な支援を頂きました。ここに改めてお礼を申し上げます。また、これからも引き続きよろしくご支援ください。



写真3 第5期生研修開始。写真左：地元の婦人団体も応援に駆けつけてくれて研修生にお土産を。  
写真右：ミャンマー健康財団理事長タンセイ氏（左）と筆者



写真4 写真上；第5期修了生記念写真。修了生（前列）、教員支援者（中列）、支援者、旧修了生（後列）  
写真下：左 修了生に対するテレビインタビュー、右 祝賀会ではカラオケ、民族舞踊を披露してくれた。



## 同期会だより

### 昭和26年卒のクラス会報告

昭26 奥村修三

現存（昨年10月）のクラス員は17名です。今回も例年の会を平成元年10月27日、グランヴィア岡山で計画

したところ、参加者は5名と急減でした。少人数でも楽しい時を過ごせたのですが、参加困難の理由は病気療養中の2人以外は歩行困難、旅行に自信がない、が大部分で、最近問題のロコモティブシンドロームが主なものでした。

残念でしたが卒後68年90歳台前半ともなるとこれも普通か、お互いに連絡が取れるところはまだむしろ元気な集団と言えるかも知れません。無理をして転倒などの事故も心配なので全体の集まりは今回で終わり、あとは地区での小集会和音信連絡を続けることになりました。just fade away です。

### 昭和28年卒・クラス会

昭28 矢部芳郎

昭和28年（1953年）に卒業したものが、今年（令和元年（2019年）11月9日）も、集まりました。出席者は、岡島邦雄、北中 創、松田 穆、物部大成、矢部芳郎の5名。死去した級友の名前を読み上げ、追憶しながら黙祷（同期卒業、77名；物故者51名：昨年度から今年度までの間に、死去との連絡のあった級友は、山崎 巖、齒朶尾正幸の2名）。そして、会食しながら、各人の近況や級友の思い出などを話しました。全員90歳以上ですが、「出来れば、来年も会おう！」と言って、散会しました。



写真：前列・左より、岡島邦雄、松田 穆、物部大成；  
後列・左より、北中 創、矢部芳郎

### 昭和34年卒業「ねぶち会」

令和元年10月26日開催

### 医学部創立150年記念事業に寄付を決定

昭34 瀧谷泰博

令和元年を迎えた「ねぶち会」は10月26日（土）ホテルグランヴィア岡山で、21名と夫人3名の計24名の参加により開催された。出席者による記念撮影が終わり、情報交換会を開始。まず、藤原会長は「毎年の出席者はほぼ固定しましたが、お元気な先生方のお顔を拝見し、一同が無事に迎えた85歳の令和を喜びたい」と告げられた。ねぶち会の運営は、高利子時代に積み

立てられた基金により実施されてきた実績がある。基金の一部を切り崩し、30万円を「医学部創立150周年ルネサンス基金」として寄付することに、全員一同の賛成により決定した。

メイン料理はフォアグラソテーで味付けした和牛ひれ肉を赤ワインで味わいながら、ホテル自慢のフランス料理を終えた頃、参加者から出品された美術展が始まる。最初は城戸先生による富士山シリーズ。傘富士、赤富士と移り変わる富士を丹念に捉えた見事な作品である。佐藤先生は日本の四季を新緑の上高地から紅葉の大沼公園と美しいトーンに仕上げられている。鳥を追う田中先生による生き生きとしたカワセミや鶴の生息は、あたかも間近に見るようであった。自然を美しく捉える松森先生の今回は、喧騒の始まる鶴橋周辺の

ガード下を描いた侘しい風情である「写真1」。瀧谷は8月にリトアニアで開催された世界医師テニス大会に参加し、元気に踊る医師たちや白夜に集う若者の北欧からのスナップである。最後の山本先生は大島の盆踊りを、角度を変えながらトーンを落としたモノクロにして、闇の中に溶け込むような印象を感じさせてくれる。次は、大崎先生の大作、「気力・体力・努力・運」と大きな筆による畳一枚の書である。気力と体力が充実し、努力を重ねると、女神が運を持ち込み助けてくれる。老いゆく我々を鼓舞するような力強い書である「写真2」。

田中先生の司会により、個人の近況報告が始まる。多くの先生は過去に経験した病氣や闘病の話が多くなる。久振りに参加されたX先生は、前立腺と結腸のガンから回復されたそうだ。その組織所見を尋ねると、「？」の返事でした。山男のY先生は60歳代後半から本格的な山歩きを再開され、平均寿命を前にして、「深田久弥の日本百名山」を達成された。引き続き、四国遍路や島並み街道を踏破されている。

ねぶち会のメンバーの多くは昭和9年生まれで構成される。これまでに亡くなられた先生は卒業時の83人

中35人の42%である。83人中9人は女性で、何れも健在なので、男性74人中35人の先生方が亡くなられ、半数近い46.6%となる。医師群の死亡も性差の影響を伺わせている。42歳の厄年前に亡くなられた2人は、臓器不全による急逝？。50歳を待たずに亡くなられた先生は5人で、多くは悪性腫瘍であった。それ以後、後期高齢者となる75歳までに10人の先生が不幸を迎えられた。多くは生活習慣病ではなかろうか。平均寿命を超えた81歳代から、毎年2人から3人が亡くなられている。令和元年に安井邦昌、岩浅茂夫、石川 充の諸先生が亡くなられた。石川先生は6月末に欠席の返事を届けられたが、7月7日に急逝された。心よりご冥福をお祈りします。女性医師は9人の全員が健在であり、女性の平均寿命を是非超えてもらいたい。

岡山大学医学部は創立150周年に向けて、記念事業を計画し「ルネッサンス基金」を募集している。今年のねぶち会は医学部創立を記念し、総額30万円を11月7日に寄付した。これは母校の充実と発展を心より願う、ねぶち会の総意であった。

翌日曜日は好天に恵まれ、椎名先生のお世話で一年ぶりのゴルフを倉敷カントリークラブで開催した。参

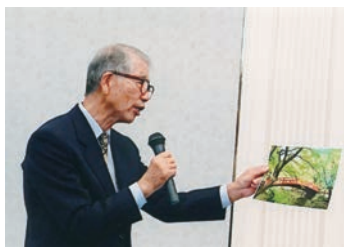


写真1 松森先生



写真3 左から、佐藤夫人、亀山先生、椎名先生、産賀先生、瀧谷夫人の女性連です。



写真4 来年の相談をする幹事。左から、関、藤原、田中の各先生



写真2 大崎先生の書を背景に、真鍋先生





加者は世話役の椎名。そして、大崎、香川の今井、姫路の瀧谷の諸先生である。飛距離は十分とは言えないが、確実に前へ前へと進みながら、無事に18ホールを

終了。昔を語り、身体を動かすことが、健康寿命に繋がることを確認しながら、令和を重ねる希望を一同約束した次第である。

## 37会同窓会

昭37 日 野 博 夫

令和元年11月の良く晴れた日に、高松で同窓会を行いました。37会同窓会は、毎年各地持ち回りで行ってききましたが、鶴翔会会報に投稿することを数年間怠っていました。去年は静岡で勝俣君が、一昨年は京都で古賀さんのお世話というように、広島、山口、姫路、福井、奈良と楽しい集いを続けてきました。今回は6年振りに香川で集まることになり同伴者7名を含む32名が11月9日（土）にホテルクレメント高松に集まりました。宴会に先立ち今年亡くなった福島泰資君と鷹野護君の冥福を祈り黙とうを捧げました。思えば6年前の香川での37会には、同伴者12名を含む46名が集まったのですが、今回はそのうち7名が西の方に旅立っていました。乾杯に先立ち私がフルーツで「千の風になって」を奏でたところ皆は目をつぶって静かに亡き友を偲んでいました。

乾杯は今回、瑞宝中授章の叙勲を受けた大本堯史君にお願いしました。彼の立派な業績を称賛して一同が心からの拍手を送りました。

会うと一瞬にしてタイムスリップして青春時代に還り、尽きぬお喋りと幸せいっぱい笑顔が会場にあふれるのはいつもの光景でした。歳のことも考えて、今回は二次会の席を設けず、早く休んで明日のエキスカッションに備えようという予定でしたが、三々五々とプライベートに二次会が行われたようです。

翌日はバスでの小旅行です。坂出の瀬戸大橋の袂にある東山魁夷美術館で丁度都合よく特別展が開かれており、思いもかけず魁夷の作品だけではなく横山大観、松村松園、杉山寧等々日本画の大家たちの作品を堪能することができました。自分の好みの画家の作品からしばらく動こうともしないで見入っていた人たちもいました。瀬戸大橋の見える絶景ポイントの喫茶室から抹茶を楽しみながらお喋りをする一団が微笑ましいひと時です。

続いてバスは丸亀の万象園に向かいました。丸亀藩京極家の別邸であったこの庭園は京極家の先祖の地である琵琶湖を模した八景池と樹齢400年を超える傘松、茶室の観潮楼などがあり見どころは多いが、なにしろ足弱の人も多く早々に引き上げ庭園に付属する味処「懐風亭」での昼食となりました。讃岐うどんを含む山海の珍味に舌鼓を打ちながらも、ここでも尽きぬ思い出話に、しみりしたり笑い転げたりと楽しいひと時を過ごしたものです。

次は弘法大師の生誕の地、善通寺を訪れました。同じ弘法大師ゆかりの東寺とくらべると、やや小ぶりながら美しく壮大な五重の塔や、御大師様をご存命の頃から生えている大きな楠木などに感動しながら、信心深い四国遍路12回という大先達の浜家君を先頭に堂塔伽藍を参拝して回りました。

高松駅で解散するときそれぞれが「ああ楽しかった。良かったなあ。また会おうな。」と特別な笑顔で肩を抱き合う光景が印象的でした。来年の37会は松山で行う予定です。



**平成11年卒同級生  
内田治仁君教授就任祝賀会  
令和元年11月17日（日）  
於 Restaurant Lionni**

平11 原 田 馨 太

前回平成26年に、卒業初めて学年全体の同窓会を行った際、次回は同級生の誰かが教授になった時に祝いを兼ねて開催しようという約束にしておりました。

それから5年。今回遂に、令和元年11月1日付けで、同級生の内田治仁君が、それまで准教授として在籍していた、母校の寄付講座「CKD・CVD地域連携包括医療学講座」の教授に就任（昇任）しました。

満を持して同級生教授第一号が誕生したもので、ド派手にお祝いの会をおち上げようかと思ひ花火まで用意しかけていたのですが、本人から「あまり大げさにやらないで欲しい」という希望があり、現在岡山大学にいる人と岡山市内在住の数人とでミニ同窓会を開催

し、ささやかで品のいいお祝いを行いました。

やるなら話題がホットなうちが良いと、就任が決まってから1か月弱の短期間で人集めをしたのに拘わらず、30名近い同級生が集い、上品ななかにも賑やかで楽しい同窓会になりました。

会の途中では、出席者一人ひとりにマイクを回して、近況報告（9割）と、内田君への祝辞（1割くらい）を述べてもらいました。学生時代の内田君との知られざる思い出や、意外な一面をうかがわせるエピソードが多数飛び出し、なかなか面白かったですね。それにしても卒業してから20年も経つと、普段人前で喋る機会が増えているのでしょうか。皆さんスピーチが上手になっていることに、お互いとても感心しました。

最後に内田教授に花束と記念品（この会の集合写真を教授室に飾るための写真立て）の贈呈を行い、就任挨拶をしてもらいました。これがまた出席者一人ひとりの名前を盛り込む気の遣いようで、うちーの人柄がにじみ出るようなスピーチでございました。

主役の内田君が喜んでくれたのが何より良かったですが、こうして集まるきっかけを作ってくれたうちーに我々も感謝しつつ、とても幸せな時間を過ごしました。





## 関連病院だより

### 医療法人東浩会 石川病院

院長 石川 泰 祐

この度は、岡山大学医学部の関連病院としてご承認いただき、誠にありがとうございます。

医療法人東浩会は、津山市東部に位置し在宅療養支援病院である石川病院を中核として、併設している老人保健施設のぞみ苑、訪問看護ステーションこだま、居宅介護支援事業所すばるや地域の様々な医療機関と連携し、地域のひとが健康で良質な生活を送れるように、在宅から入院まで包括的に医療・介護を提供しています。

当院は、戦後間もない昭和21年に、初代院長石川浩によって設立された診療所から始まり、平成28年に現在地へ新築全面移転を行いました。診療科は、内科、消化器・肝臓内科、糖尿病内科、循環器内科、人工透析内科の構成です。

職員数：214名

医師数：常勤医3名、非常勤医5名

薬剤師3名、保健師6名、看護師62名、准看護師8名、介護スタッフ56名（うち介護福祉士28名）

管理栄養士4名、栄養士3名、リハビリセラピスト17名

放射線技師2名、臨床検査技師3名、介護支援専門員4名、臨床工学技士3名、他43名



#### ■外来 2018年度実績

平均患者数	92.0人／日
救急車受入件数	103件／年
健診	1,149件／年

#### ■入院

一般病床（28床）	地域包括ケア病棟入院基本料1
平均患者数	25.8人／日
稼働率	92.1%
在宅復帰率	90.0%
療養病床（40床）	療養病棟入院基本料1
平均患者数	38.2人／日
稼働率	95.5%

#### ■透析

人工透析（12床）	
平均患者数	17.9人／日

私たちは”母の手”のように  
愛情と優しさのある医療・介護をめざします。

当法人の基本理念ですが、これは医療・看護・介護の基本は“人”であり、古来より赤ちゃんを慈しむ母の手にあるとの想いです。

私たちは患者さまに対し、あたかも母の手の温もりを感じることができるような、優しい態度や温かい気持ちで接することを常日頃より心がけています。皆様方に愛され、信頼される医療・福祉機関を目指して、職員一同一層専心努力してまいります。

岡山大学関連病院の皆様には今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

## 支部だより

### 令和元年兵庫県鶴翔会総会

神戸支部長  
山本満雄(昭52)

令和元年9月8日(日)に兵庫県鶴翔会総会が神戸支部担当で開かれました。兵庫県鶴翔会は西播地区、神戸地区、阪神地区の3支部よりなり、順番に総会を各地区が交代で開催しています。本年度は神戸支部が担当となり、新神戸駅近くのANAクラウンプラザホテル神戸にて午後2時より開催しました。参加者は、20名でした。

総会は初めに昨年度亡くなられた兵庫県鶴翔会会員への黙祷が行われました。総会開会のあいさつに続いて、鶴翔会事務局長の妹尾様より「岡山大学の近況」をお話いただきました。2020年には岡山大学医学部創立150周年を迎えます。基本方針として、人材育成・教育事業による世界で活躍する医療人の育成、患者さんご家族が安心して治療を受けられるように、岡山大学医学部として効率的医療の提供や先進医療の開発と提供などがあげられています。現在、臨床研究、橋渡し研究、ゲノム医療などで国から中四国地方唯一の中核拠点病院として認められています。医学教育では診療参加型臨床実習の拡充など国際水準に適合した教育カリキュラム改革を推進しています。また、学部教育から大学院教育と初期研修へのシームレスな接続を実現しています。岡大卒業生として非常に心強く思いました。

今回の特別講演は、岡山大学心臓血管外科教授 笠原真悟先生に「岡山大学心臓血管外科ー過去からの継承と新たな展開」と題して講演いただきました。岡山大学心臓血管外科では新生児手術や複雑心奇形の手術症例が年間350例と豊富であり、全国で有数の先天性心疾患に対する外科治療できる大学病院になっています。特に左心低形成症候群に対するノルウッド佐野手術を用いた第一期手術は150例を超え、その成功率は92%、過去3年間死亡率ゼロと非常に良好な成績をあげています。その他の得意分野は、胸部・腹部大動脈の外科治療や血管内視鏡治療、カテーテルによる心房中隔欠損症・動脈管開存症閉鎖術が挙げられます。カテーテルによる心房中隔欠損閉鎖は日本におけるトップレベルの症例数を誇っています。臨床研究として、心筋内幹細胞を用いた先天性心疾患に対する再生医療が進んでおり実用化が目前です。そのほか笠原先生が教授就任後、先天性心疾患のみならず、冠動脈疾患や心臓弁膜症などの成人心疾患の外科治療にも力を入れておられ、年々症例数が増加してきているそうです。岡山大学心臓血管外科分野の先進的な功績に大きな感銘を受けました。

講演会後に集合写真を撮りました。阪神支部長朝比奈勝先生(昭和24)、西播支部長瀧谷泰博先生(昭和34)等大先輩にご出席いただき、深く感謝いたします。懇親会は、笠原真悟先生と妹尾事務局長にも参加していただき、西播支部長瀧谷泰博先生の乾杯のあいさつで始まりました。そののち、参加者各自登壇してもらった自己紹介も、少しお酒が入ったためか和気あいあいとした中で行われました。出席された先生方々の歓談とお互いの旧交を深め、非常に和やかなうちに無事終了いたしました。最後に総会のお世話、司会進行をいただいた神戸大学麻酔科教授 溝渕知司先生(昭和60)に深謝いたします。





## 令和元年度 鶴翔会山口県支部総会報告

岩国医療センター  
青 雅 一 (会員)

令和元年12月1日、鶴翔会山口県支部総会が国立病院機構岩国医療センター看護学校において開催されました。山口県支部には現在220名の会員が在籍しており、当日は42名が出席しました。谷本光音支部長（昭52）の挨拶に続き、庶務報告では会員の動向と物故会員の報告がありました。また今年度も、椎木保人先生（昭25）、岡村進介先生（昭39）、荒木文雄先生（昭24）の3名の先輩方がご逝去なさいましたので、黙祷を捧げ御冥福をお祈りしました。このあと会計報告と監査報告が行われました。平成30年度の会費納入率は91.3%と、これまで以上に高い結果となっていました。

続いて特別講演にうつり、岡山大学理事・副学長であり泌尿器病態学教授の那須保友先生をお迎えして「高齢化社会における岡山大学のチャレンジー革新的医療技術創出拠点からCMA-OkayamaそしてSDGsー」と題してご講演いただきました。ご講演の

中で、時折古い写真や日本酒愛好会の話題を交えながら、「岡山大学のチャレンジは医学部の牽引が必要」など次々と興味深いお話を頂き、時の経つのも忘れて拝聴いたしました。また、男性更年期についてもご紹介がありましたが、該当年齢の先生方からはため息とも言えない様々な反応が窺えました。二つ目の特別講演として、同窓会事務局長の妹尾行恭様より「岡山大学医学部の現況」と題した岡山大学の近況報告を拝聴しました。岡山大学医学部創立150周年記念事業ほか様々な取り組みや業績についてご紹介され、最後に「医学部を志す受験生にはぜひ岡山大学を勧めるよう」とのご依頼を頂きました。

総会の最後に新入会員の紹介があり、初期研修医の先生方から自己紹介がありました。

総会に続いて別室に移って写真撮影のあと、三井清先生（昭36）に乾杯のご発声を頂き、和やかに懇親会が開催されました。那須教授と妹尾様にはご多忙の中、最後までお付き合ひいただきました。岩国の酒「雁木」と「五橋」をご堪能いただけたかと思います。

最後に山口宇部医療センター院長の亀井治人先生（昭59）から閉会のご挨拶を頂き、本年も盛会裏に総会を終えることができました。



## 鶴翔会東海支部総会：分け隔てなく 同窓が集まることを祈念して

東海支部静岡県幹事  
平 川 聡 史 (平8)

鶴翔会東海支部では、井上喜久男支部長の下、名古

屋及び近郊でご活躍されている先生方が集まり、旧交を深め、活発に交流されています。特に愛知医科大学、藤田医科大学及び愛知県がんセンターを始めとする施設で、岡山大学ご出身の先生方が研究及び診療にご活躍されています。令和元年11月16日、名鉄グランドホテルで東海支部総会が開催されました。総会に先立ち、物故者に対して黙祷が捧げられました。東海支部では米元重雄先生（昭和21年卒）、久米英明先生（昭和26

年卒)、山崎 巖先生(昭和28年卒)が、お亡くなりになりました。総会では井上支部長のご発議で、#1. アラムナイへの参加、#2. 東海支部から近隣の同窓へのお声がけ、#3. ルネッサンス基金への寄附などについて審議が成されました。まず、全学で組織されているアラムナイに関して、東海支部幹事が継続して参加することが確認されました。次に、東海支部は岐阜県・愛知県・静岡県を主なエリアと考え、今後さらに長野県など近県を含め、総会のご案内などを同窓の先生方へご案内差し上げることを確認しました。最後に、東海支部からルネッサンス基金へ(遅ればせながら)寄附することを全会一致で確認いたしました。そして、今回は主賓として神谷厚範教授(細胞生理学分野)にご臨席を賜り、「岡山大学細胞生理学教室のご紹介:新しい神経科学を目指して」と題するご講演を賜りました。ご講演では、神谷教授が取り組んでいらっしゃるご研究、特に自律神経に関する研究成果を、温かく大変研究熱心なお人柄とともにご紹介下さいました。このご講演をきっかけに、総会に集まった先生方が、神谷教授を囲みながら楽しそうにご歓談され、とても素晴らしいひとときになりました。神谷先生、ご多忙極まりないなか名古屋までご足労下さり、本当にありがとうございました。

今回、東海支部総会の準備を仰せつかり、少しずつ作業に取り組んで参りました。当初、同窓150名の先生方へご案内状を作成し、お手元へ郵送しました。その後、多くの先生方が出欠票をご返信下さり、総会へ13名の先生方がご出席下さいました。しかし、正直に申し上げれば出席の知らせは、「当たりくじ」のよう

なもの、多くの先生方からは欠席の連絡が寄せられ、東海支部には出席者よりはるかに多くの同窓がいらっしゃることを知りました。一方、出欠票の通信欄を拝見しますと、欠席の場合にも多くの先生方が丁寧に理由を書いて下さり、とても印象的でした。欠席の理由の中には、ご子息の結婚式や医師会の諸行事などが記されており、慶事や地域でご活躍されているお姿を想像し、大変嬉しく拝見いたしました。一方、欠席の理由に闘病や老いを挙げられていた同窓の先生もいらっしゃいました。先生方のご病状や療養生活を案じ、お姿を思い巡らしますと、小生から不躰な案内状が届き、さぞや心許ない中、礼を尽くしてご返信下さったのではないかと存じます。諸先輩に深く感謝するとともに、療養におかれましては呉々もご自愛されますよう、ご快復されますことを祈念しております。

最後に、同窓の諸先輩は社会的にご活躍され、同窓会で楽しいひとときをお過ごしになる先生方が数多くいらっしゃるかと存じます。一方、同窓の中には悠々自適にお過ごしになり、生業を営みながら同窓会へご参加される先生もいらっしゃるのではないかと存じます。鶴翔会は旧交を温める場です。どうぞ分け隔て無く同窓の先生方に広くお集まり戴き、昔を懐かしく思い出しながら、一人でも多くの先生が暖かみのある時間をお過ごしになることを祈念しております。今回、東海支部総会開催におきましては、鶴翔会事務局の妹尾行恭様、万城典子様から多大なるご尽力を賜り、誠にありがとうございました。今後とも、鶴翔会の皆様、東海支部の諸先輩から温かいご支援とご指導を賜れば幸いに存じます。どうぞ宜しく願い申し上げます。





## 令和元年度鶴翔会近畿総支部報告

近畿総支部長  
野上浩實(昭48)

令和元年度鶴翔会近畿総支部同窓会は令和2年2月2日(日)、阪急グランドビル27階、白楽天で開催されました。今年は暖冬で比較的暖かく、また好天にめぐまれての開催となりましたが、インフルエンザ感染やご高齢で足腰を痛めて体調不良の先生方などが欠席され、参加人数は17名となりました。

谷口武先生(昭60)の司会の下、先ず本年度亡くなられた木戸友三郎先生(昭24)、岡本貞男先生(昭29)、野上耕太郎先生(昭24)、の3名に対し黙祷を捧げ、全員で御冥福をお祈りしました。次いで、近畿総支部長、野上浩實(昭48)、阪奈和支部長、谷口武先生(昭60)、京滋部支部長の波柴忠利先生(昭40)より支部報告があり、総会出席の増加のため、若手、中堅の先生の参加が必須で、最近参加された若手、中堅の先生に声をかけて参加を募るなどの提案がありました。令和元年度収支決算報告の後、妹尾事務局長より岡大医学部および鶴翔会の現況について報告があり、榎野博史学長、金澤右病院長を中心に、多方面の実績を上げられていること、特に、革新的医療創出拠点プロジェクト、がんゲノム医療中核拠点病院に選ばれ(日本全国で11病院の中に選出)、臨床研究中核病院に指定され「向き合う」「つながる」「広がる」を合い言葉に中四国大学の橋渡しの拠点となることが重要と力説され

ました。また150周年記事業として旧生化学棟改修工事が完成、入院棟11階に癒やしの場を開設したとの報告がありました。次に、特別講演として、大阪市立総合医療センター、心臓血管外科部長、村上貴志先生(昭58)に「心臓血管治療の最前線」をご講演頂きました。心臓弁膜症に対する低侵襲治療としてTAVI、MICSなどがあること、虚血性皮膚潰瘍に遺伝子治療(コラテジュン)が有用なこと、大動脈解離や大動脈瘤に対するステントグラフト治療が多用されていることなど、大変興味深いご講演で、会員一同最新の治療に感嘆しました。その後、全員で記念撮影を行い、中村猛先生(昭43)の司会の下、中華料理に舌鼓を打ちながら懇親会に入りました。今年は少人数なので、全員に近況報告して頂き、学生時代から現在に至るまでの話に花が咲き、またたく間に時間が経過し、来年の再会を約束して閉会となりました。今回の成果として、岡大医学部卒で近畿圏にて活躍している先生にご講演頂き、大いに盛り上がったことです。今後とも他の同門の先生方にも呼び掛けて、近畿地区の鶴翔会を盛り上げていきたいと思っています。末尾ながら近畿総支部(大阪、奈良、和歌山、京都、滋賀、三重)に在住で来年度参加の希望の先生がございましたら、下記までご一報下されば、来年度案内状をお送りいたしますのでよろしくお願ひします。

〒598-0043 大阪府泉佐野市大西1-5-20

谷口病院 谷口 武(鶴翔会阪奈和支部長)

TEL 072-463-323 FAX 072-463-5714

e-mail: takeshi@taniguchi-hp.org



## 第53回鶴翔会新居浜支部総会報告

住友別子病院  
松原 稔 (平12)

第53回鶴翔会新居浜支部総会が、令和2年2月1日(土)、リーガロイヤルホテル新居浜にて、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 消化器・肝臓内科学教授 岡山大学病院光学医療診療部長の岡田裕之教授と岡山大学同窓会事務局長の妹尾行恭様をお招きし、28名の先生方の参加で開催されました。

鈴木誠祐先生(昭58)の司会のもと、昨年ご逝去されました故星島克彦先生(昭29)に黙祷をささげた後、総会が開かれました。まず、支部長の宮田栄一先生(昭37)より挨拶があり、鈴木誠祐先生より会員異動の報告(令和2年1月現在、開業医19名、勤務医56名、特別会員5名、入会4名、退会6名)があり、引き続き会計報告、吉井信男先生(昭54)より監査結果報告があり、承認されました。

引き続き妹尾行恭事務局長より岡山大学医学部と鶴

翔会の近況報告がありました。岡山大学医学部創立150周年事業、学生の動向、入試や国家試験の結果など大学の近況のお話を頂きました。

記念講演は岡田裕之教授に『消化器内科診療・研究の現況』と題しましてご講演を頂きました。ヘリコバクターピロリ菌診療の現況、画像強調内視鏡診療の現況と未来、AIの消化器診療への活用、さらに教室の各グループの研究についてお話があり、活気のある教室が目につかぶようでした。

記念撮影に続き、鎌田昌平先生(昭38)の司会で懇親会に移り、支部長の宮田栄一先生、岡田裕之教授のご挨拶の後、松尾嘉禮先生(昭40)の乾杯で始まりしました。懇親会中盤では、入会者を代表して金尾浩一郎先生(平3)の自己紹介がありました。岡田教授を中心に、全員で和気あいあいと近況を語り合い、楽しい時間はあっという間に過ぎ、星加晃先生(昭37)の閉会挨拶で今後の新居浜支部の発展を願い散会となりました。

最後に、ご多忙にもかかわらず、新居浜までお足を運びいただき、ご講演を受け賜りました岡田裕之教授、妹尾行恭事務局長に改めて厚く御礼申し上げます。



# 新聞より

岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など (2019.9～2020.2)

掲載年月日	媒体	見出し	見出し	備考		
2019/ 9/ 7	読売新聞	31	若いがん患者 「子を持つ未来」の残し方	精子、卵子保存法など紹介	中塚幹也 (岡山大保健学研究科)	
2019/ 9/ 8	読売新聞	29	救急フェアに地震体験車など		岡山労災病院	
2019/ 9/11	山陽新聞	26	遺伝性がん患者 思い発信	治療経過、家族への感謝の手紙	当事者会、来年1月、岡山でパネル展	岡山大病院
2019/ 9/13	山陽新聞	29	“長寿” 遺伝子を発見	マウスの糖尿病予防		加納良男 (会員)
2019/ 9/16	山陽新聞 MEDICA	13	院長に聞く 国立病院機構岡山医療センター	小児医療精通 県内の中心的役割		久保俊英 (昭59)
		14	働き盛りの人への健康講座	健康寿命と下肢関節疾患		遠藤裕介 (平16院)
		15	身近ながん診療を市民と共に	卵巣がんについて		徳毛敬三 (会員)
		16	スマホで医療情報閲覧	検査データや画像、投薬記録 健康意識の向上に		岡山旭東病院
			「かかりつけ医のための認知症診療スキル指南」	おかやま内科糖尿病・健康長寿クリニック		小川紀雄 (昭41)
2019/ 9/18	読売新聞	13	眼科治療 目の硝子体手術より安全に	糖尿病網膜症など 器具が進化		岡山大病院、ツカザギ、姫路赤十字、倉敷成人病セ、倉敷中央、木村眼科内科、福山市民、南松山
2019/ 9/19	山陽新聞	32	県議会で県方針	在宅患者の避難訓練実施		小林孝一郎 (平12)
		35	玉野市民、三井病院統合	公立と民間で独法 地域医療維持		玉野市民病院、玉野三井病院
2019/ 9/22	読売新聞	25	病院の実力 岡山編 眼科治療	緑内障 早期は目薬中心		岡山大病院、倉敷成人病セ、倉敷中央、岡山赤十字、木村眼科内科、福山市民
2019/ 9/24	山陽新聞	21	臓器提供 本人意思明確に	岡山で講座 医師ら呼び掛け		田中信一郎 (昭50)
2019/ 9/27	山陽新聞	29	再編必要な県内13病院公表	突然名指し意図分からぬ／すでに協議進めている	関係者困惑 冷静受け止めも	福渡、せのお、玉野市民、赤磐医師会、備前、吉永、瀬戸内市民、吉備高原医療リハ、笠岡市民、井原市民、矢掛町国民、南岡山医療セ、鏡野町国民
2019/ 9/29	読売新聞	13・14	再編必要病院公表	急性期病床削減図る 高齢化進行 在宅中心に	地域貢献 評価に疑問の声	高砂市民、出雲市立、備前、福渡、玉野市立、せのお、吉永、吉備高原医療リハ、瀬戸内市民、赤磐医師会、笠岡市民、矢掛町国民、南岡山医療セ、井原市民、鏡野町国民、呉共済、因島、三原赤十字、府中市民、庄原赤十字、宇部医療セ、さぬき市民、滝宮、西条市立周桑、高知西
		29	県内13病院「再編必要」	県「安心の環境整える」		福渡、せのお、玉野市民、赤磐医師会、備前、吉永、瀬戸内市民、吉備高原医療リハ、笠岡市民、井原市民、矢掛町国民、南岡山医療セ、鏡野町国民
			玉野市民病院 統合へ	民間と 24年度会員、190床		玉野市民病院、玉野三井病院
		33	病院再編対象 割合に地域差	自治体、医療体制整備を加速		矢掛町国民健康保険病院



掲載年月日	媒体	見出し			備考	
2019/10/1	山陽新聞	29	病床の削減・転換計画	県「なくなるわけではない」	福渡、せのお、玉野市民、赤磐医師会、備前、吉永、瀬戸内市民、吉備高原医療リハ、笠岡市民、井原市民、矢掛町国民、南岡山医療セ、鏡野町国民	
			農業貢献の若手顕彰「矢野賞」		故矢野恒太（明22）	
		30	岡山大病院200例目肺移植		岡山大病院	
2019/10/2	山陽新聞	26	インフルエンザ早くも流行	ウイルス 海外からも	乾燥注意 高齢者予防施主を	草野展周（岡山大病院感染症内科）
2019/10/4	読売新聞	31	肺がん可能性報告医師が見落とす			高知県立あき総合病院
2019/10/7	山陽新聞	23	臓器提供 意思表示を	推進月間で県など 岡山駅で呼び掛け		田中信一郎（昭50）
2019/10/8	山陽新聞	16	大腿骨の骨折 手術とりハビリ セットで	骨粗しょう症治療し予防を		木浪 陽（平9）
2019/10/10	山陽新聞	29	新型インフル拡大防げ	県北初の患者移送訓練		津山中央病院
			乳がん検診啓発	14日に慈善演奏会		岡山県医師会
2019/10/11	山陽新聞	28	北区のサ高住で眼科無料検診			中平洋政（会員）
		30	G20保健相会合岡山開催に寄せて	質高い医療発信の好機		横野博史（岡山大学長）
2019/10/13	山陽新聞	26	G20保健相会合岡山開催に寄せて	障害者 生活の向上を		末光 茂
2019/10/16	読売新聞	17	病院の実力 てんかん治療	てんかん 脳神経の過剰興奮	薬で抑制、脳の一部切除も	岡山大病院、姫路赤十字、倉敷中央、岡山医療セ、岡山旭東、南岡山医療セ
	山陽新聞	31	乳がん早期健診呼び掛け	慈善コンサート		ピンクリボン岡山
2019/10/18	山陽新聞	18	G20 岡山保健相会合あす開幕	病院、医師数ともに充実		岡山大病院
		31	専門職育成へ協定	新見公立大学 名寄市立大と派遣や共同研究		公文裕巳（昭49）
		33	医師が術式誤り死亡	患者遺族 地裁に賠償提訴		岡山市民病院
2019/10/20	読売新聞	33	病院の実力 岡山編 てんかんの治療	症状 周囲気づかぬ例も		岡山大病院、倉敷中央、岡山医療セ、岡山旭東、南岡山医療セ
	山陽新聞	33	発作後MRI検査重要			真邊泰宏（平11院）
2019/10/21	山陽新聞	21	岡山の先進医療視察	G20保健相会合参加者 健康増進事業に関心		岡山大病院
	山陽新聞MEDICA	11	睡眠障害改善しよう	高齢者は「遅寝早起き」		石原武士（平3）
		12	働き盛りの人への健康講座	眼科の紹介 白内障手術		伊丹雅子（平14院）
		13	身近ながん診療を市民とともに	肝がん ～隠れ脂肪肝や糖尿病は要注意		能祖一裕（昭61）
14	県北初のハイブリッド手術室	スーパー ICUも整備 安心、安全提供へ進化		林 同輔（昭57）		
2019/10/26	山陽新聞	31	「軽症料金」導入拡大 夜間・土日の救急外来	大規模8病院 安易な受診抑制へ		岡山大病院、岡山赤十字、岡山済生会、岡山医療セ、岡山労災、倉敷中央、津山中央
2019/10/28	山陽新聞	20	患者との信頼関係構築へ医療者の対話力磨く	岡山大自主講座「哲学カフェ」 昨秋から4回開催	臨床実習導入目指す	岡山大総合内科学
2019/10/30	山陽新聞	27	夜間診療必要訴え	派遣チーム活動報告書		岡山県医師会
	28	身近な施設希望7割	カウンセリング体制必要			中塚幹也（昭61）
2019/10/30	読売新聞	29	がん少女 笑顔の絵本残す	家族とピクニック スカイダイビング挑戦	岡山で闘病中作製 出版へ	岡山大病院

掲載年月日	媒体		見出し		備考
2019/10/31	読売新聞	31	中山間の「知」距離を越え 結集	保健福祉 学生・教職員交 流、共同研究	公文裕巳（昭49）
2019/11/ 3	山陽新聞	31	努力惜しまず	秋の叙勲 県関係85人	数々の難手術に成功 大本堯史（昭37）
2019/11/ 4	山陽新聞 MEDICA	11	Oneポイント紙上セミナー	進行癌がんの新しい手術 血管もろとも大きく切除	安全性高まり治療法進歩 松田病院、松田忠和（昭49）
		13	身近ながん診療を市民とと ともに	脳腫瘍について ～脳腫瘍 とともに生きる	井上 智（平13）
2019/11/ 6	山陽新聞	32	脳梗塞後の神経細胞再生	岡山大学大学院グループマ ウス実験成功	特定遺伝子導入 後遺症治 療に期待 岡山大脳神経内科学
2019/11/ 7	山陽新聞	32	秋の叙勲 喜びの受章者	糖尿病学に貢献	河西浩一（昭32）
				口腔疾患を研究	岸 幹二（会員）
2019/11/ 8	山陽新聞	34	秋の叙勲 喜びの受章者	往診で市内奔走	田中茂人（昭40）
2019/11/16	山陽新聞	32	県の原子力災害拠点病院 岡山医療センター指定	事故時 住民全て受け入れ	岡山医療セ、岡山大病院、 津山中央病院
2019/11/18	山陽新聞 MEDICA	11	がん治療最前線	MRIで乳がん早期発見	着衣のまま痛みも無し 岡山中央病院
		12	専門医療チームのはなし	緩和ケアチーム	小高達也（平22院）
		13	働き盛りの人への健康講座 PART 2	泌尿器科の診察 - 検尿と 超音波検査-	那須良次（昭59）
		14	皮膚の日（11月12日）	アトピー 生活習慣見直し 重要	食物アレルギー専門機関で 検査を 妹尾明美（会員）
2019/11/19	山陽新聞	27	がん遺伝子検査導入	保険適用で負担軽減	がん遺伝子パネル検査2種 類 岡山大病院
2019/11/20	読売新聞	27	病院の実力 がん治療相談	がん治療の疑問や不安解消	「相談支援センター」情報を 提供 岡山大病院、姫路赤十字、 岡山済生会、倉敷中央、岡 山赤十字、福山市民、四国 がんセ、愛媛県立中央、済 生会今治、あき総合
2019/11/23	山陽新聞	16	「済生・救療」の精神のもと に	岡山県済生会創立80周年 ダヴィンチ、がんゲノム医療 高度医療を積極導入 最新施設で健康支援	山本和秀（昭49）
2019/11/24	読売新聞	29	病院の実力 岡山編 がん 治療相談	メンタル、生活面に配慮	岡山大病院、岡山済生会、 倉敷中央、岡山赤十字、福 山市民、
				退院後の就労後押し	中田昌男（昭60）
2019/11/26	山陽新聞	25	研究者18人に助成金		岡山医学振興会
2019/11/27	読売新聞	29	心臓手術の保険適用へ	脳梗塞再発予防 負担額軽 減、治療短縮	来月から 岡山大病院
2019/11/28	読売新聞	28	医学生強制わいせつ未遂	恐喝容疑でも逮捕	岡山大医学部
2019/11/29	山陽新聞	24	すい臓がんで免疫活性化	治療効果高める可能性	新ウイルス製剤で確認 藤原俊義、田澤 大（岡山 大消化器外科学）
2019/11/30	山陽新聞	33	がん免疫療法、効果訴え	岡山で市民公開講座 医師 3人、展望など話す	神崎洋光（平26院）
		34	脳梗塞再発予防 保険診療 で開始	心臓の穴ふさぐ	岡山大病院
2019/12/ 1	山陽新聞	26	終末医療、事前に意思確認	ACP実践事例紹介 救急 医、看護師ら	中尾篤典（岡山大救命・救 急医療学）
		27	がん患者 子ども持てる	卵子や精子凍結保存 生殖 機能温存も	岡山大病院理プロダクショ ンセンター
2019/12/ 2	読売新聞	11	医療ルネサンス 乳がん治 療の課題4/5	ホルモン療法「5～10年」	大谷彰一郎（平7）
	山陽新聞 MEDICA	12	脊椎疾患に対する低侵襲手 術治療	腰部脊柱管狭窄症	中原啓行（平21院）
2019/12/ 4	山陽新聞	30	高原滋夫基金 2施設に助 成金		故高原滋夫（昭6）、高原郁 夫（昭45）
2019/12/ 8	山陽新聞	33	市民病院経営再建急ぐ	累積赤字最悪37億円超	縮小建て替えも 笠岡市民病院
2019/12/14	山陽新聞	5	岡山国際オープンイノベー ションシンポジウム座談会	新技術共有し地域活性化	大学の強み生かし共創 横野博史（岡山大学長）

掲載年月日	媒体	見出し			備考	
2019/12/15	山陽新聞	28	禁煙継続が困難傾向	過去にうつ病や統合失調症 既往歴ない人と差	川井治之(平4)	
		29	心臓手術 技競う	岡山で大会	宮本陽介(平24)	
2019/12/18	読売新聞	23	病院の実力 スポーツ傷害 (膝・肘)治療	膝治療 手術や筋肉強化で	成長期の肘酷使に注意	姫路聖マリア、神戸市立西 市民、岡山済生会、岡山医 療セ、倉敷中央、
2019/12/20	山陽新聞	25	がん闘病少女の絵本完成	足形で描く「そらめさん」	出資者募り出版	岡山大病院
		26	「術式ミス」賠償訴訟	病院争う姿勢		岡山市民病院
2019/12/21	山陽新聞	18	診断支援にAI活用を	能力向上へ若手医師と対決	井原市の医師が学術研究会	鳥越恵治郎(昭51)
2019/12/22	山陽新聞	4	提言2019 岡山県受動喫煙 防止条例	県民の強い意思反映を		清水信義(昭41)
	読売新聞	29	病院の実力 スポーツ傷害 (膝・肘)	手術前後 リハビリ必須		岡山済生会、岡山医療セ、 倉敷中央、
				運動で移動機能維持を		阿部信寛(平2)
2019/12/26	山陽新聞	27	再び大役 熱く駆ける	楽しくさっそうと		松山正春(昭44)
2019/12/31	山陽新聞	26	蘇生拒否に救急隊困惑	「自宅で最期」本人が望んで いる	法的規定なし 岡山県、統 一指針策定へ	中尾篤典(岡山大救命救急・ 災害医学)
2020/ 1/ 3	山陽新聞	1	山陽新聞賞 社会功労	地域への貢献たたえる		石川 紘(昭40)
		18		新会館 議論まとめる		
2020/ 1/10	山陽新聞	25	広がるAI活用	糖尿病性腎症を診断	見落とし防止狙い 現場応 用へ研究	喜多村真治(岡山大腎臓・ 糖尿病・内分泌内科)
2020/ 1/12	山陽新聞	25	小児がん 治療後支えて	復学、在宅ケア考察		岡山大病院
2020/ 1/14	山陽新聞	21	糖尿病性腎症克服を	予防啓発取り組み報告		四方賢一(岡山大病院新医 療研究開発センター)
2020/ 1/15	山陽新聞	28	SDGs達成へ人材育成	岡山大、UNCTADと世界初 協定	途上国の研究者受け入れ	岡山大
2020/ 1/16	山陽新聞	26	災害時 ヘリポート使用 県北初	津山署 津山中央病院と協 定		津山中央病院
2020/ 1/17	読売新聞	29	ヘリポート使用 災害協定	津山署と		津山中央病院
2020/ 1/20	山陽新聞 MEDICA	17	脊椎疾患に対する低侵襲手 術治療	腰椎椎間板ヘルニア		中原啓行(平21院)
		18	注目される「AYA世代」	医療者も支援の動き		岡山大病院
2020/ 1/21	山陽新聞	25	多様なニーズ対応を	災害時の高齢者ら支援 県 が研修会		中瀬克己(昭58)
2020/ 1/22	読売新聞	20	病院の実力 スポーツ傷害 の主な手術件数	肩の損傷 靱帯と骨の縫合 も	成長期に多い腰椎分離症	姫路聖マリア、神戸市立西 市民、岡山医療セ、倉敷中 央
	山陽新聞	27	ロボスーツで運動機能回復	病院と提携、訓練の場提供		倉敷記念病院
2020/ 1/26	読売新聞	33	病院の実力 岡山編 ス ポーツ傷害 肩・足・腰	運動前後 ストレッチを		岡山医療セ、倉敷中央、岡 山済生会
2020/ 1/28	山陽新聞	24	遺伝性がん患者 手紙紹介	治療や家族への思い		岡山大病院
2020/ 1/29	山陽新聞	27	新型肺炎 県内発生時の対 応確認	県が緊急連絡会議		岡山大病院
2020/ 2/ 3	山陽新聞 MEDICA	11	Oneポイント紙上セミナー 本当は怖い歯周病	生活習慣病と深い関係		岡山大学病院
		13	脊椎疾患に対する低侵襲手 術治療	胸腰椎圧迫骨折		中原啓行(平21院)
2020/ 2/ 9	読売新聞	31	AI問診 医師負担軽く	業務効率化「医療の質向上 に」	岡山旭東病院で導入	岡山旭東病院



掲載年月日	媒体		見出し		備考	
2020/ 2/11	山陽新聞	30	体内に14年以上ガーゼ置き忘れ	患者に謝罪	岡山大病院	
2020/ 2/17	山陽新聞 MEDICA	11	新型コロナウイルスの知識と備えを	ウイルスの特徴、感染予防を	日常の手洗い最も効果的	今城健二（昭58）
		12	脊椎疾患に対する低侵襲手術治療	腰痛		中原啓行（平21院）
		13	岡山市東区の医療最前線	高血圧の最近の話題 ～少し高めは心配ない？～		井久保卯（昭63）
		14	AI問診 外来効率化	医療の質向上期待		岡山旭東病院
2020/ 2/19	読売新聞	13	病院の実力 緩和ケア診療	緩和ケア 心身の苦痛に対応	がん診断時からチームで	姫路聖マリア、姫路赤十字、倉敷中央、福山市民、香川県中、四国がんセ、済生会今治
2020/ 2/28	山陽新聞	27	子ども癒す臨床道化師	医療従事者ら学ぶ		小田 慈（昭51）
		22	再編・統合の対象外に	「回復病床」へ転換で		せのお病院、福渡病院
2020/ 2/29	読売新聞	25	岡山大など卒業式取りやめ			岡山大
		28	まび記念病院へマスク寄贈	広島の間民間災害支援団体		村上和春（昭52）
		29	岡山大など卒業式中止			岡山大

【お断り】媒体に偏りがあり、また、見落としている記事もあるかと思われませんが、何卒ご容赦ください。鶴翔会会員の先生方におかれましては、岡大医学部・岡大病院・鶴翔会会員に関する新聞・雑誌の記事の情報をお寄せいただければ幸いです。

# 歴史の広場

## 岡山大学附属図書館医学部分館・資料室物語⑩

### 幕末・維新の医学書とその時代

公益財団法人岡山県郷土文化財団

主任研究員 万城 あき

平成30年(2018)は、明治元年(1868)から150年にあたる。1800年代初頭から外国船の接近が続き、嘉永6年(1853)の黒船来航以降は、国のあり方をめぐって社会が大きく動揺した。その波は医師たちにもさまざまな影響を与えた。

今回は、主に岡山大学附属図書館医学部分館に所蔵されている幕末・維新期の書物から、その時代性や変革期の様子を探ってみたい。

#### 『病学通論』序文にみえるもの

緒方洪庵(1810～1863)が嘉永2年(1849)に刊行した『病学通論』の坪井信道つばいしんどうによる序文には、この本をまとめた経緯を次のように紹介している。享保年中から百有余年の間に、『解体新書』、『医範提綱』など優れた翻訳書が多々出されたが、「原生原病」(病理学)の本はまだない。病気の原因が柱で薬剤や治療は家屋である。まだ礎となる柱がないのに家は建たない、つまり原因がわからないままでは治療はできない、という宇田川榛斎(玄真)の指示で、緒方洪庵らが何冊もの原書にあたり、その後もいろいろな人の手を借りながらまとめた、とある。

さて、享保年中を西洋の知識受容の始めとするのは、幕府の鎖国政策に伴い、何度も洋書の輸入は禁止されてきたが、8代将軍徳川吉宗が享保5年(1720)にキリスト教に関係のない漢訳洋書の輸入を緩和したことにある。吉宗は、医学や天文学などに関心も高く、青木昆陽あおきこんようを登用し甘藷(サツマイモ)の栽培を普及させたり、丹羽正伯にわしょうはくに命じて諸国の産物を調査し薬草や特産品を奨励したりした。昆陽は書物奉行となった後、オランダ語の習得に励んだ。その弟子が『解体新書』の翻訳に加わった前野良沢まきのりょうたくで、同書を翻訳する時、蘭和辞書などはなく、昆陽の残した『和蘭文字略

考』などが役に立ったという。杉田玄白の『蘭学事始』には、原書に描かれた人体解剖図を見て今までの知識とは大いに違うこと、実際に解剖に立ちあい西洋の本の正確さに驚き、翻訳を思い立ったことなどが書かれている。本連載の始めに紹介した岡山藩藩医で、岡山県病院・医学校の設立に尽力した生田安宅が、若い頃に西洋医学と出会い、「窮理実測に基づいたものを勉強して、医術に活かしたい」という新鮮な感動を覚えたのと同じだろう。

また、本書の自序には、洪庵自身の軌跡が書かれていることでも注目される。洪庵は足守藩の武士の子として生まれ、本来なら武士となるはずであった。しかし、生来病弱で、父の大坂蔵屋敷なかにんりゅうの勤務について出た大坂で蘭方医の中天游なかつんりゅうを知り、その門下となる。

その後、江戸、長崎で修業し大坂で開業し、天保9年(1838)に蘭学塾「適塾」を開く。

医師として治療に当たったほか、優れた翻訳書を残し、適塾では医師のほかに福沢諭吉をはじめ維新期に社会のリーダーとして活躍した人を数多く輩出したことは周知のことである。

本書は天保5年(1834)に亡くなった師・宇田川榛斎(玄真)の遺志を継いで、原書の翻訳だけでなく、実地に経験したことも交えてまとめたものである。

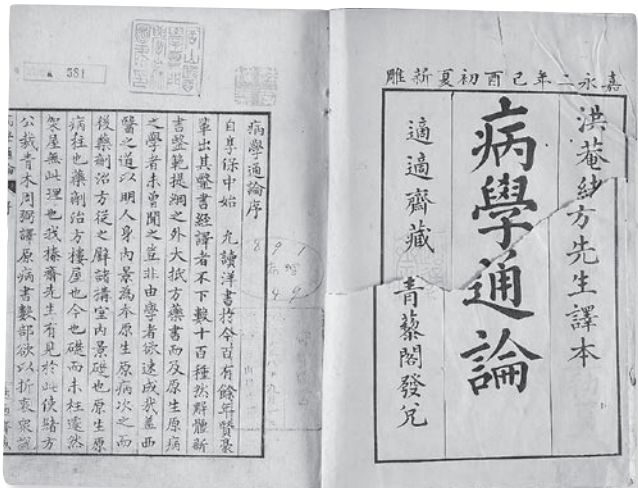
#### 『扶氏経験遺訓』の刊行

扶氏とは、ドイツのベルリン大学教授C・W・フーフランド(1762～1836)のことで、彼の50年にわたる臨床経験を書き記した本が、天保9年(1838)にオランダ語訳され日本にもたらされた。それを入手した洪庵が何度も読み、この卓見を世に出すべきと考え、翻訳に取りかかった。その翻訳の初稿は天保13年(1842)には終わっていたという。

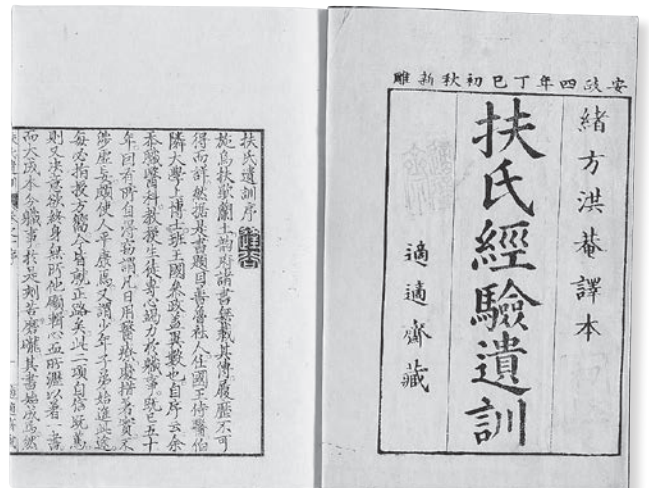
しかし、この本はすぐには出版できない事情があった。天保年間前後(1830年代)には蘭学は医学から発展して、さまざまな分野で興隆をみせていた。一方、1800年前後から外国船の来航が増え、西洋の学問と直結する蘭学にも諸々の規制や事件が増え始めていた。『緒方洪庵全集』第2巻の解説で、芝哲夫は、同書の出版が遅れたのは、推敲を重ねたというだけでなく、翻訳書の出版許可をめぐる幕府の対応も一因していると指摘している。諸事情あった中、『病学通論』が先に許可され、『扶氏経験遺訓』全30巻は安政4年(1857)に出版の運びとなり、万延2年(1861)で完了した。

また、臨床経験のほかに、洪庵が伝えたかった事柄

脚注：この記事は大塚ホールディングス(株)発行「大塚薬報」岡山大学附属図書館医学部分館・資料室物語(全11回)の(2018年3月号/No.733⑩、2018年4月号/No.734⑪)より許可を得て転載



『病學通論』緒方洪庵（岡山大学附属図書館医学部分館所蔵）



『扶氏經驗遺訓』緒方洪庵（岡山大学附属図書館医学部分館所蔵）

にフーフランドの医師としての心得がある。「医の世に生活するは人の為のみ、おのれがためにあらずといふことを其業の本旨とす」から始まる12箇条は、自戒でもあり、適塾の門人への教えでもあった。

また、洪庵の翻訳について、福沢諭吉『福澤全集緒言』には「翻訳は原書の読めぬ人のためにするものだ」という師の姿を伝え、原書に拘泥して難解になったのでは意味がないということ述べている。

適塾では一つしかない蘭和辞書を皆で使い、原書を翻訳し、さらに解釈をする中で、自ら深く学ぶ態度を身につけるといふ修業をしたようである。幕府の鎖国体制のもとでは西洋の知識はオランダ語訳の本からしか受容できない状況であった。後年、洪庵は、オランダ語訳による知識の吸収に限界を感じたのか、英語の習得が大切と弟子の親族に宛てた手紙の中に書いている。

洪庵は、文久2年（1862）に幕府の奥医師として召され、西洋医学所頭取にも任ぜられた。翌年6月、突然の咯血で急死。その後を継いだ一人が、適塾出身の島村鼎甫であった。

**島村鼎甫が残したもの**

島村鼎甫（1830～1881）は岡山（備前国）出身で、適塾での修業の後、江戸に出て徳島藩蜂須賀家の侍医となった。洪庵とともに西洋医学所（後に医学所）にも出仕し、洪庵死後も教授として勤めた。

慶応2年（1866）に出版された『生理發蒙』<sup>せいりはつもう</sup>は、オランダ人医師リバックが1855年に出版した生理学を翻訳したもので、全14巻からなる。出版当時の状況として序文には、この学問を究めてから疾病による変化に対処するのだ、といい、凡例では、人体の正常な働き

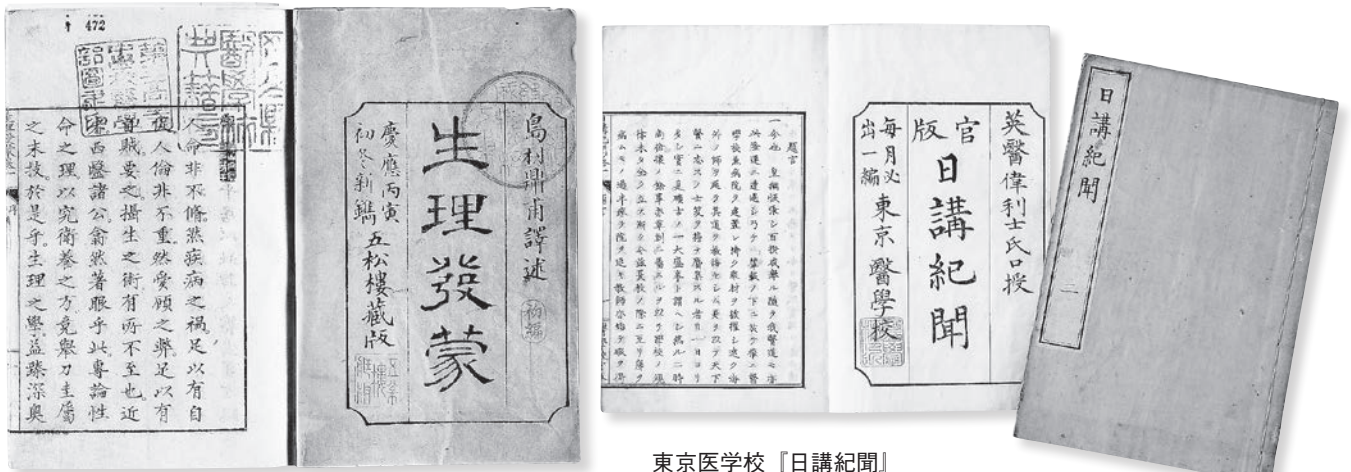
を知る訳書は数部あるが解体書に基づくものや抄録などで、全容を知るにはもの足りない。医学を初めて学ぶ者はまずこの書を通読すべき、とある。当時の知識として不足している情報を教授としての立場から翻訳している。

医学所は明治元年（1868）に新政府によって医学校として再建されることになり、鼎甫ら従前から教授を務めていた者たちが再度名を連ねた。翌年1月からイギリス人医師ウィリスが外国人医師として教鞭を執るが、彼はその年の11月に辞任した。医学校内の運営上の軋轢やドイツ医学を基礎にしたいという動きがあったことが原因として挙げられている。その後のわずかな一時期、オランダ人医師ボードインが講義をする。二人の講義記録は『日講紀聞』として刊行され、鼎甫はその序文を書いている。ウィリスの講義録にはその業績や人物を讃える一文はみえず、ボードインのそれには言葉を尽くして書かれていることから、当時の社会・国際情勢の推移をみることができそうである。

**英医偉利士氏（ウィリアム・ウィリス氏）**

ウィリアム・ウィリス（1837～1894）は、イギリス公使館の補助官兼医官として文久2年（1862）に赴任した。着任早々に襲撃事件があり、生麦事件、薩英戦争、下関事件、神戸事件を次々と体験し、戊辰戦争では従軍し敵味方なく傷病兵の治療に当たった。動乱期の数々の事件の目撃者であり、当事者であった。ウィリスの手紙を整理し、その生涯を追ったヒュー・コータツツイの『ある英人医師の幕末維新－W・ウィリスの生涯』には、激動の時代の流れとともに彼の軌跡が詳しく描かれている。その中から日本人医師をどうみていたかを少し紹介したい。





『生理發蒙』島村鼎甫（岡山大学附属図書館医学部分館所蔵）

東京医学校『日講紀聞』

ウィリスの講座記録（岡山県郷土文化財団所蔵）

【日本の医学療法には漢方と蘭方の二つの流派がある。漢方の医師らは手術の利点を否定し、複雑な薬品や軟膏を用いる。一方、蘭方は西洋医学を取り入れているものの「メスの使用を主張するものの、立派な意図にかなうための必要欠くべからざる技術」を学んでいない。「傷病兵の治療の一部として身体を清潔にさせることがきわめて困難」なことは共通している。】

また、蘭方医でも臨床経験が少なく、実地ではあまり役に立たないことを報告する中では、「しかしながら日本人の好奇心や研究心は旺盛といても過言ではないだろう。……ていねいに教育すれば、日本人医学生はヨーロッパの平均的水準に達するだろう」とも述べている。

戊辰戦争の傷病兵を敵味方なく治療する中で、現地の医師を指導し、西洋医学の治療を実地に教えたという経験は、医学校に招聘された時に、医学教育における自信と希望につながっていたと推察される。岡山藩

医学館創始の頃の西洋医学は、生田安宅たちが東京で学んだウィリスの医術だった。講座と臨床を同時に学ぶ方式で、ウィリス自身も日本語が話せたので英語を解せない医師たちにとってはありがたい先生だったのではないだろうか。

来日の当初、攘夷の風が吹き荒れる中で、外国人は襲撃し追いつめる存在であった。しかし、戊辰戦争での治療を通じて、外国人も人間で、温かい心を持ち、人の役に立つ知識を持っていることを身をもって教えることで、日本の人の役に立ちたいし、仲良くしたいという気持ちを伝えたようである。医師としては、日本各地に梅毒患者が多く見受けられ、しかもきちんとした対処をしていないために重症化している者も多くいるという状況に心を痛めている。こういう人物が開化の始めにいたことは幸せであったが、政治上のさまざまな動揺がこの医師の上に降りかかったようである。東京での医学教育は道半ばにして去り、鹿児島で指導



明治初期に岡山に来た外国人医師ベリーと宣教師たち（岡山大学医学部所蔵）

を続けることになった。

## 岡山と外国人医師

岡山ではオランダ人医師ロイトルを医学館に招聘して西洋医学を学んだ。明治6年(1873)、条約改正の条件としてキリスト教禁止令が解かれた後にアメリカ人宣教師たちがやってくる。岡山でイギリス流医学を転換させたのは、アメリカ人宣教師で医師のJ・C・ベリーで、生田安宅らのやり方が旧弊でお粗末だと非難し、教授陣を罷免させるなど新体制を構築しようとした。おそらくウィリス同様、いくら西洋医学を学んだとはいえ、日本人医師の医療行為、体制が遅れたものとして目に映ったのだろう。その後、東京からドイツ流医学を学んだ菅之芳、中浜東一郎らがやってきて、岡山の医学の方向性は決まった。

幕末から明治への転換期に、社会情勢を反映しながらも西洋医学が受容されてきたことを翻訳書の序文にみてきた。医師たちは自ら学び、実践し、後進を育てる中で西洋の知識をどんどん吸収し蓄積した。江戸時代がうまく近代へと移行できた萌芽は、机上とはいえ

先進的な知識を受容してきたことにあるのではないだろうか。書物の中で語られる知識は今では古いものとなっているが、新たな時代の幕開けを予感させる息吹が感じられはしないだろうか。

## [参考文献]

- ・緒方富雄『緒方洪庵伝』岩波書店 1977年
- ・適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会『緒方洪庵全集』大阪大学出版会 2010年
- ・津下健哉『岡山の蘭学者 島村鼎甫と石井信義－幕末・明治初年の日本医学を支えた蘭医たち－』吉備人出版 2016年
- ・金津赫生『日本近代医学史－幕末からドイツ医学導入までの秘話』悠飛社 2009年
- ・青木歳幸『江戸時代の医学－名医たちの三〇〇年』吉川弘文館 2012年
- ・ヒュー・コータツィ (中須賀哲朗 訳)『ある英人医師の幕末維新－W・ウィリスの生涯』中央公論社 1985年

## 岡山大学附属図書館医学部分館・資料室物語⑪ (終回)

### 医学部の歴史資料にみる群像

公益財団法人岡山県郷土文化財団

主任研究員 万城 あ き



岡山医学専門学校当時の門と岡山大学医学部医学資料棟(旧栄養学棟/門内東)

岡山大学附属図書館医学部分館・資料室には、長い歴史を物語る様々な蔵書、資料がある。資料からは、そこに記録された内容を飛び越えて、関わった人物の思想、人生、歴史的

事件まで色々な記憶が垣間見えるものであった。そして、さらに多くの人々の関わりが積み重なり、その時々々の社会さえも見通せるものもあった。今回は、本連載の締めくくりとして、これまでの流れと紹介しきれなかった人物たちを取り上げてみたい。

## 岡山藩のお雇い外国人

岡山大学附属図書館医学部分館・資料室の貴重書の中には、宇田川家三代(本連載⑤・下山純正執筆)や緒方洪庵(本連載⑩)、地元岡山の名医難波抱節(本連載④・木下浩執筆)などが著した、近世から近代へと橋渡しをした書物がある。それらは苦労や工夫を重ねて、今の世に大切な情報を提供しようとした足跡であった。また、翻訳をするという姿勢の中には、ただ西洋の知識を受容するだけでなく、自らの知見や経験を織り交ぜて確固たる日本の知識にしようという心意気もみえる。さらに、近世から近代へと時代が移行する中で、西洋に流されまいという信念もみえた。

そういう先達に学びながら、生田安宅(本連載②③)ら明治3年(1870)の岡山藩医学館の設立と運営に関わった者たちは、外国人を岡山に迎えることになる。医学館では、同年4月、オランダ人医師ロイトル・ボードウィンをお雇い外国人として招聘する。明治4年(1871)2月には、この年に着任した藩学校の英語教師イギリス人オスボンとともに岡山後楽園にてオランダ料理でもてなし、後楽園の役人の案内で藩主池田章政とともに庭を観覧した。外国人の後楽園来訪も初めてであったが、池田家当主と庭廻りをした客人も初めてで、まさに破格の扱いであった。この時に出された料理は医学館の料理人と中国人が担当したが、



ロイトルのために西洋料理ができる料理人が医学館にいたこともわかる。

この時期は積極的に外国人から直接先進的な医学の知識、技術を学んだ時期でもあった。そのロイトルの解剖の講座記録が、医学館の『解剖記聞』として残っている。

ロイトルの契約は3年であったが、明治4年7月に病を理由に辞任した。この後、廃藩置県で医学館をめぐる状況も一変し、医学館の灯を消すまいとする生田安宅たちの奮闘が始まるのである。

岡山県病院

医学館の教授たちの努力が実り、明治8年(1875)県費で岡山県病院が設立され、生田安宅が病院長に就任し、医学教育も行った。

次いで、安宅たちはイギリス流の医学を修めた若栗章を新たな病院長として招き、教えを請うことになった。若栗の講義は『救急必携外科小技』にまとめられ、序文は安宅が書いている。

岡山県医学校にはやがて菅之芳ら東京大学出身でドイツ流の医学を学んだ教授陣が赴任して、その後の医学教育を確立していく。その中には、本連載⑥⑦で紹介したドイツへの留学経験がある中浜東一郎もいた。日本人が吸収した知識で、医学を推進した時期でもある。中浜は岡山を去っても、別の形で岡山の医学界に寄与した。1期生の写真や教え子からの送別の辞など、わずかに残された資料からでも、その時々の教授と学生、その後の医師としての人生ドラマが垣間見えるものがある。

岡山県医学校から第三高等学校医学部へ

明治21年(1888)3月、学制の変更で岡山県医学校は廃止され、岡山に第三高等学校医学部が置かれた。その初代の外科教授であり、岡山大学医学部外科の開祖とされるのが坂田快太郎で、医学部資料室には快太郎ゆかりの品々が数多く見受けられる。

快太郎は川上郡九名村(現、井原市美星町)出身で、父・待園は、蘭方医で玉島の沙美に海水浴場の開設を提唱した人物である。また、幕末の漢学者で興讓館の初代館長阪谷朗廬は大伯父で、教育者で政治家の坂田警軒は叔父に当たる。

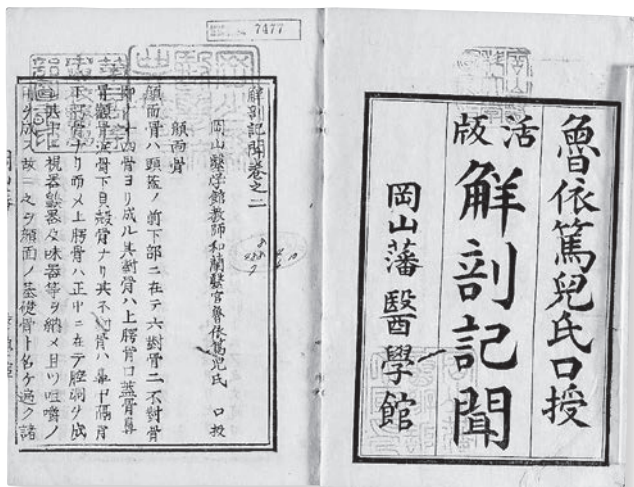
従姉妹の坂田明は、助産婦として活躍し、今上天皇をはじめその姉宮と弟宮たちを取り上げたことでも知られる。

快太郎は阪谷朗廬を慕い、上京して明治20年(1887)に帝国大学医科大学を卒業し、翌年第三高等学校医学部の初代外科教授として赴任する。その後、第三高等学校医学部、岡山医学専門学校の教授を務めた。明治22年(1889)8月には、一人息子で、後にキュビズムの先駆者として名を馳せる一男が誕生した。

快太郎は書画・詩作に秀で、九峰という号で『九峯遺墨集』『九峰遺稿』が残る。また、岡山大学医学部鹿田キャンパスに建つ「東宮殿下御婚儀記念碑」の揮毫も、能書家として知られた快太郎の手によるものである。

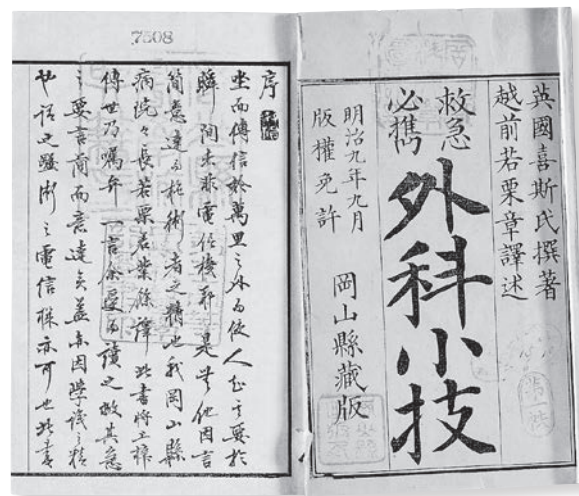
父・待園が関与した海水浴については、快太郎の息子一男と同年生まれの文筆家で岡山出身の内田百間の作品があるので少し紹介したい。

当時、海水浴は「遊泳を楽しむのではなく、支柱を立ててそれにつかまり、海水に身体を浸すことで病氣



岡山藩医学館『解剖記聞』

岡山藩が招聘したオランダ人医師ロイトルの解剖学講座の講座録 (岡山大学附属図書館医学部分館所蔵)



若栗章『救急必携 外科小技』序文は生田安宅 岡山県病院に招聘した2代目の病院長の講義録 (岡山大学附属図書館医学部分館所蔵)



を治療しようとする医療行為」(アジア歴史資料センター「海水浴の誕生」)で、明治初期に衛生を提唱した長与専斎や松本 順らによって海水浴場が開設されていった。岡山県では、その運動が活発になる少し前の明治13年(1880)に、坂田待園の発案で玉島の沙美海岸に地元の医師吉田親之が保養施設「海浜院」を設置したのが始まりという。

内田百閒の作品「沙美の苔岩」の中に、幼少期に沙美海岸に海水浴に行った時の思い出を書いた部分がある。「旧家の様な構えの宿」に泊まり、「沙美の海水場<sup>かいすいば</sup>では、海に這入るのに適した潮の満干の時間を、母屋の軒裏に釣るした小さな半鐘を叩いて知らせた。」と語っている。先に紹介したように、海水浴は遊泳というよりは、湯治に近いものだったことがわかる。また、コレラが発生した時は、そこに居た者は拘束され隔離されたようで、捕まらないうちに逃げ帰ったことや、後で自宅に市役所から消毒車がやってきたことも書かれており、子どもの頃の思い出とはいえ、当時の衛生のあり方がよくわかる一文となっている。

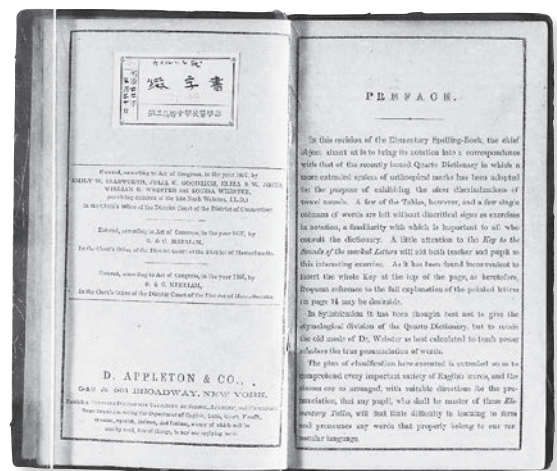
さて、快太郎は一人息子の一男に医者になることを望んだ。当時、医家の子は医者に、という時代でもあったが、快太郎をはじめ祖父や親戚の多くが医療に関わっていた環境もあるだろう。ところが、一男は県立岡山中学校は卒業したもののなかなか高等学校に進めず挫折。そのうち、絵画に進むべき道を見いだした。その後、フランスに留学し、キュビズムの絵画をものにし、帰国した。日本ではキュビズムの先駆者として評価が高い。生家の環境とは異なる新たな道への展望を開いた点では、内田百閒も同様である。百閒の場合は生家の造り酒屋が倒産し、自分で生きていく道として第六高等学校から東京帝国大学文科大学に進みドイツ語教師となった。学生時代には文章の道を目指し夏目漱石の門下となるが、文筆家として名をなすのは50歳を目前にした頃だった。いずれ、同年生まれの二人が生家の環境とは違う道に進み、その成功も近代的な文化を創造していることは注目される。



第三高等学校医学部教授 坂田快太郎の外科の講義録  
白築栄三郎筆記 (岡山大学医学部所蔵)



第三高等学校医学部の外科担当教授 坂田快太郎が留学先のドイツで友人から送られた絵葉書 (岡山大学医学部所蔵)



「ウィルソン氏 綴字書」明治22年3月30日に岡山県医学校から第三高等中学校医学部に、さらに岡山医学専門学校に引き継がれた英語辞書 (岡山大学医学部所蔵)



石井十次の資料群（岡山大学医学部所蔵、『石井十次日誌』は附属図書館医学部分館所蔵）

今や、坂田快太郎は坂田一男の父という紹介のされ方が一般的で、坂田家旧宅跡地には「前衛絵画の先駆者 坂田一男生誕之地」という碑が坂田一男研究会の手によって建てられている。

医学部資料室では、第三高等中学校医学部時代の教授で、坂田のほかに本連載⑧⑨（木下 浩執筆）で紹介した桂田富士郎も大きく顕彰されている。

また、附属図書館には、同校の眼科学教授で井上通泰の『トラホーム物語』（明治36年）などが所蔵されている。当時のトラホームの流行をうけ、井上はその治療についてまとめたもので、あとがきには、「足びきの やまひのはなし 心ある 人の手びきと ならばならなむ」と得意の和歌でしめくくっている。井上は歌人としても知られる人物で、岡山を去った後、宮内省御歌所 勅任寄人になっている。

このほか井上通泰は岡山で明治32年（1899）から郷土史を研究し発表する場として吉備史談会を主宰し、第1回は井上の自宅で開催した。のちに後楽園で会合を持つようになるが、その成果の一つに羽生永明が発表した平賀元義の研究がある。平賀は幕末の岡山藩の武士で、万葉調の歌人である。それを岡山の弟子から知らされた正岡子規は平賀の歌を絶賛し、その作歌にも少なからず影響を与えた。井上も熊沢蕃山について発表するなど、郷土史への関心を高めることに寄与している。

### 医学の先にあるもの

医学部資料室には医学を学び、医師や教授に留まらない活躍をした石井十次のコーナーもある。石井は明治15年（1882）、岡山県医学学校に入学する。その後、病気療養と医術の実地研修を兼ねて知人のところに身を寄せ、代診をしていた最中、生活に困っていた親子を助け、子どもを預かった。これをきっかけに、孤児

救済と教育の事業を始める。医師の道は結局断念しているが、福祉へと進んだ先駆者でもあった。

また、医学部資料室には卒業アルバムが数多く寄贈されている。医師として、また社会人として活躍する前の若々しい姿が残されている。その後、どういう人生を歩み、活躍をしたか、何かのきっかけで一つの資料から医師としての生き様、一社会人としてのあり方が浮き彫りになることもある。それは医師としてだけでなく、その時々をどう過ごしたかの足跡が歴史となって残されていることでもある。現況では、女性医師の足跡を知る資料はまだないようだが、今後は女性の活躍もこの資料室に加わることが期待される。

かつて岡山大学医学部に在籍された教授たちが資料の収集と保存に尽力された結果が、医学部の歴史、あるいはそれを超えて日本の医学、社会を語る重要な資料となっている。現在、医学部資料室の整備が進みつつあるが、今後、どのような資料が発見され、研究、公開されるか楽しみである。

### 【参考文献】

- ・岡山大学医学部百年史編集委員会編『岡山大学医学部百年史』岡山大学医学部創立百周年記念会 1972年
- ・小田皓二「岡大外科の開祖 坂田快太郎の留学通信」 「記念碑」(井原市医師会ホームページ「歴史の広場」)
- ・「海水浴の誕生～余暇は湘南の海で～」(アジア歴史資料センターホームページ「知ってなるほど明治・大正・昭和初期の生活と文化」)
- ・内田百閒「沙美の苔岩」1961年
- ・井原市教育委員会『崑山片玉集』1969年
- ・井原市教育委員会『井原歴史人物伝 郷土が生んだ偉人たち』2008年
- ・上阿知東町内会「石井十次と上阿知」



## 「ウィリス動脈輪」の トーマス・ウィリス

昭48 久山 秀幸

平成27年4月発行の本誌に「言語療法士のパイオニアと脳神経外科医」という小著を寄稿し、それをきっかけに神経学の歴史に興味を持つようになった。

神経学の源流を特定することは困難である。なぜなら、神経機能障害などについての断片的記述はヒポクラテス（Hippocrates, 460-377 B.C.）の時代にもあり、さらに、大英博物館に展示されている紀元前645年頃の「アッシリア王の獅子狩り」の背部を矢で射られ両脚対麻痺のライオン（写真1上）と頭部に矢が刺さり頭蓋内圧亢進で嘔吐しているライオン（写真1下）の姿は、まさに神経症状の描写であり、紀元前数百年以上にまで遡るからである。ヒポクラテス以後の最大の医学者として、ガレヌス（Claudius Galenus, 130-200 A.D.）がいるが、解剖学のみならず、神経系研究への科学的な道を開いたトーマス・ウィリス（Thomas Willis, 1621-1675、図1）は、「ウィリス動脈輪」で有名であり「神経学の創始者」といわれている。



写真1 アッシリア王の獅子狩り（BC 645年）  
ライオンの背部に矢が刺さり両脚の対麻痺をきたし（上写真）、別のライオンは頭部を射られ嘔吐している（下写真）（2019年撮影）

私の敬愛する西本 詮 岡山大学名誉教授は、「もやもや病（ウィリス動脈輪閉塞症）」に深くかかわっていた。また、その関係で私は「もやもや病の手術前後の脳血流量」に関する臨床研究などをしたこともあり、「ウィリス動脈輪」に興味があったので、



図1 トーマス・ウィリス（45歳）  
Pathologiae cerebri（1667）に掲載

トーマス・ウィリスについて調べた。

ちなみに、「もやもや病」の歴史については、1961年に東京大学から内頸動脈閉塞症として5例が発表され、そのうち2例が本症の診断基準を満たしていた。その後本症は急速に注目を集めるようになり、1963年春に慶應義塾大学から「ウィリス動脈輪不全症」として4例が報告され、同年夏には岡山大学からも2例報告された。その後、各施設からの報告があり1965年には96例の本症が報告された。本症が国際的に知られるようになったのは、1967年パリで開催された第8回国際神経放射線シンポジウムのときである。渡仏前の加藤俊男慶應義塾大学放射線科教授が岡山まで来られ西本先生に発表にふさわしいものを求められ、西本先生は上記96例の本症のスライドを渡された。シンポジウムでは、発表を終えた後大反響で次の講演に進めなかったとのことであった。西本先生は本シンポジウムには出席されなかったが、加藤先生が西本先生とお二人の名前で発表され、外国では、「西本病」（Maladie de Nishimoto）と呼ばれるようになった。現在では、国内外で「もやもや病」（Moyamoya disease）が正式な病名となっている。

15世紀のヨーロッパでは、イタリアで始まったルネサンス期にダ・ヴィンチ（Leonardo da Vinci, 1452-1519）らにより芸術文化が著しく繁栄したが、以後のヨーロッパ史はイギリス抜きには考えられない。17世紀のイギリスは清教徒革命（Puritan Revolution）など大混乱の社会のなか、ニュートン（Isaac Newton, 1642-1727）の活躍、英国王立協会（The Royal Society of London）の設立など自然科学が進歩した。



1603年、江戸幕府開闢の年にテューダー朝が終わり、スコットランド王ジェームズ六世（James VI of Scotland）がイングランド王位を継承してジェームズ一世（James I of England）となりステュアート朝が始まった。ところがジェームズはイングランド古来の国政をないがしろにし、神授王権をとらえ絶対主義を行い、民主主義者を迫害した。その子チャールズ一世（Charles I）も専制を行い、1640年に召集された議会は国王と決裂し内乱となった。1642年から議会軍と国王軍の内戦が始まった。エッジヒルの戦いは引き分けに終わった。その後、チャールズ一世ら国王軍は、ロンドン制圧を図ったが防備が固いため断念し、オックスフォードに退いて軍事拠点とした。1645年には、オックスフォード包囲へ向かっていたエセックス伯の軍に勝利した。最終的には、議会と軍を指導したオリヴァー・クロムウェル（Oliver Cromwell, 1599-1658）が勝利し、1649年に暴君を処刑して、清教徒革命は終わり共和制が実現した。しかし、この共和制はクロムウェルの死後に崩壊し、1660年に王制と国教会が復興した。

その後、1665年にはロンドンでペストが大流行し、1666年にはロンドン大火が発生し混乱状態が続いた。チャールズ二世（Charles II）は巧妙に治めたが、弟ジェームズ二世（James II）はローマカトリックの信教を国民に強制した。カトリックとは即反動であり、これに聖俗の統治エリートは一致して反対し、1688年から2年間の名誉革命（Glorious Revolution）が起き、「権利の章典」（Bill of Rights）が發布され、ようやく議会制民主主義の勝利が確定した。

そのような時代背景のなか、ウイリスは、1621年1月21日にイングランドのウILTシャー（Wiltshire）のグレート・ベッドイン（Great Bedwyn）に生まれた。その後、家族はノース・ヒンクシー（North Hinksey）に移り少年時代を過ごした。この地はオックスフォードに近く、牧草地の広がるのどかな田舎（図2）で、



図2 1575年頃のオックスフォード

オックスフォードとの間にはテムズ川（写真2）があり、ウイリスは小舟で川を渡ってプライベートスクール（School of Edward Sylvester）に通ったと思われる。通学の途中に恵まれない人に食料を与えるなど優しい面もあった。両親はこのことを知っており「この子は、自分が腹を空かせないため通学前に家で充分肉を食べていた」と言ってみ守った。

その後、1637年3月にオックスフォード大学に入学し、初めはクライスト・チャーチ・カレッジ（Christ Church College）で学んで1639年6月に化学士を取得した。ウイリスの父親は、ベッドインのウォルター・スミス卿（Sir Walter Smith）の執事であったが、彼はオックスフォードの包囲戦の際に伝染病（camp fever）で1642年に亡くなり、その十年前頃に亡くなった妻の隣でノース・ヒンクシーの教会（St Lawrence's Church）に埋葬された（写真3）。このような家庭内の不幸にもかかわらず、同じ年にウイリスは21歳で文学士を取得し、その後、医学に専念した。しかし、1642年に議会軍と国王軍の内戦が始まり、オックスフォードには国王軍の本拠地が置かれ、王のために多くの兵士が駐屯し、学者たちの中にも防衛のため武器を持つものがいた。大学の町オックスフォードは



写真2 オックスフォードのテムズ川（2019年撮影）



写真3 セント・ローレンス教会（2019年撮影）

1646年まで要塞化し、学者や医学生にはふさわしくない雰囲気となった。市民と学生たちは、要塞を強化するための塹壕や土塁を作った。大学の建物は軍事物資の倉庫として使用され、武器、軍服、軍馬の馬具や飼料が保管されていた。

大学の中庭には略奪された家畜が集められ転売されたり屠殺されたりした。大学はその機能を喪失し衰退した。そのような大混乱の年には新生生はほとんどいなかった。

1646年にオックスフォードが議会軍に包囲されたとき、クロムウエルの虐待は、どんな戦争よりも残酷であったとウイリスの義兄のジョン・フェル (John Fell) は書いている。この年にウイリスは医学士を取得している。その後、ウイリスは20年間オックスフォードで暮らすことになった。彼はマートン・ストリート (Merton Street) のクリスティ・カレッジ (Christi College) の指導教官の住むビーム・ホール (Beam Hall、写真4) に転居した。クロムウエルの時代には、教会で祈りを捧げることのできない人々がおり、この人々のためにこの家の一部を提供した。また、学者や議会派から追放された人々の避難所にもなった。

1657年にウイリスは、メアリー・フェル (Mary fell) と結婚した。彼女の兄のジョン・フェルは、ウイリスの友人で、一時期ビーム・ホールで一緒に暮らしていた。彼は、後にクライスト・チャーチ (Christ Church) の学部長、オックスフォード大学の副総長になった。

チャールズ二世が復興した1660年に、ウイリスはオックスフォード大学の自然哲学の教授になった。彼は、これまで、化学、数学、解剖学を長年教えていた。

解剖学を教えていた1650年に忘れることのできないことがおきた。それはアン・グリーン (Anne Greene) の復活である。彼女は22歳のメイドで、新生児を殺害したため12月14日にオックスフォード



写真4 ビーム・ホールとブルー・プラーク (ウイリスが1657年から1667年まで住んでいたことが示されている) (2019年撮影)

シャーの城で絞首刑に処せられた。1時間半後に死体はウイリスらのもとに送られた。棺を開けると彼女の喉からかすかな奇妙な雑音が聞こえ、ウイリスは、この女性はまだ生きていることに気づき、ベッドに寝かせ、5オンス (約140ml) 出血させ、喉を羽で刺激し、体をこすり、さら別の女性を添い寝させ温め、懸命に蘇生を試み、彼女は生き返った。1651年にオックスフォード大学の学生がこの出来事を絵に描いた (図3)。蘇生できた一因にオックスフォードの12月の低温による「低体温」が推察されている。その後、彼女は学生たちの運動により無罪となり、結婚し、3人の子供をもうけ15年後に亡くなった。この出来事は、学生たちの心に大きく響き、その詩作の旋風が巻き起こった。その中の一部には下記のような詩がある。

“Anne Greene was a slippery quean,  
In vain did the jury detect her;—  
She cheated Jack Ketch, and then the vile  
wretch  
‘Scap’d the knife of the learned dissector”  
(アン・グリーンは捕えがたい女だ  
有罪判決を無駄にした  
彼女は絞首刑執行人を欺いた  
解剖医のメスからも逃れた)

ウイリスの教え子たちには、天才的な業績を残したロバート・フック (Robert Hooke、発明の才のある顕微鏡学者)、ジョン・ロック (John Locke、内科医で哲学者)、リチャード・ローワー (Richard Lower) とエドムンド・キング (Edmund King) (世界で初めて犬で輸血を行った後にヒトで輸血を行う)、トマス・ミリントン (Thomas Millington、王立医科大学の学長で、後にウイリスの後継者としてオックスフォード大学の自然哲学科の教授となる)、クリストファー・レ



図3 オックスフォード大学の学生により描かれたアン・グリーンの物語



ン（Christopher Wren、非凡な建築家）など多くの偉人たちがいる。

これらの研究者集団は、オックスフォードの「見えざる大学」(Invisible College)ともいわれ、脳の構造と機能に関する研究を行った。その後、この中の幾人かが英国王立協会を設立することになった。この頃、実験哲学が最初にオックスフォードで行われた。

ウイリスは早く弟子たちに解剖学を教え、1664年に「脳の解剖学」(Anatomy of the brain with a description of the nerves and their function)を著した。本書の解剖図はクリストファー・レンにより詳細に描かれ、序文には、レンの素晴らしい挿図に対する謝意が書かれている。図4は、レンの描いた脳底部の挿図で、脳底部の動脈形態、脳神経などが見事に描写され説得力がある。

なお、レンは、その後、建築家としてセント・ポール大聖堂、ハンプトンコート、ケンブリッジ大学トリニティー・カレッジの図書館など多くの有名な建築物を残している。夏目漱石は、若いころ建築家になりたいと思っていた時期があったが、セント・ポール大聖堂を見てレンの才能に圧倒され建築家になることを断念したといわれている。レンの偉業は近年でも高く評価されており、50ポンド札紙幣（1981年から1994年まで流通）にも描かれた（図5）。

ウイリスは、脳神経の分類を行い、ガレヌス以来使われてきた脳神経の分類を9対に再分類した。滑車神経を第IV脳神経として記述した。第Iから第VIまでの脳神経は今日知られているものと違わない。顔面神経は聴神経とはっきりと区別されなかった。しかしウイリスは、内耳孔に入る神経には二つのタイプがある

と書いている。第VIII神経は舌咽神経、迷走神経、脊髄副神経のすべてを含んでおり、頸静脈孔に入るとされている。第IX神経は舌下神経であり、第X神経は上部頸髄の神経根であった。副神経脊髄根（spinal accessory nerve、現在の第XI脳神経）を初めて記載した。

ウイリスのもっとも有名な「ウイリス動脈輪」に関し、ヒトの脳の脳底部に動脈性吻合があることは、ベサリウス（Vesalius, 1514-1564）の弟子のファロピウス（Falloppius, 1523-1562）によって気付かれ、カッセリオ（Casserio, 1552-1616）が1627年に図示している。しかし、ウイリスは脳底動脈系に六角形の動脈の連続性があることを詳細に記述、描写し（図4）、この特有な動脈性吻合は、脳の各部位に最大量の血液供給を確実にすることや、連絡路によって相互の経路を補うことを論じ、機能的にも重要な意義があることをウイリスは認識していた。

ウイリスは、左右どちらの頸動脈から色素液を注入しても、大脳と小脳の隅々まで行きわたり同じ色に染まったと報告した。さらに、彼はこの解剖学的吻合が脳卒中を予防した2人の患者の病歴を記録している。例えば、脳卒中の既往のない患者で、右内頸動脈と右椎骨動脈が閉塞していた例を示し、その理由に脳底部の動脈輪（arteria circle）の相互連結（mutual conjoynings）による血液供給をあげている。

一方、ウイリスがこのような研究をする前に、ウイリアム・ハーヴィ（William Harvey, 1578-1657）は、血液が心臓から出て体内をめぐり最終的には心臓に戻ってくるという血液循環説を1616年のLumleian Lectures（1518年に始まった英国王立内科医協会（Royal College of Physicians）の講演会）で発表した。その後、医学は機能的科学（dynamic science）に進化した。ウイリスはハーヴィの仕事の重要さは知っており血液循環説を支持していたので、ハーヴィの研究からも大きな影響を受けていたと考えられる。

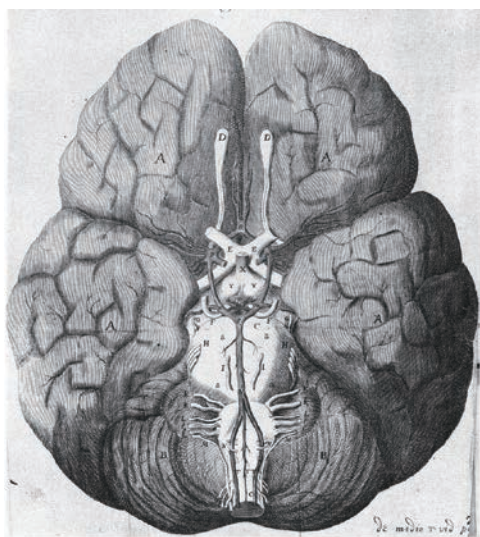


図4 クリストファー・レンが描いたトーマス・ウイリスの著書「脳の解剖学」の挿図



図5 クリストファー・レンが描かれた50ポンド札紙幣



ウイルスは、馬や羊の脳の比較研究も行っており、その違いについて以下のように述べている。「四足獣の頭蓋骨の中は狭い。一方、人は不滅の魂を神から授かっており、人の脳の実質は大きいため頭蓋骨の容積が大きくほぼ球形になっている。さらに、天を見るための直立した容姿で脳自体は最も高いところに位置している。一方、動物では顔は地面に向くようになっているが、脳は頭部の最も高いところにある。」

ウイルスは、「神経学」(neurology)の名付け親でもある。この語は、「神経の定理」(The doctrine of nerves)と記されたテキストの中に現れ、ギリシャ語にルーツがある。このほか、脳の機能局在についても記載し、大脳は思考と随意運動を、小脳は生命の中核であって、心、肺、胃腸などの不随意運動を司る部位と考えた。また、大脳皮質は記憶の蓄えられるところとした。脳実質内に血管があることを証明し、内包に生じた傷が片麻痺をもたらすことを初めて記載した。さらに、「脳病理学」(Pathologia Cerebri)を1667年に出版した。視床(Thalamus opticus)、レンズ核(Corpus lentiformis)、線条体(Corpus striatum)などの新たな用語を作った。そのほか、毛様体神経節、肋間神経についての記述もある。

臨床面でも多くの報告があり、産後の感染症(産褥熱、puerperal fever)などの内容を記述しているほか、側頭葉てんかん、ヒステリー(ギリシャ語で子宮を意味し、子宮の異常と考えられていたが、ウイルスは精神神経の異常と考えた)、発疹チフス、腸チフス、流行性脳脊髄膜炎、喘息、噴門痙攣症、胸膜炎、百日咳、四日熱も報告している。さらに、聾の婦人がにぎやかな環境で太鼓の音だけは聞き取ることができるという不思議な現象(paracusis of Willis)を報告した。また、下垂体からホルモンが分泌され循環していることを初めて記述した。

慢性硬膜下血腫と思われる例、麻痺が進行性に顕著になる慢性の筋疲労症をもたらす疾患(重症筋無力症、Myasthenia gravis)、糖尿病の尿の甘味などについても記述し、いろいろな糖尿病から真性糖尿病を区別した。

慢性硬膜下血腫と思われる例は、2週間ほど激しい頭痛を訴え、次第に増悪し、けいれんを起こし、訳のわからないことを口走った。死後、「頭蓋を開けたら半パイント(300ml位)以上の血液が噴出し、膜を取り除くと脳の空隙は透明な液で満たされていた。」

次に、重症筋無力症に関する最初の認識については、1672年、ウイルスが著した「動物の魂」(De anima brutorum)に記述されている。これはラテン語で書

かれていて、1683年にこの英訳本が発行された。英訳本もシェークスピア時代の英語で、文章はきわめて難解で、この両者のコピーを東京大学の豊倉康夫教授が入手され、300年後の1972年に両者を全文訳された。本論では症状が詳しく述べられており、最終的にウイルス自身がこの病気をどう考えていたかについては、「肉体の力の障害というよりむしろ気力の不足もしくは弱さに基づくと思われるこの種の仮性麻痺(Spuria paralyisi)においては、次のようなことも推測されるのである。すなわち、気力自身に欠陥があるのみでなく、局所の運動の虚弱や不能は、血液から筋肉の線維にどっと流れる爆発的結合部(Copulae explosivae)の欠陥にも、ある程度、原因があると考えられる。」と記載されている。とくに上述の“Copulae explosivae”の考えは、近代の重症筋無力症における神経・筋結合部のアセチルコリン学説を想起させるほど卓越したものであると豊倉先生は評価されている。一方、現在でも重症筋無力症患者がヒステリーと誤診されることがあるが、ウイルスの本症に関する論述の中でも、気力の病、ヒステリーとの鑑別に終始苦闘した様子がうかがわれ、ここに300年の重みを感じるとともに、あらためてウイルスの天才的な観察眼、優れた問題の捉え方に感服させられると豊倉先生は書かれている。

さらにウイルスは、糖尿病の尿が甘いことを近代医学の視野でとらえた最初の人でもある。この病気が多尿であることは知られており、「飲んだり食べたりしても、その量以上に尿が出る。これに加え常に不断の渇きといわゆる消耗熱とに悩まされている。」彼によれば、尿は「まるで蜜か砂糖をしみこませたように驚くほど甘い。」それで蜂蜜の甘さを意味するラテン語からきた形容詞mellitusが名前に付けくわえられた。さらに、昏睡のエピソードをもった二人の婦人についても記している。多尿の中でも尿が甘いもの(sugar diabetes)と甘くないもの(water diabetes)があることに気づき、糖尿病と尿崩症の違いも述べている。糖尿病の原因については、「非常に深く隠されているし、その起源がはなはだ深遠であるので、治ったと主張することはこの病気では極めて難しいことのように思われる。」と的を射た考察をしている。ウイルスが糖尿病について記した論文“Pharmaceutic rationalis (1674, 1675)”は彼の最後の論文であった。

また、晩年に肺血管を流れる血液の色の変化に気づき、肺における血液の酸素化を指摘した。

以上のようにウイルスは、偉大な医師であり、また学者として多数の著書を著した。その中で「ウイルス

動脈輪」が明記された「脳の解剖学」(1664年)は、脳研究の歴史の金字塔になって輝いている。

ウイリスは、1675年11月11日に肺炎にて54歳で死亡した。彼はウエストミンスター寺院の北翼廊で妻の隣に埋葬された。3世紀の時を経て摩耗した墓碑は、1961年に英国王立内科医協会とカナダ神経学会(Canadian Neurological Society)により新しい墓碑に替わった(写真5)。

革命による戦乱期に、おそらくは葡萄酒のような固定液を使って脳を固定し、虫メガネ程度の研究機器しかなかった環境下で、350年を経た現在も生き続けている業績を残したウイリスに重ね重ね感服した次第である。

#### 参考文献

1. A. Earl Walker. 石島武一 訳 「The Genesis of Neuroscience (神経科学創世記)」工学図書、2005年
2. Arráez-Aybar L. et al. Thomas Willis, a pioneer in translation research in anatomy (on the 350<sup>th</sup> anniversary of Cerebri anatome), J. Anat. 2015; 226: 289-300
3. Feindel W. Thomas Willis (1621-1675) - The Founder of Neurology, Canad. Med. Ass. J. 1962; 87: 289-296
4. Grand W. The anatomy of the brain, by Thomas Willis. Neurosurgery 1999; 45: 1234-1237
5. 後藤昇 Thomas Willis, CLINICAL NEUROSCIENCE, 1998, Vol.16, 956
6. 近藤和彦 イギリス史10講 岩波書店、2014
7. Molnár Z. Thomas Willis (1621-1675), The founder of clinical neuroscience, Neuroscience 2004; 5: 329-335
8. レンシャルG. A. 他、二宮陸雄訳 インスリン物語、1969、岩波書店
9. 酒井シヅ Willis病(糖尿病) 原著を採る、内科、1986; 58: 1228
10. 佐野圭司 「脳神経外科の歴史」、CLINICAL NEUROSCIENCE, 1994, Vol.12, 106-107
11. 豊倉康夫 重症筋無力症に関する最初の認識 - Thomas Willis (1672) および Samuel Wilks (1877) の古典から - 日本臨床、1973; 31: 241-246



写真5 ウエストミンスター寺院のトーマス・ウイリスと妻フェルの墓碑は1961年に新しいものに替えられた(当時のタイムズ紙に掲載された写真)



## 医師養成の歴史と岡山大学医学部 —その4—

昭41 棕野 洋

### インターン制度廃止後における医学部入学定員数と国試合格者数の変化

一人の医師を養成するにはどの位の費用が掛かるのかについてははっきりした数字は明らかでない。授業料だけではとても賄いきれない額であろうから、6年間で平均3,500万円と言われる私大医学部の授業料と、入学金(28万2,000円)と6年間の授業料(321万4,800円)の合計である国立大学の350万円との差額以上である事は確かであろうと思う。いくつかの報告されている数字の中で、医学部の教育経費の中から医学科以外に使用する経費を引いて、学生数で割り、それに授業料を加えて計算した約3,600万円という数字が妥当なものではないかと思うが、日本私立医科大学協会、日医等の唱える6年間で1億円が必要という説もある。いずれにせよ昔から言われているように、他学部の人材養成費用に比べて、医師の養成には多額の費用が掛かることは間違いない。

その為、過剰な養成を行うことは適当でないとの立場から、国は厚労省の医師の需給に関する検討会等を参考に、医学部入学定員を定めている。

インターン制度が廃止されて初めての昭和43年(1968)の国試は、インターンを終えた昭和42年(1967)卒と、昭和43年(1968)卒業直後の2学年が受験したので、合格者は6,544名となったが、その後の国試合格者数は毎年3,000人台でほぼ同じであった。昭和36年(1961)の国民皆保険制度の確立に伴って、医療需要が増大し、医師一人当りの患者数が急増したので、医師不足の声が上がり、医学部の定員増や医科大学の新設の要求が強くなっていった。これに対して国は、まず入学定員の増加で対応し、昭和35年(1960)には2,880名であった入学定員が、昭和44年(1969)には4,040名に迄増加した。その為、昭和40年代には国試合格者も年々増加していったが、それでも国試合格者数の方は、昭和47年(1972)迄は3,000人台であった。

全国的にインターン闘争や東大紛争などで荒れていた時代に、医師不足に対する医師養成手段として、佐藤内閣の医学部新設策がスタートした。時は高度経済成長期でもあったので、昭和45年(1970)特に医師不足の深刻だった秋田県に秋田大学医学部設置となり、

同じ年の北里大、杏林大、川崎医大新設に続き、昭和46年(1971)帝京大、聖マリアンナ医大、愛知医大、兵庫医大、昭和47年(1972)には昭和43年(1968)開学の藤田保健衛生大学(現在の藤田医科大学)に医学部が設置された他に、自治医大、獨協医大、埼玉医大、金沢医大、福岡医大と私立を中心に次々と医学部が出来た。

昭和47年(1972)日本列島改造論を唱えて登場した田中内閣は、翌昭和48年(1973)無医大県解消計画として、一県一医大構想を閣議決定した。こうして、昭和48年(1973)旭川医大、山形大、筑波大、愛媛大の国立4大学と準大学の防衛医大、昭和49年(1974)浜松医大、滋賀医大、宮崎大の国立3大学と、東海大、近畿大の私立2大学、昭和50年(1975)富山大、鳥根大の国立2大学、昭和51年(1976)高知大、佐賀大、大分大の国立3大学、昭和52年(1977)私立の産業医大、昭和53年(1978)福井大、山梨大、香川大の国立3大学と、昭和54年(1979)に設立された最後の琉球大迄に、国立18(防衛医大を含む)、私立16の合計34校が新設された。これらの新設の医学部の中で、富山大学は富山医科薬科大学を新設後、平成17年(2005)既存の富山大学と統合し、その医学部となり、現在に至っている。山形、筑波、愛媛、琉球の各大学は既存の国立大学に医学部が新設されたが、その他は医科大学として新設され、旭川、浜松、滋賀の3医科大学以外は、平成15年前後に行われた国立大学法人化と共に既存の国立大学と統合して、医科大学から各県の国立大学医学部となり、現在に至っている。以後、全国の医学部数は80となり、昭和60年(1985)には、入学定員は8,340名にまで増加した。



医師が増えると、診療報酬が増え、医療費が増えると言われている。その為、医療費を抑える為には医師の削減が必要になる。そこで、入学定員を増加する一方で、医師数の適性水準の見直しの動きが出て来て、昭和61年(1986)に10%削減を目指すことが決定され、医師の入学定員は平成2年(1990)には7,750名、平成9年(1997)には7,695名まで減少し、平成15年(2003)以降は7,625名に固定された。しかしこの抑制策により、地域による医療の格差や小児科医、産婦人科医の不足等の診療科格差を招く事になった。

特に勤務医不足、医師の地域及び診療科の偏在の深





刻化の為、平成20年（2008）には定員を7,793名に増員し、平成21年（2009）には過去最高の8,486名迄増加した。

平成22年（2010）からは卒業後地元勤務を条件に奨学金を受ける「地域枠」、研究医養成の為の「研究医枠」、歯学部定員削減分を医学部の入学定員に振り替える「歯学部振替枠」の3つの定員枠による増員を令和3年（2021）まで行なうことで毎年増員され、平成27年（2015）の定員は9,134名となり、平成28年（2016）には、平成23年（2011）の東日本大震災からの復興対策である、定員100名の東北医科薬科大学の新設もあって、9,262名と更に増加した。平成29年（2017）には、グローバル化に備えた、国家戦略特区である成田市に開学した、国際医療福祉大学の定員140名が加わり、更に増加して、9,420名となり、平成30年（2018）は9,419名、平成31年（2019）は9,420名となった。平成31年（2019）迄に、地域枠927名、研究医枠40名、歯学部振替枠（平成25年（2013）以後はなし）44名の増員があった。厚労省では暫定方針として、令和3年（2021）度まではこの水準を超えない範囲とし、令和4年（2022）度以降は、団塊の世代が後期高齢者となる令和7年（2025）以降の医療ニーズ、人口減、医師の働き方改革の検討等に応じて検討することとしている。

定員増加の結果国試合格者数は次第に増加し、昭和48年（1973）は4,146名となり、昭和55年（1980）には7,000人台となり、年2回受験出来た最後の年である昭和59年（1984）には合格者が8,449名となった。従来春と秋の年2回行って来た国試を、昭和60年（1985）からは年1回春だけ行うようになり、以後毎年ほぼ8,000名前後の合格者があったが、平成30年（2018）9,024名、平成31年（2019）9,029名と9,000名を突破するようになった。

平成の30年間で、18歳人口は193万人から118万人迄減少したが、この間に大学進学率が25%から53%に増加した為、学生数は207万人から291万人に増え、大

学は499校から782校に増えた。18歳人口の減少が続く中で、大学の数は増えており、将来を見据えて大学の統廃合が、医学部を含めて話題になってきた。

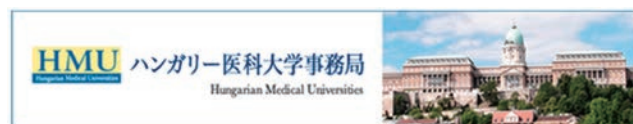
国は令和12年（2030）頃までは高齢者が増える為に医療需要は増加するが、令和22年（2040）頃には人口が40～50万人位の県が出てきて、一県一医大制の維持が困難になると見込んでいる。

### 海外の医学部卒業ルートによる国試合格者

最近では入学の難しい日本の大学を避けて、外国の大学を卒業し、日本の国試を受けて医師になる人も増えて来ている。予備コースを含めた7年間で、生活費を含めても2,000万円位で済むようだ。

学生募集をしている大学のうち、北京大学では中国語、ハンガリー、チェコ、スロバキア、ブルガリア等EU加盟国では英語で授業が行われ、入学はし易いが、熱心に学ばないと卒業しにくいという。

特にハンガリーでは、日本からの1期生が平成18年（2006）に入学し、平成25年（2013）初めて7人の卒業生が出た。うち6人が帰国し、そのうち4人が平成26年（2014）に日本の医師国試に合格した。以後、平成27年（2015）13人、平成28年（2016）9人、平成29年（2017）15人、平成30年（2018）13人、平成31年（2019）17人が日本の医師国試に合格し、ハンガリー以外の人達を加えて、平成31年（2019）2月実施の第113回国試では95人が合格したという。ハンガリーでは令和元年（2019）の日本人卒業生は20人に達する。日本からの入学者の1/3がストレート、1/3が留年を経験、1/3が途中で脱落し、卒業率は約50%だそうだ。このルートで我が国の医師になることは決して容易ではないようだが、増加傾向にある。2018年度の日本人のハンガリー医科大学事務局への応募者は265人で、合格者は80人であったそうだ。



ハンガリーでの医師免許取得を意味する卒業が出来れば、英語で教育を受け、EUの医師免許も持つ彼らの存在と今後の活躍は非常に興味深い。その一面、グローバル化が進み、益々この傾向が増して、いくつかの国外ルートでの我が国の医師が増えてくると、主に入学定員の調節により細かく規制してきた従来の調整のやり方に、問題が生じる可能性もあるだろうと思う。人口の減少が進む我が国に於ける医師需要の算定は更に難しさを増すことだろう。





が導入したもので、その後特に私大を中心に急速に採用された。AO入試による入学者は、平成12年（2000）は入学者の1.4%であったが、平成24年（2012）には8.5%、平成29年（2017）に9.09%と増加している。推薦入試の増加も著しい為、一般入試による合格者は平成12年（2000）の66%から平成29年（2017）には55%とほぼ半数まで下がってきて、大学生の学力低下が心配されるほどになっている。

	高校からの推薦	学力の重要度	面接？ 面談？
AO入試	✕ 不必要	↓ 低い	🗨️ 面談
推薦入試	◯ 必要	↑ 高い	👤 面接

偏差値の高い医学部入試でも、地域及び診療科の医師偏在や医師不足を解消する為に、地域枠や研究医枠の推薦入試が増加している。これらは出願資格を地元出身者に限定した推薦入試で、国公立の他に私立でも積極的に取り入れるようになった。

センター試験に低めの基準点を設け、それ以上なら、学科試験はせずに、書類審査と、面接、小論文等を参考にして決めるので、比較的入りやすい。自治体から6年間奨学金が出るが、返済免除となるには、研修期間を含めて1.5倍の9年間は指定される病院で勤務する必要があるという条件が付く。この場合も募集人数は大学によって異なる。

令和2年（2020）度国公立大学医学部医学科の、AO・推薦入試は、北大、旭川医大、札幌医大、弘前大、東北大、秋田大、山形大、福島県立医大、筑波大、群馬大、東大、東京医歯大、横浜市大、新潟大、富山大、

金沢大、福井大、山梨大、信州大、岐阜大、浜松医大、名大、名古屋市大、三重大、滋賀医大、京大、京府医大、阪大、大阪市大、神大、奈良県立医大、和歌山県立医大、鳥取大、鳥根大、岡山大、広島大、山口大、徳島大、香川大、愛媛大、高知大、佐賀大、長崎大、熊本大、大分大、宮崎大、鹿児島大、琉球大と増えて来ている。

国立大学協会は、AO・推薦入試の割合を令和3年（2021）度迄に国公立で3割まで増加させる目標を掲げている為に、今後も増加が見込まれている。

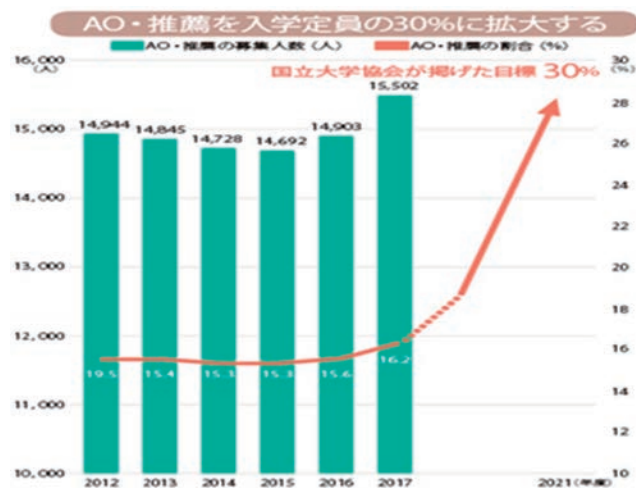
### 国際バカロレア入試 (IB International Baccalaureate)

グローバル時代に対応する大学入試として、昭和43年（1968）ジュネーブで設立された非営利団体の大学入学試験、教育プログラムである国際バカロレア (IB) 入試がある。スイスに集まる各国の外交官や国際機関で働く人達の子弟が母国で大学に進学する際に、世界共通の大学入学資格及び成績証明書を与えるプログラムとして始まった。

言語（2か国語）、人文科目（歴史、経済、地理等から1科目）、実験科目（生物、化学、物理等から1科目）、数学、選択科目（芸術、音楽等）の6科目の学習の他、一般教養、卒論、社会奉仕活動、クラブ活動等も必要とされているプログラムで、学業だけでなくあらゆる点でバランスの取れた生徒の育成を目標にしている。ジュネーブの本部に登録された学校で、2年間の課程 (IBディプロマプログラム) を修了し、IB試験で一定以上の成績を収めた者にIBディプロマが与えられ、これが世界の多くの国の大学の入学資格として認められている。我が国では、昭和54年（1979）から国際バカロレアの終了資格を持つ18歳の生徒を、日本の高校を卒業した者と同等以上の学力を有する者として、大学受験有資格者と認めている。

医学部医学科の国際バカロレア入試は、国際バカロレア資格を有し、言語（日本語を含む2か国語）、理科2科目および数学を修得した者に対して、書類審査を行い、日本の高等学校卒業レベルの基礎学力と医学を学ぶ上で基盤となる科目の理解度を評価し、面接で将来の医学・医療の担い手としての適性を評価して決定するものである。

平成25年（2013）10月の「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」に於いて、「大学は、入学者選抜において国際バカロレア資格及びその成績の積極的な活用を図る。国はその為に必要な支援を行うとともに、各大学の判断による活





用を促進する。」とされた。そして、日本における国際バカロレアの普及を目的として、平成30年（2018）5月に文科省の委託を受けて文科省IB教育推進コンソーシアムが設立された。

国のこうした動きを受けて、外国の大学へ進学する時だけでなく、我が国の大学に進学する際においても、国際バカロレアのスコア等を活用した入学者選抜を積極的に導入又は更に拡大する動きが広がって来ている。



IB入試につながる国際バカロレアの認定を受けている学校は、令和元年（2019）11月現在、世界153以上の国・地域において約5,000校ある。国際バカロレアの4つのプログラムの全てを導入することも、どれか1つのみ導入することも可能で、学校教育法第1条に規定されている日本における認定校（一条校）は、39校ある。

平成27年（2015）8月19日付で、国際バカロレアと日本国内の学習指導要領の双方を無理なく履修出来るようにする特例措置が公布・施行された。それにより、IBと日本の高校卒業資格の双方を取得出来るようになった。日本の学校では、毎年11月に約3週間にわたって各教科の厳しい試験があり、全てIB機構が採点する。全科目で45点の満点中、平均点は30点位で、24点以上が必要だそうだ。英語で学び、国際的感覚での教育を受ける認定校での学びは、正に国の目指す方向と一致するので、日本にあるIB認定校を卒業し、IB入試を受ける医師へのルートも今後増えてくるだろう。政府が勧めるだけでなく、そのような人材を求めている経団連も、グローバル人材の育成に有効な手段であるとの声明を発表している。

平成30年（2018）12月現在、国際バカロレアを活用した大学入学者選抜が、国立19、公立7、私立26の52大学で実施されている。国立大学で全学部を対象にIB入試を導入しているのは、岡山大、鹿児島大、豊橋技術科学大、名大、京都工芸繊維大、金沢大、筑波大、東京医歯大、お茶の水女子大の9大学で、保健学科の他に医学部医学科が受験出来るのは、平成30年（2018）8月現在で、東北大、筑波大、東京医歯大、岡山大、

広島大、鹿児島大となっている。

岡山大学では、平成24年（2012）に国立大学では初めて、理学部、医学部保健学科、工学部、農学部、MP（マッチングプログラム）コースにおいて国際バカロレア入試を導入し、平成27年（2015）からは医学部医学科を含め、全学部で実施している。

### 偏差値や学力とは別の視点からの入試及びSociety5.0と教育改革

平成31年（2019）の入試において、全国81の医学部（国立42、公立8、私立31）の募集定員9,420人に対して、志願者数は約11万人で、その倍率は約11.7倍であった。

医学部の偏差値に関して幾つか報告されているが、令和元年（2019）9月7日号の週刊ダイヤモンドによると、国公立医学部の平成31年（2019）の偏差値は、東大78、京大77、阪大76と続き、記載されている旧7帝大、旧6医大の全ての医学部の偏差値は72以上を示していた。

約20年前の平成7年（1995）と比べると、東大、京大、阪大、東北大、九大では僅かに下降気味だが、その他は殆ど全ての大学で偏差値は同じか上がっていた。

私立では慶応の75をトップに、記載されている21大学の全てが70以上を示していた。

平成7年（1995）と比べると、慶応は下降していたが、殆どの大学で上昇しており、我が国の医学部受験が私立を含めて、難しさを増していることを示している。その理由の一つとして、平成20年（2008）以降、生き残りをかけて、国試に合格出来る優秀な学生を集めようと、有名私立大学の医学部では、数百万円単位で学費の値下げをした為に、私立を受験しやすくなった事が挙げられる。学費を下げた大学では偏差値が上昇し、私立では、学費の安い大学の偏差値が高く、学費の高い大学の偏差値は低い傾向がみられるようになった。

最も公平だとして、従来学力面からのみで選抜されてきた医学部入試も、AIに負けない、グローバル人材育成の面から見れば、別の評価基準の下で行なわれてもおかしくはない。入学後はAO入試で合格した学生の方が、その後の学業成績が優れているし、退学者も少ないとの報告も出ている。高い偏差値が更に上昇傾向にある医学部入試に於いても、一方では学力以外の能力が評価される人達が次第に増えてきており、一般入試に比べて、入り易いと言われている試験を受けて入学した彼らの評価が決して低くはないという現象は面白いと思う。基本的には、多くの先進国がそうであるように、入り易いが、しっかり勉強しなければ卒

業は難しいということが、特に医学部の場合には求められるべきなので、入り口での篩としては、知識偏重の入試よりも、思考力や主体性や判断力や表現力を重視する入試の方がこれからの入試には望ましいと思う。令和元年（2019）7月の朝日新聞経済気象台によると、教育制度で高い評価を受けているシンガポールやフィンランドでは、偏差値による比較では低位の学生のやる気をそいで、更に勉強しなくなる為に、偏差値で差をつけるのをやめて、個々の学生の進歩を見ていくことに集中するのだそうだ。

平成7年（1995）に制定された「科学技術基本法」により、政府は「科学技術基本計画」を策定し、長期的視野に立って体系的かつ一貫した科学技術政策を実行することになり、5年毎に改訂している。

平成28年（2016）に改訂された第5期科学技術基本計画の中で、「Society5.0」という文言が初めて登場した。

狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、これからの我が国が目指す新たな社会を指すもので、我が国が独自に名付けたものである。これまでの情報社会（Society 4.0）では知識や情報が必ずしも共有されず、分野間での連携が不十分であるという面や、多くの情報の中から必要なものを拾い出す作業が、限られた人の能力では個人の能力差等もあって、限界があるという面があり、対応には不十分な面があると考えられていた。

Society5.0とは、フィジカル空間（現実空間）のセンサー（IoT（Internet of Things））からサイバー空間（仮想空間つまりクラウドのデータベース）に集積された膨大なビッグデータをAI（Artificial Intelligence）が解析し、それがロボット等を通して人にフィードバックされ、これまでとは違った産業や人間中心の社会（Society）を実現するものである。

令和2年（2020）1月に、トヨタが2000名規模の住民が暮らす実証都市建設を令和3年（2021）静岡県で着

工予定であると発表した。急速に時代は動いている。

平成23年（2011）3月の東日本大震災からの復興戦略である民主党政権下の「日本再生戦略」は、次の安倍政権下で平成25年（2013）に「日本再興戦略」となり、以来毎年更新されている。

平成29年（2017）と平成30年（2018）には未来投資戦略として、Society5.0が取り上げられ、その実現を目指す閣議決定された。そして「AI・データを理解し、使いこなせる力」と「課題設定・解決力等のAIが代替できない能力」を兼ね備えた人材の育成を重要課題とし、その育成環境の整備に取り組み、小中高大一貫した理数系の能力向上が可能な教育カリキュラムや、大学での実践的な育成プログラムの作成をすすめている。令和元年（2019）にはこれが成長戦略となり、大胆かつスピード感を持って進めると閣議決定された。

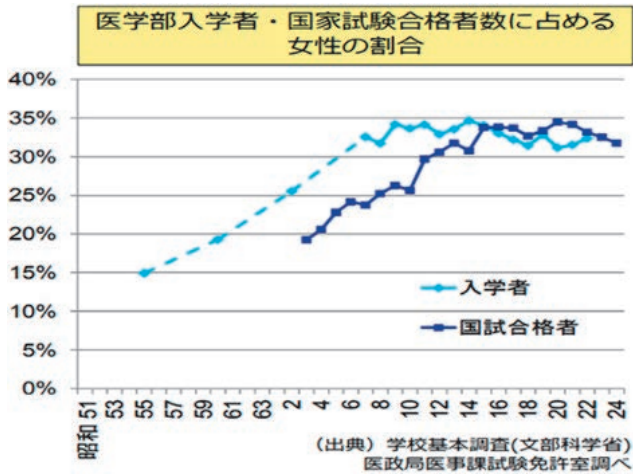
以後Society5.0実現に向けた人材育成の為の教育施策が、ICT（Information and Communication Technology）環境整備を中心に、大学から小学校に至るまで急速に変わるようになった。

これらの流れを考えると、大学改革を含めた教育改革や入試制度等、国の描く改革の流れは、昨年末の如き一時の反対の声があっても、今後も確実に着々と進められることだろう。中学校までの教育がいくら変わっても、大学入試が変わらなければ、それを目指して学ぶ高校生の学びが変わらず、結局は急速に変化している時代に対応出来る人材が育たない。国が求めているのは、検索すれば解決出来る知識の集積はAIに任せ、主体的に自発的に思考し、判断し、表現する力を育てるという視点からの入試であり、大学教育である筈だからである。

### 医学部入試と差別

平成30年（2018）の東京医大の入試に於いて、文科省局長が息子の合格と引き替えに、文科省の私大支援事業の対象校に選定するという受託収賄容疑で逮捕された事件を切っ掛けに行なわれた、医科大学や医学部入試に関する全国的な調査の結果、幾つかの大学で同窓生の子弟の優遇の他に、女性や多浪受験生が不利となるように、不当な操作によって差別を行っていたことが判明した。入試に於ける女性や浪人の差別を禁止する文科省の動きのあった直後の平成31年（2019）の入試では、男女の合格率の格差縮小と、多浪生の合格率も現役生のそれより伸びたという結果であった。





不適切な操作により不合格となった元受験生に対する救済の問題や、元受験生による損害賠償請求問題も起きている。私立大学にとって、同窓生の子弟には寄付金を求め易いという事や、多浪生の国試合格率が低い事が大学の評価を下げる一因になっているので、多浪生の入学は避けたい等の事が原因とされているようだ。

女性を差別する問題はこれとは別で難しい。結婚、妊娠、育児に関する社会全体の支援を充実させてみても、入試で男性と公平に扱われて女性医師が増えたとしても、医療現場でのやりくりの現実是不変な現実と思う。養成に多額の費用を要すると言われる医師が、卒業後に男性のようにフルに働きにくいという現実、費用対効果の面からも問題であろうし、女性差別が問題なら、東京女子医大の存在も問題となる。何より私立大学だけでなく、国公立大学に於いても、昔から女性の数を意図的に35%までに押さえようと制限してきたのではないかと思わせるデータもあって根が深い。

(以下次号)





## 学生だより

### 系統解剖学実習を終えて

医学科3年 井上七海

まず初めに、解剖学実習のために献体された方々、そしてそのご遺族の方々に感謝いたします。

実習初日、初めてご遺体を前にした時の気持ちを忘れることは出来ません。今までには経験したことのないような空気間の中、とうとう実習が始まるのだと腹をくくるとともに、献体してくださった方への感謝を忘れないよう真摯に向き合おうと心に決めたのを覚えています。教科書や手引きなどで事前に予習をした上で実習に臨みましたが、人間の体は今までに幾度となく見てきたイラストには程遠いと感じました。例えば、一般的によく見る胃や腸、肝臓などの位置関係のイラストも決して間違えているわけではなくむしろ正確ではありますが、そういった内臓があらわれるのは体表側にある数々の筋肉や血管を観察した後です。そういった筋肉や血管には大小かわらず各々に名前があり大切な役割を持っています。それらを同定し、機能を理解するのは教科書などを見ながらでも困難な作業でした。また、印象深かった出来事としては他にも、教科書の図を見ながら解剖をしていたところ、教科書には図示されていない血管が見つかり、その血管の行きつく先を調べたところ、全体の5パーセントしかいないとされる珍しい血管の分岐であることが分かりました。人間の体は性格のように「個性」があり教科書通りではないという当たり前のことを改めて学ばせていただきました。

解剖実習も約三分の二を終えたころ、解剖体慰霊祭に出席しました。慰霊の碑のもとへ献花され涙ぐまれるご遺族の方々を目にし、どのような思いでこの日を待たれていたのかと思うと胸が締めつけられるとともに大切なご家族を献体してくださったことに対する感謝の気持ちでいっぱいになりました。

解剖実習を終えて、私は人体の構造について深く理解することが出来たとともに、人の命を救う医師になるという自覚がより芽生えたと感じています。

最後に、献体してくださった方々、大切なご家族を献体に出すことを了承してくださったご遺族の皆様から心から感謝いたします。この解剖実習で得られた知識

と心構えを忘れず今後の医学の勉強に努めていきたいと思えます。

### 解剖実習を終えて

医学科3年 高橋拓真

先日、3か月にわたる解剖実習が終わった。医学部の中で一番大変だと聞いていた授業であって、これまで受けてきた中で終了した時の達成感は最も大きかった。解剖実習以前の基礎医学の授業はどれも学問的な側面が強く、高校の授業の延長のように自分には感じられていたので、自分が医学部生であるとの認識がかなり薄かったと思う。しかし、この解剖実習にあたりご遺体を前にして、自分は医学部に入学し、現在医学を学んでおり、将来は医師という職業を歩んでいくことを強く自覚させられた。自分が医学生であることの実感を得たことで、今後の医学の勉強に一層励もうと思うことができた。そして献体に進んでくださった方々の、医学の進歩と医学生の教育にける思いを知ることができた。このような思いのおかげで、医学生は一大学生である以上に将来医師という職業を歩んでいくことを約束された人間であり、そのことから帰結として、社会における役割や責任はより強く求められているのだと感じた。

毎回の授業前の予習はとても大変だった。日本語、英語、ラテン語で骨、筋肉、神経、臓器等の名前を書き込んでいると、いずれこれら全てを覚えなければならないのかと気の遠くなるようなこともあった。実際に実習を行って驚いたことは、教科書に書いてある図と本物のご遺体では、同じものでも全く異なって見える、ということだった。例えば、肺静脈の枝は2本ずつであると教科書の図には書かれており自分は今までそうとしか考えたことはなかったが、実際の心臓の左心房に複数の穴が開いていて驚いた。調べてみるとどうやら3本あってもおかしくないらしかった。そしてさらに驚いたことは、実習中まさに目の前にある骨、神経、筋肉、臓器等が、生前はどんな精密機械にも劣らないような正確さと精緻さをもって一人の人間を動かす、思考させ、生かしてきた、というまぎれもない事実である。人間も所詮は骨と肉の塊であると考えられることもできる一方で、その骨と肉の塊こそが現実には我々人間を人間ならしめているという、いわば当たり前のことに、改めて生命の神秘を感じた。

解剖実習を終えて、医学生としての自覚が得られ、人間の体の神秘に触れられた。将来は社会に求められている医師になれるよう、日々勉学に勤しもうと思った。

## 解剖学実習での学びと感謝

医学科3年 鍵田麻衣

まず初めに、貴重な人生を終え、解剖学実習のために献体された方々、そしてそのご遺族の方々に感謝いたします。

解剖を行った三か月は長いようで短い期間でした。解剖実習の初日にご遺体と向き合ったときから、多くのことを学ばせて頂くという気持ちで真摯にご遺体と向き合おうとこの三か月間頑張ってきました。その中で私は多くの貴重なことを学ぶことができました。まず驚いたのは、実際の体では今まで勉強してきた体に関する知識とは異なった部分がたびたび見られたことです。例えば血管や神経、臓器の形や大きさは人によって異なり、病歴によっては教科書と大きく異なるものもありました。私が解剖させて頂いたご遺体にはペースメーカーがついており、さらに心臓の血管では拡張手術が行われた痕があり、心臓の感触や形が他のご遺体とは違っていました。今まで勉強してきた医学的知識は決して間違いではないけれど、実際の体では人によって異なる部分があることを考慮しなければならないのだと分かりました。また、実習中に人間の体のつくりの複雑さ、精巧さに感動しました。実際に触れてみることで、とても細い神経や血管に至るまですべての構造に意味があることを再認識するとともに、これから医師になる者としての意識が高まりました。

また、ご遺体を納棺するとき、ご遺体の服や装飾品、手紙とともに納棺しました。きれいにたたまれた服、生前好んでいたであろう装飾品、そして手紙。どれをとっても献体して下さった方への愛があふれていて胸がいっぱいになりました。医学の発展のために献体を申し出て下さった方々はもちろん、こんなに愛していた家族を献体に出すことを了承して下さったご遺族の方々には感謝してもしきれません。献体して下さった方々のことを心に留め、これからよりいっそう勉学に励み、医学の発展に貢献したいと思いました。



# 教室だより

(令和元年9月～令和2年3月)

## 細胞組織学

令和元年12月に加藤睦子院生が医歯薬学総合研究科博士課程を修了し、博士の学位を取得しました。令和2年3月に、中尾大輝院生が医歯科学専攻修士課程を修了し、修士の学位を取得しました。

教育面では、10、11月に細胞組織学特別講義として、近藤洋一先生（大阪医科大学教授）、佐々木順造先生（岡山大学名誉教授）、金井正美先生（東京医科歯科大学教授）よりご講義いただきました。12月には、発生学特別講義として、中島裕司先生（大阪市立大学器官構築形態学教授）より「心臓形態形成と先天性心疾患」について、令和2年1月には、井関祥子先生（東京医科歯科大学教授）より「頭蓋顎顔面の発生」について、ご講義いただきました。

研究面では、「マウス副腎の分泌小胞の維持におけるREICの必要性」について*Cell and Tissue Research*誌（土生田院生、藤田助教、佐藤助教ら）に論文発表し、「先天性眼奇形と体細胞モザイクの関係性」について*Congenital Anomalies*誌に総説発表しました（大内ら）。「マウス副腎における小胞体ストレスとREICの関係性」について、*Acta Medica Okayama*誌に掲載予定です（藤田ら）。

学会活動としては、日本解剖学会第74回中国・四国支部学術集会にて、「ロイコトリエン受容体ゲノム編集マウスとその解析」について（11月、藤田ら）、第42回日本分子生物学会年会にて、「Toll受容体によるコオロギ脚再生の促進メカニズム」、「神経網膜形成における転写因子Lhx1の下流遺伝子の機能」について（12月、奥村院生、衣畑院生、板東ら）、研究発表を行いました。第125回日本解剖学会総会・全国学術集会是、COVID-19のため開催中止となり、「Toll様受容体とスカベンジャー受容体による器官再生メカニズム」、「Cyslr1 KOマウス樹立とその骨解析」、「真骨魚類が持つ複数のロドプシンの進化過程の解明」について（3月、板東、藤田、佐藤ら）誌上発表しました。（藤田 記）

## 人体構成学

9～11月に医学科2年の系統解剖実習が行われました。技術職員を中心に低濃度ホルマリン法など解剖しやすく安全な実習用遺体の保存法の開発を行っております。今後とも教育効果・実習環境の改善を目指して挑戦し続けます。

研究活動としては、品岡助教は国際リンパ学会（ブエノスアイレス、9月）にてシンポジストを務め、最新のリンパ解剖を発表してまいりました。また第4回リンパ浮腫治療学会学術集会（淡路島、10月）にて、シンポジウム、ランチョンセミナーにてリンパ解剖と、リンパ浮腫時の変化、それを基にした治療

戦略を発表してまいりました。これらの内容は*Radiology*誌の12月号に掲載されました。日本解剖学会第74回中国・四国支部集会（小見山技術職員、鳥根、10月）、第37回献体実務担当者研修会（大杉技術職員、仙台、3月）にて岡山大学が行っている遺体固定法の工夫を発表しました。多くの実務者と意見交換をすることでさらにより実習試料の作成を試みています。百田は11月27日にL'Aquila大学（イタリア）にて、基底膜と関連疾患についての講義を行いました。

11月10日に解剖体慰霊祭が開催されました。Animatoの弦楽奏に合わせて献花が行われ、御遺族の方々とともに御遺体を提供していただいた故人の冥福を祈りました。

1月28日に坂口和輝君が修士論文の発表を行いました。

3月の春解剖にて、L'Aquila大学より医学生が参加し、医学科生達と解剖学実習を通じた国際交流を行います。

解剖学会（山口・3月）にて大塚・百田は、「人体解剖学デジタル教材の開発と応用」と題してランチョン講演を行います。岡山大学とPanasonicの努力の結晶とも言える3D教材を広く普及させようと思います。（品岡 記）

## 脳神経機構学

人事関係では、昨年9月から当研究室に留学していた、イギリスSurrey大学のJonathan Smartと、7月から1ヶ月間留学していたUAE大学のMaitha Muftah Aleryaniが8月にそれぞれ帰国しました。10月には、中国ハルビン医科大学からO-NECUSプログラム留学生としてSun Jinを迎えました。日本語の学習をする傍ら、パーキンソン病モデル動物における神経保護薬の探索研究に加わっております。

研究活動では、8月にパーキンソン病講演会（沖縄）で宮崎が「ロチゴチンによるアストロサイトのセロトニン1Aレセプターを標的としたドパミン神経保護」について講演しました。また、10月の6th Asian College of Neuropsychopharmacology (AsCNP)（福岡）で浅沼教授がシンポジウムの指定討論者を担当し、宮崎が農薬ロテノン暴露による部位特異的グリア細胞機能不全についてポスター発表しました。また、メタルバイオサイエンス研究会2019（東京）で、宮崎が「ロテノン誘発部位特異的アストロサイト機能不全によるドパミン神経障害へのメタロチオネインの関与」について口頭発表し、磯岡院生が「ロテノン投与パーキンソン病モデルにおけるコーヒー成分のメタロチオネイン発現誘導と神経保護効果」について、菊岡院生が「高齢メタロチオネインノックアウトマウスにおける脳組織学的変化」についてそれぞれポスター発表しました。12月には宮地助教が第42回日本分子生物学会年会（福岡）で「トポイソメラーゼIIβは遠隔ゲノム部位の相同配列間に働いてクロマチンを脱凝縮し神経関連遺伝子の発現に関与する」と題しポスター発表しました。また、磯岡が第32回創薬・薬理フォーラム（岡山）で「ロチゴチンのアストロサイトセロトニン1A受容体を標的としたドパミン神経保護効果」について発表するとともに、「Dopaminergic neuroprotective effects of rotigotine via 5-HT1A receptors: possibly involvement of metallothionein expression in astrocytes.」として*Neurochem. Int.* に論文発表



## システム生理学

しました。1月には今年から教室研究紹介の形式となった第45回岡山脳研究セミナーで、浅沼が「妊娠・授乳期エポキシ樹脂BADGE曝露の新生仔マウス脳発達への影響」、宮崎が「部位特異的アストロサイト機能不全がもたらすロテノン誘発ドーパミン神経障害」、磯岡が「ロチゴチンのアストロサイトセロトニン1A受容体を標的としたドーパミン神経保護効果」、菊岡が「抗うつ薬ミルタザピンの神経-アストロサイト連関を介したドーパミン神経保護効果」についてそれぞれ発表しました。また、長年サイドワークとして携わってきた危険(脱法)ドラッグの神経毒性についての浅沼・宮崎の論文「The neurotoxicity of psychoactive phenethylamines “2C series” in cultured monoaminergic neuronal cell lines.」がForensic Toxicol. に受理されました。

大学院特別講義では、1月に長野清一先生(大阪大学大学院医学系研究科神経内科学准教授)に「筋萎縮性側索硬化症(ALS)の病態と治療への展望-TDP-43によるmRNA軸索輸送の観点から」について講義して頂き好評を博しました。

研究活動の詳細および発表論文に関しては、教室のホームページ(<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mnb>)をご覧ください。(宮崎 記)

## 細胞生理学

同窓会の皆様、こんにちは。細胞生理学(神谷、檜山、吉川、藤村)です。研究については、神経科学とがん生物学や免疫学の融合的統合的な研究を進めています。令和元(2019)年7月に、自律神経系が乳がんの進展に影響することを、先端的神経科学技術により解明した研究を、Nature Neuroscience誌に報告しました(Genetic manipulation of autonomic nerve fiber innervation and activity and its effect on breast cancer progression)。ヒト乳がん組織に自律神経が分布し神経密度が高いと再発率死亡率が高いこと、さらに動物がん組織に分布する交感神経を抑制すると、がんの進展が抑制されることを示し、新聞全国紙やNHK、Yahooニュースでも報道されました。今後、様々ながん種を対象に、がん組織の神経を操作してがんを抑制する新しい治療戦略「がん神経医療」を進展させていければと願っています。一方、教育については、自主活動として医学部1年生(中西君、栢野君、三前さん)、2年生(松井君)等が研究室に参加し、実験や英文論文抄読を行っています。自由意志で研究室に参加する貴重な人材で、成長が楽しみです。修士学生4名(有岡君、柞磨君、藤井君、向井君)も熱心に研究に取り組み、令和2(2020)年1月に学位論文発表を終え卒業し社会に巣立ちます。博士大学院生黄さん(中国)、畝田くん(脳神経外科)も来年は論文を書くでしょう。秘書小野さんは、手作りのシフォンケーキやホットドック等を差し入れて下さり、笑顔がいっぱいです。細胞生理では、神経系と他系の連関する面白い研究を楽しく進めていますので、ご興味のある方は医師でも医学生でも、研究室にご参加いただければ大変嬉しく思います。(神谷 記)

当研究室は新学術領域研究「宇宙からひも解く新たな生命制御機構の統合的理解」の研究課題「重力変化を含む力学的ストレスに対するメカノセンシング機構」および防衛装備庁安全保障技術研究推進制度の研究課題「メカニカルストレス負荷システムの開発」を継続して行っています。また、2020年5月開催の第59回日本生体医工学会大会主催のための準備を進めています。

当研究室の研究論文がNature Communications誌(片野坂)、Biochemical and Biophysical Research Communications誌(高橋)に掲載され、それぞれプレスリリースを行いました。また今期は以下の学会で参加・発表を行いました。日本メカノバイオロジー研究会2019(9月:片野坂)、生体医工学シンポジウム(9月:寺町)、第57回日本生物物理学会年会(9月:森松、シンポジウム)、the 8th International Workshop on Cardiac Mechano-Electric Coupling and Arrhythmias(9月:入部)、第7回若手による骨格筋細胞研究会(10月:片野坂、澁谷)、第42回日本高血圧学会総会(10月:片野坂、シンポジウム)、第42回日本生体医工学会中国四国支部大会(貝原、赤嶺)。赤嶺さんは若手講演奨励賞を受賞しました。第71回日本生理学会中国四国地方会(11月:貝原)、第42回日本分子生物学会年会(12月:森松、招待講演)、2019 International Conference for Leading and Young Medical Scientists(12月:高橋、王晨)。王晨は最優秀ポスター賞を受賞しました。Biophysical Society Annual meeting(2月:森松)、第97回日本生理学会大会(3月:成瀬、高橋、貝原、王晨)。

メンバーに関しては、入部准教授が旭川医科大学生理学教室の教授に就任しました。片野坂助教は講師に昇任し、森松が助教に就任しました。(高橋 記)

## 分子医化学

魅力ある研究分野をつくるべく教育および各研究テーマに取り組んでいます。

人事関係では、本年度1月に博士の学位審査がありHa Thi Thu Nguyenさん(インプラント再生補綴学)が無事修了しました。彼女は引き続き博士研究員として当分野に残り、後輩の指導にあたる予定です。O-NECUS留学生として10月より中国医科大学のDING, Zixuanさんと、11月よりLU, Qian Qianさん(インプラント再生補綴学)が、また10月より英国Surrey大学のBethany Martinさんが特別聴講生として参加しています。2月に客員研究員として國友由理先生が研究に参加されました。

学会活動として、9月に金沢で開催されたProteoglycan国際会議で大橋はNeurobiologyのセッションの座長を務め、“How the perineuronal net controls plasticity: insights from different models to manipulate perineuronal nets in space and time”と題して同セッションで発表しました。また、枝松助教、大学院生2名(石橋、Nguyen)がポスター発表を行いました。10月に大橋は結合組織学会の下部組織である結合組織勉強会で発表

し、若手研究者と交流しました。11月には大阪大学で開催された西日本医学生学術フォーラム2019に引率教員として参加しました。医学部の学生も数名参加し、2名発表を行いました。他学の学生と交流し刺激を受けているようでした。また、同11月に大橋はベトナムの2大学（ハノイ医科大学、ハイフォン医科薬科大学）を大学間協定締結等の用務で訪問しました。将来優秀な博士課程正規生獲得できることを期待しています。12月に大野准教授が岡山歯学会優秀論文賞を受賞しました。また、Albert Einstein College of Medicine（アメリカ）より、能丸寛子先生をお呼びし、セミナーを開催しました。1月には大橋がミャンマー保健省会議にて招待講演“Basic Research Projects for Next-Generation Regenerative Therapy”を行いました。岡田名誉教授、木股教授には大変お世話になりました。大野准教授は1月に研究代表者を務める岡山大学次世代研究拠点「口腔器官の再構築から器官の発生・再生の統一原理の解明」の総括シンポジウムを東京大学の洲崎悦生先生、京都大学の坂本智子先生、渡辺亮先生、富山大学の箭原康人先生、理化学研究所の辻孝先生をシンポジストとしてお招きし、J Hallで開催しました。教室からも5演題ポスター発表を行いました。2月18-22日の間、大橋は共同研究で英国Leeds大学を訪問し、セミナーと共同研究打ち合わせを行いました。

教育関係では、2年次生対象の授業・実習が10月から12月までであり、教員全員で取り組みました。医学部非常勤講師として京都大iPS細胞研究所・渡辺亮先生、東京都医学総合研究所・神村圭亮先生、大分大学・佐々木隆子先生を招聘し、特別講義を拝聴しました。大学院の非常勤講師として同志社大学・堀哲也先生を招聘し、「小胞型グルタミン酸輸送体の発現量が中枢神経系シナプス伝達に与える影響」の講義を拝聴し、共同研究打ち合わせを行いました。（大橋 記）

## 薬理学

当教室は、「炎症反応の制御機構の解明、創薬開発」を目指しています。現在、抗HMGB1中和抗体や血漿高ヒスチジン糖タンパク（HRG）をバイオ製剤として中枢疾患や敗血症の治療に実用化するための研究をおこなっています。

教室員は、西堀正洋教授、和氣秀徳講師、勅使川原匡助教、王登莉助教、劉克約非常勤研究員、出石恭久客員研究員、大学院生の高尚澤、吉井將哲、高橋陽平、進吉彰、喬寒棟、村岡玄哉、技術補佐員の佐藤まどか、教室秘書の矢田真理子、木田由希子で構成されています。留学生が多く、国際色の豊かな研究室です。

昨年度は、日本薬理学会年会（西堀正洋、和氣秀徳、勅使川原匡、王登莉、高尚澤、吉井將哲、高橋陽平）、日本薬理学会近畿部会（勅使川原匡、吉井將哲、高橋陽平）、日本内分泌学会学術総会（勅使川原匡）、日本神経科学大会（西堀正洋）、日本神経精神薬理学会年会（西堀正洋）にて研究成果の発表をおこないました。さらに、国際科学誌に西村義人院生（Pharmacol Res Perspect）、高尚澤院生（Br J Pharmacol）の研究成果が掲載されました。また、1年前より教室員が一丸となって鋭意準備を進めてきた国際学会「第9回国際DAMPsとAlarminsシ

ンポジウム」（会長：西堀正洋）をJ-Hallにて開催しました。この会では非常に活発な議論がなされ、世界各国の参加者の方々に変な満足して頂くことができました。

新年1月には、教室員一同が日頃の感謝の気持ちを込めて同門会を開催しました。ここ数年の薬理学教室は、人材・研究資金共に充実し、他教室との連携も緊密なものとなり、学術的研究と臨床的創薬開発の双方が一步一步着実に進展してきています。今後もさらに鋭意努力していきたいと思ひます。

（和氣 記）

## 病理学（免疫病理）

令和元年9月から令和2年3月までの教室の動きを、簡単ではありますがご報告いたします。例年どおり、松川教授をはじめ一同、医学部・医学科3年生の講義・実習・試験と各々の研究などで多忙な毎日を送っております。さて、令和元年9月にO-NECUSプログラムの中国人留学生として勉学に励んでいた李甜甜（LI, Tiantian）、陳悦華（CHEN, Yuehua）が当教室での1年間の留学生生活を無事に終え、帰国しました。この2人と入れ替わりに、以前O-NECUSプログラムの中国人留学生として当教室で1年間過ごした田淼（TIAN, Miao）と新たな中国人留学生・王宇澤（WANG, Yu Ze）が大学院生として研究を始めました。また、中国人留学生・王天禕（WANG, Tian Yi）が研究生（令和2年4月より大学院生となる予定）として勉強を始めました。令和元年10月からは技術職員として越智由香利が新たに加わりました。最後に、本文責者の吉村禎造が4年半の准教授としての責務を果たし、令和2年3月をもって定年退職します。今後も教室員一同、諸先生方との連携を緊密にして更に頑張って行きたいと思ひますので、ご協力・ご支援のほどよろしくお願いいたします。（吉村 記）

## 病理学（腫瘍病理）

本年は医学部創立150周年を迎え、吉野は記念事業実行委員長として種々の活動をしております。また日本リンパ網内系学会理事長、国際病理アカデミー（IAP）日本支部理事長として、それぞれに課題と取り組んでおります。2021年には第61回日本リンパ網内系学会総会、第67回日本病理学会秋季特別総会の開催が決定し、病理学会と第12回アジア太平洋地区病理学会（APIAP）との当時開催の準備を進めております。日本病理学会員、IAP日本支部会員はアジア太平洋学会に極めて容易に出席できることとなり、アジア太平洋地区の病理医との交流の場を提供することとなります。昨今のグローバル化の動きに沿ったものとなるのが期待されます。教室員、教室関係者、同門の皆さまのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

教室内では9月に中国人留学生の彭芳麗が入学し、リンパ腫の研究をスタートしています。また4月から綾田義行が大学院に入学し、研究並びに病理研修をスタートいたします。岩国医療センターの守都敏晃が香川労災病院に赴任します。専門医取得等に関しましては、12月に行われた細胞診専門医試験に谷口恒平、岩谷佳代子が合格しました。行事面では10月に中国の合

肥で開催されたAPIAP congressに吉野、柳井、田中の3名で参加し、2021年岡山開催のAPIAPに向けて第一歩を踏み出しました。11月7日、8日開催の秋季病理学会総会並びにIAP教育セミナーには教室関係者から多数の参加がありました。11月16日に鄭州で開催された中華病理学会（CSP）で吉野がリンパ腫に関する教育講演を行いました。また、11月29日、30日に釜山で開催された日韓IAPでは吉野、柳井、田中の3名で参加し、発表ならびにディスカッションを行うとともにAPIAPの広報を行ってきました。12月に開催された中四リンパ腫カンファレンスでは多数の出席があり、症例について活発な議論が行われましたし、同月21日にはリンパ腫アップデートが開催されました。2月7日には第9回岡山県がん病理診断実務者研修会を開催しました。杉原雄策先生並びに関根茂樹先生にご講演をいただき、大変貴重な学びの時間となりました。10月19日の第130回スライドカンファレンス（世話人：鳥取市民病院 小林計太先生）と2月22日の第131回スライドカンファレンス（世話人：吉野正）が2回連続で岡山大学にて開催され、活発な議論が行われました。（田中健 記）

## 病原細菌学

教育面では、1月の修士論文発表会で医歯科学専攻修士2年生の磯村直弥さんが「*Vibrio alginolyticus*におけるmRNA結合タンパク質によるRNAアンタゴニストへのフィードバック制御に関する研究」、西村飛音さんが「*Elizabethkingia anophelis*の自然免疫回避能」の題目でそれぞれ修士論文発表を行いました。修士にふさわしい立派な発表を行い、修士課程を終了しました。4月からは磯村さんは国内製薬メーカーで、西村さんは治験業界でそれぞれ活躍する予定です。修士1年生の日野千恵子さんは、ビブリオの遊走調節機構についての実験に奮闘中です。

11月には、屋根瓦方式による教育プログラムの一環として、インドネシアのユダヤナ大学医学部5年生の4人の学生を特別聴講学生として受け入れました。細菌学実習の全日程に出席し、岡山大学医学部医学科の3年生と一緒に実習を行いました。4人の学生は、貴重な経験ができたこと喜んでいました。実習の他にも、4人の学生は教室で研究体験を行いました。その際、大学院博士課程3年生のI Putu Bayu Mayuraさんが研究指導を行いました。

研究成果では、11月に鳥取県米子市で開催された第72回日本細菌学会中国・四国支部総会では助教の美間健彦助教がビブリオの機能性RNAの発現調節機構について、博士課程3年生のI Putu Bayu Mayuraさんが*Elizabethkingia*菌の病原性についてそれぞれ発表しました。また、1月にミャンマーで行われた48th Myanmar Health Research Congressでは後藤和義助教がシンポジウム「Genomic Analysis in Microbiology」のシンポジストとして口頭発表しました。2月には愛知県名古屋市で開催される第93回日本細菌学会総会では、松下治教授、美間健彦助教、博士課程3年生のI Putu Bayu Mayuraさん、修士2年生の磯村直弥さんがそれぞれ発表する予定です。（後藤 記）

## 病原ウイルス学

12月から、1年生対象に、基礎放射線学を、3年生対象に、ウイルス学を開講し、腫瘍ウイルス学分野加藤宜之教授、国立感染症研究所獣医学部長前田健先生のご支援をいただきました。また、恒例の岡山医学振興会特別講義では、理事長難波正義先生にご講演をいただきました。また1月24日に山田教授の最終講義を催したところ、多数の皆様にご出席いただき大変有難うございました。

学会関係では、日本ウイルス学会（東京、令和元年10月）にて難波、山下が各1題を発表しました。また、12月の日本分子生物学会にて、難波が1題発表しました。

小川は、10月にアフリカに渡航、ザンビア共和国にて果食コウモリにおけるフィロウイルスの疫学調査を行い、引き続き『One Health』プロジェクトの一翼を担っています。

山田教授は令和2年3月末をもって定年退職し、新教授が決定・着任するまで、病原細菌学分野の松下治教授が代行教授を務めます。その間、また今後とも、これまで同様に、病原ウイルス学分野を、どうぞよろしく申し上げます。

（山田 記）

## 疫学・衛生学

2019年8月に頼藤貴志教授が就任し、約半年が経ちました。皆様からのご支援に、心より御礼申し上げます。

頼藤教授は、第31回国際環境疫学会年次総会（同年8月@オランダ・ユトレヒト）に出席・発表したほか、第78回日本公衆衛生学会総会（同年10月@高知）に出席しました。また、高尾講師が第63回中国四国合同産業衛生学会（同年11～12月@徳島）に出席しました。頼藤教授と鈴木助教は、本学の「サイバーフィジカル情報の応用研究拠点（Cypher）関係者打合せ」に参加しており、2019年11月の打合せでは、鈴木助教が研究概要の発表を行いました。

2019年12月には、同門でもある谷原真一先生（久留米大学教授）をお招きし、「医療ビッグデータと今後の医学研究」と題して講演していただきました。研究におけるDPCやレセプトの利用について、ご自身の経験を交えて興味深い話をいただきました。また、2020年2月には川上浩司先生（京都大学教授）をお招きし、「母子保健、学校健診情報の活用からはじまるライフコースデータの構築」と題して講演していただきました。

恒例のハーバード大学公衆衛生大学院講義では、Ichiro Kawachi教授をお招きし、社会疫学に関する大学院講義を行いました。また、学部2年生の「医学統計学」と学部4年生の「衛生学」を担当し、学部生が幅広い疫学・統計学的知識を習得できるように注力しています。

岡山産業保健総合支援センターおよび岡山労災病院と協力した産業医研修会のほか、NPO法人岡山健康医学研究会と協力した行政職員向け食中毒疫学研究会（初級）および感染症疫学基礎研修会を継続的に行っています。

2020年3月に、頼藤教授が第20回小児医学川野賞（社会医学分野）を受賞しました。受賞テーマは「疫学方法論を用いた乳



幼児および小児諸疾患における環境保健学的研究」です。教室HPでは多数の論文も紹介していますので、どうぞご覧ください。

今後ともご支援いただきますよう宜しくお願い致します。

(鈴木 記)

## 公衆衛生学

2019年8月から神田秀幸教授が就任し、新たな体制で活動をスタートさせています。

人事面としては、2020年1月に、久松隆史准教授が就任しました。また、同年3月には福田茉莉助教が着任しました。

教室の主な取組みとして、循環器疾患の予防医学研究と、それらに関連する喫煙・飲酒などの依存症の予防医学研究を行っています。循環器疾患の予防医学研究では、地域一般集団を対象として、家庭血圧や潜在性動脈硬化症に着目し、そのリスクファクターを解明するとともに、家庭血圧に関する産官学連携の地域フィールド研究に取り組んでいます。依存症の予防医学研究では、現代的な課題であるギャンブルやインターネットの依存・行動嗜癖について、精神科臨床医とともに取り組んでいます。

教室員の課題として、神田秀幸教授の基盤研究「インターネット依存における顕性うつをターゲットとした身体的精神的影響の解明」、久松隆史准教授の若手研究「一般日本人女性における不整脈の実態解明と時間医学モデルの構築」、長岡憲次郎助教の若手研究「抗アレルギー性ラクトフェリンサプリメントのアレルギー機序に関する研究」、福田茉莉助教の若手研究「地域保健活動はどのように住民の健康に寄与したのか? -鳥根モデルの歴史の変遷を例に」を、それぞれ科研費を獲得して実施しています。

教育面では、2019年9月に刘品媛(Liu Pinyun)さんがO-NECUSプログラムを修了しました。また、2020年1月に花北大輔君が修士論文発表会を終え、修士課程を修了しました。大学院講義では博士課程講義「臨床研究・ゲノムインフォマティクス実践論」が行われました。

教室の研究活動・論文に関しては、HP (<http://plaza.umin.ac.jp/okayamadph/index.html>) をご参照ください。

(長岡 記)

## 免疫学

人事面では2019年10月より、大学院博士課程に中国からの留学生Zhao Weiyangさんが入学しました。また同時期にO-NECUSプログラムの第5期生として、同じく中国からZhang Xingdaさんが加わりました。12月から2月の間は、秘書として宮岡恵理子さんが加わり、授業の準備や研究室の運営を手伝ってくださりました。

研究面では鶴殿教授がオンコロジーレクチャーミーティング(岡山)、免疫学・免疫療法に関する研究会(LEM研究会)(岡山)、第15回中国研究皮膚科セミナー(岡山)、第57回日本癌治療学会学術集会スポンサーシンポジウム4(福岡)、第14

回臨床ストレス応答学会(大阪)、I-O WEBセミナー(岡山)、第48回日本免疫学会学術総会(静岡)シンポジウム、Scientific Exchange Meeting in 山口(山口)、RCC Expert Seminar in Kagoshima(鹿児島)で招待講演を行いました。さらに第32回日本バイオセラピー学会学術総会(岡山)では座長を務め、和歌山県立医科大学医学部大学院(和歌山)と長崎大学(長崎)で特別講義を行いました。西田とZhaoが第14回臨床ストレス応答学会大会(大阪)、西田が第48回日本免疫学会学術集会(静岡)でポスター発表を行いました。工藤が第32回日本バイオセラピー学会学術総会(岡山)で口頭発表を行いました。

教育面では、10-12月には医学科3年生の寄生虫学を、外部講師の先生方にご尽力いただき、無事終えることができました。12-2月の医学科2年生の免疫学講義・実習も教室員が一丸となって無事に終わりを迎えられました。また来年度のMRIを前に、医学科2年生の中手さんが海外研究室配属に向け毎週の抄読会に参加しており、免疫学の勉強に励んでおります。

(工藤 記)

## 法医学

法医学実務面では、昨年1年間の剖検数は155体となり、一昨年の総剖検数を大幅に下回りました。年が明けてから2月7日までの剖検数は14体と、昨年をさらに下回るペースであり、死因究明等推進基本法が昨年6月に成立した本邦の現状を鑑みるに、この減少傾向が続くのはあまり望ましくないと心配している状態です。

教室内では、昨年4月から竹居セラさんが博士課程大学院生として泌尿器科から当分野へと所属を移し、死体の観察方法や解剖手技等を学ぶとともに、博士論文のテーマとしてミオグロビンに関する研究に着手しております。また、水島海上保安部からの法医学研修生として昨年9月から本年3月まで7か月間の予定で植木安菜さんを受け入れており、法医学教室の各種業務の体験や教室カンファレンスへの参加などに加え、溺死した死体の胸腔体積に関する死後CT画像を用いた研究にも取り組んでいます。ミャンマーからの留学生THU THU HTIKEさんは、博士号取得に向けて投稿していたシアンに関する学位論文が受理され、学位審査を終了しました。学位授与を待ってミャンマーに帰国予定となっており、岡山大学で学んだことを母国で活かしてくれるものと期待しています。昨年3月よりドイツのハンブルグ大学法医学研究所Püschel教授のもとに留学していた三浦助教は、同年12月末で帰国し、年明けより当分野での活動を再開しました。

昨年末の同門会総会・忘年会は、12月7日(土)にメルパルク岡山で開催いたしました。石津名誉教授にご出席いただき、全体の参加者数も昨年と同じ18名となり、皆様のお話も盛りあがってございました。

学術面では、学会発表としては、第98回ドイツ法医学会、第36回日本法医学会学術中四国地方集会学会、第2回日本法医学病理学会学術全国集会、第31回日本中毒学会中国四国地方会等において教室員が発表を行いました。

(三浦 記)

## 医療政策・医療経済学

昨年9月に医学科3年生に、今年1月に2年生に「医療管理学」の講義を行った。合地明先生が医療情報システムを、三好智子先生が医学生のキャリア形成を考える講義とワークショップを、筆者が医療政策論を行った。学生が真摯に受けとめてくれたことが印象に残るが、諸般の事情でこの講義は来年度から廃止となる。ご尽力を頂いてきた合地先生、三好先生に深く感謝します。

3つの教養講義を行った。「北木島のワークショップ」では学生管理に行き届かない面があり、関係者にご迷惑をおかけしたが、大過なく終えられた。「生命倫理学入門」では、学生がどういう物事に反応するか、手ごたえをつかめた。「医学入門(病気と社会)」の筆者の講義については、もう一工夫が必要だ。

政策的には、地域医療構想、働き方改革、医師の地域偏在・診療科偏在という三つの課題がある。筆者は、岡山県の地域医療構想アドバイザー、長野県立病院機構の評価委員、岩手県立病院経営委員会委員長などを務めている。各地の関係者と意見交換して感じることは、経営状況が非常に厳しい中で病院は対応を迫られており、こういう状況では「走りながら考えるほかはない」ということである。岡山県でいえば、病院病床が過剰な県南東部医療圏、人口減が続き高齢者人口も減りつつある真庭医療圏というように、人口動向、医療供給構構も地域ごとに異なっている。それぞれの地域で、各医療機関が連帯しながら「共存共栄」できるように微力を尽くしたい。

一部の男子学生による不祥事が起きている。筆者は、学生とのコミュニケーション不足を反省している。学生指導の専門家が「学生のごく一部に、態度が傲慢で、女性や医師以外の医療従事者を見下す発言をする者がいる」と指摘したことを重く受けとめてもいる。

岡山医学会雑誌第131巻第3号に「医師の働き方改革」という論文を執筆した。(浜田淳 記)

## 分子腫瘍学

研究面では、笹井香織が両備てい園記念財団の研究助成に採択されました。

今期の人事等としては、中国からの留学生ルンさん(任碧瑶、REN Biyao)がO-NECUS短期プログラムで10月に来日し、特別聴講学生として、約1年の予定で研究に参加しています。河原星斗が修士過程を修了し、県内の研究開発バイオメーカーに就職します。片山博志准教授は10月から12月にかけて約2ヶ月ヒューストンに滞在し、共同研究者との研究交流をおこないましたが、3月をもって海外の研究機関に転出されることとなりました。ご在任中は、研究面から教室運営まで広く尽力していただき、御苦勞も多い中、多大なるご貢献をいただきましたことを深く感謝致します。今後は、より広大な地ででのびのびと活躍されることを、心より期待しています。(堺 記)

## 腫瘍ウイルス学

本年度、当教室は加藤宣之教授が着任後、20周年を迎えました。当教室の本年度下半期の活動内容について報告します。

当教室は、C型肝炎ウイルス(HCV)関連のAMED研究班3班とB型肝炎ウイルス(HBV)関連のAMED研究班3班に本年度も参画しており、教室員一丸となって日夜、研究に励んでいます。論文発表としては、加藤教授が*Archives of Virology*誌に「Study of multiple genetic variations caused by persistent hepatitis C virus replication in long-term cell culture.」と題して発表しました。学会発表としては、オーストラリア・メルボルンで開催された2019国際HBV会議で上田助教がポスター発表、第6回日本細胞外小胞学会で團迫が口頭発表、第67回日本ウイルス学会学術集会で上田助教と團迫が口頭発表、第42回日本分子生物学会年会で佐藤助教と小野村院生がポスター発表というように、様々な分野の国内外の学会でそれぞれの研究成果を発表しました。

本年度3月で加藤教授は定年退官されますが、今後も特命教授(研究)として研究を継続されます。今後とも、当教室の御指導、御支援をよろしくお願いいたします。また、当教室の活動の詳細については、教室のホームページ(<http://www.okayama-u.ac.jp/user/med/dmb/index.html>)をご覧ください。

(團迫 記)

## 細胞生物学

[人事] 令和元年9月より、新しいメンバーとして博士課程にNI LUH GEDE YONI KOMALASARIさん、JIANG FANさんが加わりました。

[研究成果発表] 第92回日本生化学会大会(令和元年9月、横浜)に参加し、村田等講師がJNKによるリン酸化を介したSARM1のNAD<sup>+</sup>代謝と軸索変性への寄与に関する研究成果について発表を行いました。第78回日本癌学会学術総会(令和元年9月、京都)に参加し、阪口政清教授が座長、木下理恵助教と友信奈保子さんが癌の転移のメカニズムとその抑制を目指したタンパク質製剤の開発に関する研究成果について発表を行いました。2019年度若手支援技術講習会に参加し、山本健一助教が膀胱がんにおける腫瘍周囲微小環境機構の解析に関する研究成果について発表を行いました。第9回International DAMPs and Alarmins Symposium(9th iDEAs)(令和元年11月、岡山)に参加し、阪口教授が招待講演、木下助教が癌の転移抑制剤S100A8/A9抗体の開発に関する研究成果について発表を行いました。

[受賞、研究資金の獲得状況] 阪口教授が株式会社ホロンシステムとの共同研究契約を締結しました。山本健一助教が岡山医学振興会第19回公募助成に採択されました。

新しい年を迎えましたが、令和2年も教室員一同研究に励んでいきたいと思ひます。(木下 記)

## 細胞化学

当分野では、Photodynamic therapy (PDT) によるがん治療の基礎研究、ミトコンドリア機能と細胞機能発現の解析、動脈硬化の発症機序解明と分子イメージング技術（体内診断法）の確立、がんの新規画像診断・治療法（Theranostics）の確立、酸化脂質を中心とするメタボミクス研究、低酸素により誘導される細胞外マトリックス分解酵素であるADAMTS1に関する研究が、次世代がん医療創生研究事業（AMED）、挑戦的萌芽研究（JSPS）、さらには、特別電源所在県科学技術振興事業（岡山県）などの公的資金によって実施されています。これらの研究については、細胞化学、中性子医療研究センター、産学官連携センターの研究スタッフ、工学部、薬学部などの学内研究者、および、日本人大学院生（博士課程）、マレーシアからの留学生（博士課程）、さらには、京都大学の共同研究者が従事しています。

学術面では、令和2年1月に博士課程の薬師寺 宏匡が学位を取得しました。

教育関係では、医学科1年次生対象の医学生物学、基礎医学入門を分担で担当しました。また、2年次生対象の分子医化学の一部、生化学では脂質の講義と実習を担当しました。教養科目「生命の不思議2」では、津島キャンパスに赴いて授業を行いました。いずれの科目も学生が生命科学に深い関心を抱き理解できるよう、最新のトピックを交えるなど様々な工夫を加え取り組みました。（小淵 記）

## 消化器・肝臓内科学

岡田裕之教授は就任後5年目となられましたが、就任当初の情熱を忘れられることなく、日々の診療、研究、教育に多忙な日々を過ごしておられます。昨年10月には鹿田キャンパスを会場に日本内科学会中国地方会の会長を務め、学内外多数の先生方に参加をいただき、盛況のうちに終了致しました。

人事面と致しましては10月に高原政宏（H16）が津山中央病院へ赴任したのに伴い、榮浩行が後任として総合内科助教に採用されました。また一年間の病棟勤務を終えた岡寿紀（H24）は福山市民病院へ赴任、里見拓也（H24）は大学病院の医員として診療を行いながら臨床研究を開始し、入れ替わりに亀高大介（H24）、根岸慎（H25）が病棟医として帰局し、消化器内科の高みを目指すべく日々研鑽を積んでいます。さらに本年1月には山崎崇史（H19）が三朝地域医療支援寄付講座助教へ就任したのに伴い、岡山県南西部（笠岡）総合診療医学講座助教の後任として安部真（H20）が就任致しました。

また今年度は12名の新入局員を迎えることができました。これからも、消化器内科の発展のために医局員全員で精進し、同窓の皆様にご協力いただけるよう努力致しますので、引き続き御指導・御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。（川野 記）

## 血液・腫瘍・呼吸器内科学

岡山大学同窓の先生方におかれましては、平素から多大なご

支援をいただき御礼申し上げます。令和1年10月から令和2年3月における当教室の現況の報告をさせていただきます。

平成30年2月に岡山大学病院は中四国ブロックのがんゲノム医療中核病院に指定されましたが、今後ますます重要となるがんゲノム医療を推進するべく、ゲノム医療総合推進センターが新設されました。当教室助教の遠西大輔は、カナダバンクーバー大学でリンパ腫を中心としたゲノム解析プロジェクトに数年従事してきた経験を買われ、11月にゲノム医療総合推進センター准教授、臨床応用部長へ昇任となりました。今まで培った経験を生かして岡山大学のがんゲノム医療の推進が期待されます。

令和元年5月にはがん遺伝子パネル検査が保険承認され、当院でも検査運用の整備が整い、学内、学外の多数の検査結果につき毎週エキスパートパネルで議論が行われております。エキスパートパネルには遠西准教授に加え、当教室から腫瘍センター田端教授、久保寿夫助教、および血液・腫瘍内科西森久和助教など参画しています。臨床と研究の両面において岡山大学病院のがんゲノム医療の推進の一助となれるよう地道に取り組んでいきたいと考えております。

がんゲノム医療と並び、腫瘍免疫療法の実用化がここ数年で急速に進んでおります。骨髄移植は腫瘍免疫を利用した治療法の一つですが、当院は厚生労働省から中国地方の造血幹細胞移植推進拠点病院に指定され非常に多数の骨髄移植を行っております。最後の砦として他施設で難渋して当科へ転院、治療を受けられる患者さんも多いのが実情であり、BCRのみならずICUの先生方、メディカルスタッフのお力も借りながら、白血病をはじめとした難治性血液悪性疾患の根治を目指し診療を行っております。また岡大病院は、患者さんから採取したTリンパ球を改変、培養して治療薬として用いるchimeric antigen receptor (CAR)-engineered T cells (CAR-T) 細胞療法を実施できる全国でも数少ない施設に選定されております。このCAR-T細胞療法がおこなえる体制は、当教室員の藤井 伸治講師、藤井敬子助教が中心となり整備致しました。現在、難治性の急性白血病や悪性リンパ腫に対して治療実績を積み重ねていっており、地域の患者さんへ最先端の治療をより安全に提供できるように研鑽していく所存です。

当教室は新しい治療選択を創出すべく多数の臨床試験、治験への参加、また臨床中核拠点病院の一員として臨床研究を主導、運営しております。標準療法としての先端医療の提供にとどまらず、標準治療を変える新しい治療の創出に取り組んでいきたいと思っております。

教室の実務体制は、医局長 大橋圭明、副医局長 西森久和・頼冠名・久保寿夫、外来医長 西森久和、病棟医長 市原英基（西8）・浅田騰（西3BCR）、教育医長 谷口暁彦が担当しております。10月に池内一廣、11月に西達也が医員として帰局、1月に大学院生清家圭介がミシガン大学へ留学しました。引き続きご支援、ご指導の程どうぞお願い申し上げます。

（大橋 記）

## 腎・免疫・内分泌代謝内科学

和田淳教授は、教育・臨床・研究・学会活動を初め、広く精



力的に活動を行っております。

当科は、基礎研究、臨床研究問わず、幅広く研究活動を行っており、とくに和田教授が研究代表者である「尿中糖鎖プロファイリングによるIgA腎症の診断法の開発」は革新的医療シーズ実用化研究事業（AMED）としてIgA腎症の新たなバイオマーカーの開発に向けて進行しております。

教室員は国内外問わず大変活発に学会発表を行っております。内山奈津実先生が第49回日本腎臓学会西部学術大会優秀演題賞を、藤澤諭先生が第20回日本内分泌学会中国支部学術集会で若手研究奨励賞を、第30回日本リウマチ学会中国・四国支部学術集会で林啓悟先生が若手奨励賞を、今村竜太先生が研修医奨励賞を受賞しました。松本佳則助教が第37回日本骨代謝学会 The JSBMR Rising Stars Awardを受賞しました。

人事面では、令和元年11月に内田治仁先生がCKD・CVD地域連携包括医療学講座准教授から教授に昇任しました。令和元年9月より寺坂友博先生が留学先のカリフォルニア大学サンディエゴ校から帰国し医療安全管理部助教に着任しました。浅野澄恵先生が令和元年9月より倉敷スイートホテルに勤務し、中村嶺先生が令和元年10月より岡山赤十字病院に赴任しました。また令和元年9月に山村裕理子先生が英国グラスゴー大学に留学されました。

最後になりましたが、今後とも同門並びに同窓の諸先生方の御指導・御支援宜しくお願い申し上げます。（稲垣 記）

## 精神神経病態学

令和元年度・下半期における目玉行事として、山田了士教授を大会長として当教室が主管となり、第32回日本総合病院精神医学会総会を倉敷市芸文館および倉敷アイビースクエアにて開催いたしました。興味深いセッションがずらりと並び、大変充実したプログラムとなりました。中でも、大会長のアイデアで行ったマラソンレクチャー（8コマの教育的セミナー）は人気が高く、認知症、てんかん、自己免疫脳症から摂食障害、ゲーム依存に至るまで、総合病院精神医学における実践的で新しい知識を盛り込むことができたのではないかと考えています。また、本学会では初めてプレコンgress企画として、当教室の精神科リエゾンチームが中心となって発達障害対策と認知症対策の2つの研修会を企画・開催し、多職種の方々で大盛況となりました。

また、何よりもありがたかったのは、過去最高数の一般演題を頂戴したことです。ポスター討論は大変な賑わいとなり、熱い意見交換が繰り広げられました。おかげさまで、参加者数は1,070名余と、これも過去最高を記録いたしました。今回の総会が、総合病院精神科のプレゼンスを上げていく機会の一つになればと願うばかりです。

なお、学会懇親会は大原美術館で行いました。大原美術館の知名度は群を抜いており、事前登録制にしたものの1ヶ月前には満席となり、お越しいただけなかった方が多かったのは申し訳ないことでした。30分の絵画ツアー付きで、セザンヌやゴッガンに囲まれた懇親会というのはなかなか体験できないことではないでしょうか。

最後になりましたが、多くの暖かいご支援を差し伸べていただき、また熱い討論を繰り広げて下さった関係の皆様方に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。本当にありがとうございます。（井上 記）

引き続き、諸先生方にご指導いただきながら教室運営をすすめていきたいと考えております。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。（井上 記）

## 小児医科学

岡山大学大学院小児医科学教室と岡山大学病院小児科の現況を報告させていただきます。

当教室は中国四国の基幹としてこの地域の診療、教育、研究を支える責務を全うしています。小児診療では平成24年9月に設置された「小児医療センター」を基盤として最重症児への高度医療をさらに進めています。当センターは小児科、小児外科、小児神経科、小児循環器科、小児血液・腫瘍科、小児歯科、小児麻酔科、小児放射線科、小児心臓血管外科が中心になり、大学病院の多くの診療科との横の連携を進展させています。令和元年12月には10個目の中心診療科として「小児心身医療科」が岡田あゆみ准教授を科長として設置されました。小児医療チームは「周産母子センター」と密に連携しており、産科婦人科学の増山教授のご指導のもと、吉本順子、鷲尾洋介が中心になって重症のNICU患者の診療に当たっています。

このように、中国四国の各大学病院、総合病院、クリニックと綿密に連携しながら、岡山大学病院が子どもたちとご家族に安心安全の高度医療を提供させていただいている体制がさらに充実しました。

教育では学生だけでなく若手～中堅医師の内発的進化を促すことを第一義に全員が力を尽くしています。ここ4年間で、私たちの「小児科専攻研修プログラム」の選択者は中国四国地域で最多でした。昨年春には、岡田あゆみがベストクリニカルファカルティ賞（最優秀臨床教員賞）、そして、小児医科学教室がベストクラス賞（最優秀臨床教室賞）をそれぞれ受賞しました。このように、小児医科学教室に属するすべての医局員の優しくて熱い教育マインドとその実行力が外部からも評価されています。

研究では英語論文報告が継続して充実しています。一般小児科ではActa Paediatrica, The Science of the Total Environment, 循環器ではCardiology in the Young, 感染免疫ではJournal of Medical Virology, Allergology International, 血液腫瘍ではAnnals of Hematology, British Journal of Haematology, Rheumatology International, 成育新生児ではEarly Human Developmentなどで原著論文が発表されています。ここ数年間の総インパクトファクターは年間90～100を維持しています。他分野他領域の先生方のご多大なご支援があって、ここ数年間で医学博士を取得した小児科医師は20名を超えました。学会としては、昨年10月に塚原宏一が当番会長になって第36回中国四国小児腎臓病学会を岡山市で開催させていただきました。

岡山大学小児科同門会（友周会）としては、皆さまのご支援

によって、難波範行（平成4年卒）が鳥取大学小児科教授に、頼藤貴志（平成13年卒）が岡山大学疫学・衛生学教授に就任しました。また、頼藤先生は小児科学会学術賞と小児医学川野賞（社会医学）をダブル受賞しました。

現時点（2020年2月）の医局長は馬場健児、教育医長は吉本順子、病棟医長は八代将登、外来医長は近藤麻衣子、研究医長は嶋田明です。一方では、若手～中堅医師がそれぞれの立場で小児医科学教室、大学病院小児科を誠実に支え、継続的に発展させてくれています。（塚原 記）

## 発達神経病態学

小林勝弘教授以下、秋山倫之准教授（てんかんセンター副センター長、医局長併任）、岡牧郎講師（教育医長）、遠藤文香講師（外来医長）、花岡義行助教（病棟医長）、柴田敬助教（海外留学中）の体制で、教室運営を行っております。

医局人事に関しては、前回以降特に変わりはありません。診療については、小児医療センター、てんかんセンター、結節性硬化症ボードの所属診療科としての連携を継続しております。てんかんと発達障害を主体としつつも、その他の神経疾患の診療にも精力的に取り組んでおります。

学会活動では、小林教授が12月にアジア・オセアニア小児神経学会（開催地：クアラルンプール）で発表しました。日本てんかん学会（発表：小林、遠藤、花岡）、日本先天代謝異常学会（発表：兵頭）、日本臨床神経生理学学会（発表：小林、藤代）や地方会でも多数の発表を行いました。また、第98回岡山小児てんかん懇話会、第50回中国・四国点頭てんかん研究会を事務局として運営し、第45回岡山脳研究セミナーを担当教室として開始いたしました。

研究面では、てんかんや神経生理学、発達障害、代謝物質分析等に関する臨床研究を引き続き行っております。また、限局性皮質異形成II型による難治てんかんに対する医師主導治験も継続しております。

なお、今年6月には、小林教授を会長として「乳幼児けいれん研究会国際シンポジウム」を主催予定であり、現在準備に取り組んでいるところです。今後とも同門の諸先生方のご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。（秋山 記）

## 消化器外科学

令和1年9月～令和2年3月の教室だよりをお届けします。

10月6日には第85回岡山大学医学部第一外科教室開講記念会を開催し、特別講演Ⅰでは吉林大学第一医院 胃結腸外科教授 所劍先生に「中国（長春）における外科治療の現状」、特別講演Ⅱでは大阪大学大学院医学系研究科 小児成育外科学教授 奥山宏臣先生に「腸管機能不全に対する腸管リハビリテーションの現況と課題」とのご演題でご講演いただきました。

また11月28、29日の2日間、藤原教授を会長として第32回日本バイオセラピー学会学術集会総会を主催致しました。学術集会のテーマを「進化するバイオセラピー～がん克服の夢の途中～」とし、折田薫三岡山大学名誉教授が1992年に第5回JBRM

学会学術集会として開催されて以来27年振りの岡山での開催となりました。ご支援、ご協力いただいた同門諸兄の先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

令和2年1月19日には、岡山大学関連の消化器外科医が一堂に会する第8回消化器外科フォーラムが開催され、多くの先生方にご参加いただきました。皆様からいただきましたご支援・ご協力に厚く御礼申し上げます。

人事面では、母里淑子が埼玉医科大学総合医療センターへ異動しました。病棟勤務を終えた藤智和は岡山済生会総合病院、岡凌也は高梁中央病院へ、研究を終えた松三雄騎は関西医科大学へ、河本慧は神戸赤十字病院へ、梶岡裕紀は香川労災病院へ赴任、前田直見は低侵襲治療センター助教に着任しました。臨床研修を終えた宮本耕吉、山田元彦、杉本龍馬、河崎健人は消化管外科・肝胆膵外科にて病棟で日夜奮闘しています。庄司良平、赤井正明、畑七々子、八木千晶、藤本卓也は病棟勤務を終え、大学院生として研究生活に入りました。

診療では、手術支援ロボット ダ・ヴィンチを使った食道癌手術・胃癌手術を着実に進めております。研究・学会活動では、例年通り、国内外の各種学会・研究会において日頃の成果を多数発表しております。抗癌ウイルス製剤「テロメライン」の開発は、中外製薬主導で多施設共同治験が始まりました。

多忙な藤原俊義教授のもと、教室員一同団結し、臨床・研究・教育になお一層努力していく所存です。今後とも教室の運営にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、同門の先生方のご健勝とご繁栄をお祈り申し上げます。

（吉田 記）

## 呼吸器・乳腺内分泌外科学

平成22年より開始した3外科教室合同の岡山大学外科マネージメントセンター（MC）は順調に運営され現在まで223名が登録されました。当教室の研究活動は肺移植研究、がん遺伝子研究、乳腺研究各グループとも継続して盛んに行っており、岡大外科MCの中からこれまで17名が学位を取得、カナダ、スペイン、米国などへ6名が留学中です。また外科専門医プログラム開始3年目となり、今春より21名が岡大外科プログラムで修練を開始する予定で、外科専門医プログラムの中でも全国3位の規模となりました。

第二代津田誠次教授（1925年就任、本号表紙の説明文参照）の岡山市北区広瀬町の当時の自宅が改装され、昨年より一般利用できることとなり早速同門会会員有志が集まりました。特に津田教授の応接室は古い医学書が所狭しと書庫に収納されており、ご自宅でも医学と真摯に向き合い、追究された教授の姿が偲べれます。現在、臨床研究棟9階の医局を改装しており、収納スペースができましたら、教室に関連の深い書物を保管する予定です。

また教育面では2018年より臨床教授を対象とした“外科医学教育ワークショップセミナー”を毎年開催し、外科医育成とともに引き続き指導者養成も行っております。

人事面では長年肺移植医療を牽引してきた臓器移植医療センターの大藤剛宏教授が退職し、呼吸器外科の杉本誠一郎講師が

同センター准教授に就任、富岡泰章医員が同センター特任助教に就任しました。また、医療教育センター、救急科で卒前教育を担当してきた万代康弘講師が東京慈恵会医科大学救急医学講座講師として出向しました。

豊岡教授の体制より教室の【理念】として“外科医学の革新的創生による医療の発展”、その【心構え】として“真摯”、“利他”、“向上”を掲げ、さらに【教室のあり方】として、“人が集い、互いが高めあい、努力が報われる教室”としております。この【理念】【心構え】【教室のあり方】を教室員一同忘れることなく日々研鑽を続けております。(山根 記)

## 整形外科学

令和元年8月から令和2年3月までの教室だよりをお届けします。

教室の大きな行事としまして、令和元年8月24日に岡山大学整形外科桃整会夏季セミナーを開催し、名越充医師、迫間巧将医師、齋藤太一医師、島村による4題の教育研修講演と鹿児島大学大学院整形外科学の谷口昇教授と北海道大学大学院整形外科学教室の岩崎倫政教授による特別講演があり、若手医師の多数の参加がありました。

10月13日には岡山県医師会館三木記念ホールにて「骨と関節の日」のイベントが行われ、尾崎敏文教授による「ロコモティブシンドロームについて」、岡山市立市民病院の木浪陽医師による「大腿骨近位部骨折とロコモティブシンドローム」、関西福祉大学教育学部の吉岡哲准教授による「指導ロコモテスト、体操などの実技」の講演があり、幅広い年齢層の市民の方の参加がありました。

また、令和元年12月14日に岡山大学整形外科桃整会総会、桃整会学術講演会岡山運動器フォーラムならびに忘年会を開催しました。神戸赤十字病院の伊藤康夫部長の「脊椎・骨盤外傷に対する急性期治療戦略」及び和歌山県立医科大学整形外科学講座の山田宏教授による「疫学実態から学ぶ脊椎診療のエビデンス-The Wakayama Spine Study-」の特別講演があり、盛大な会となりました。

人事面では令和元年10月から専門研修プログラムで浪花崇一、田村公一、松田昌樹、植田昌敬が研修しております。令和2年3月には大学院生の辻寛謙はAOフェローでインドに留学する予定でしたが、新型コロナウイルスの関係で延期になりました。

学術面では令和2年3月に清野正善、岡崎良紀、三喜知明、岡崎勇樹が学位を取得しました。

最後になりましたが、同門の諸先生方の益々のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。(島村 記)

## 皮膚科学

2019年9月～2020年2月についてご報告いたします。

学術面では、2019年9月7-8日高知で行われた第71回日本皮膚科学会西部支部学術大会にて森実、内藤、野村、妹尾、山崎(悠)が発表しました。

2019年9月15日行われた第278回日本皮膚科学会岡山地方会では中川、森田、妹尾、廣瀬が発表しました。

2019年9月26-28日ギリシャアテネで行われたEORTC-CLTF 2019 Meeting on cutaneous lymphoma: Insights in research and patient careにて中川、立花が発表しました。

2019年9月28-29日宇都宮で行われた第34回日本皮膚外科学会総会・学術集会にて池田が発表しました。

2019年9月29日熊本で開催された日本皮膚科学会第227回熊本地方会にて『メラノーマセンターでの診療と教育』の題目で山崎が講演しました。

2019年10月5-6日金沢で開催された第70回日本皮膚科学会中部支部学術大会にて小橋、伊藤が発表しました。

2019年10月19日岡山市で開催された第15回中国研究皮膚科セミナーにて浦上が発表しました。

2019年11月1日PsA Forum in 岡山にて『PsA診療の今とこれから』の題目で森実が講演しました。

2019年11月8日第5回褥瘡セミナーにて『褥瘡の外科的治療』の題目で加持が講演しました。

2019年11月8-10日青森で開催されたThe 44th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatology (第44回日本研究皮膚科学会総会)にて森実、平井、中川が発表しました。

2019年11月8日東京で開催された第4回Academic Dermatology Conferenceにて『抗菌ペプチドと皮膚疾患』の題目で森実が講演しました。

2019年11月16-17日東京で開催された第83回日本皮膚科学会東京・頭部支部合同学術大会にて『痒みの発生メカニズム～表皮角化細胞が産生する痒み因子～』の題目で森実が講演しました。

2019年11月23日岡山で開催された皮膚の日市民公開講座みんなで学ぶ皮膚の病気にて『アトピー性皮膚炎の治療を正しく知ろう2019～日ごろのお手入れから最先端の治療法まで～』の題目で森実が講演しました。

2019年11月23日岡山で開催された第47回岡山膠原病研究会にて『エンドキサンパルス療法が奏功した間接リウマチ患者の難治性皮膚潰瘍の2例』の演題で横山が発表しました。

2019年11月29-30日横山で開催された第49回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会にて伊藤、藤田が発表しました。

2019年12月3日岡山で開催された岡山県医師会皮膚科部会講演会「岡山県水疱症研究会」にて妹尾が発表しました。

2020年1月11日横浜で開催された第7回春景会学術講演会にて『当科におけるアトピー性皮膚炎診療・研究2020』の題目で森実が講演しました。

2020年1月18日岡山で開催された第279回日本皮膚科学会岡山地方会にて池田、藤田、浦上、渡部、古谷が発表しました。

2020年1月31日東京で開催された第2回基礎・臨床皮膚科学研究会にて平井、三宅が発表しました。

2020年2月8日岡山で開催された炎症性皮膚疾患を考える会にて『生物学的製剤のベストユース・タイミングを考える(症例提示)』の演題で杉原が発表しました。

2020年2月19日岡山で開催された皮膚科開業医も出くわす皮



膚疾患の最新トピックスで横山、三宅が発表しました。

人事面では2020年1月に岡山医療センター 小原が産休に入りました。令和2年4月から新入局員7名を予定しており、引き続き同門の先生方のご助力を賜れますよう何卒宜しくお願い致します。

末筆ながら、皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。  
(平井 記)

## 泌尿器病態学

令和元年9月から令和2年3月までの教室だよりをお送りいたします。

那須教授は岡山大学理事(研究担当)・副学長、渡邊准教授が泌尿器科診療科長、小林が医局長を務めています。

人事面では、令和2年度は8名の新入局を予定しておりますが、開業、退職者もあり、相変わらず関連病院では人手不足が続いております。引き続き医局員や同門一同、教育や診療を通じて学生さんや研修医と密にコンタクトを取り、ひとりでも多く泌尿器科に興味を持って頂けるよう頑張りたいと思っております。

診療面では、外来医長を佐古助教、病棟医長を枝村助教が務めております。外来では、逆紹介率および初診率の上昇を進めております。同窓の先生方におかれましては、日々ご協力を賜り誠にありがとうございます。昨年度から保険適応となったロボット支援膀胱全摘は、入院期間が大幅に短縮しただけでなく、高齢者でも施行可能であり、急激に件数が増加しております。ロボット支援前立腺全摘、腎部分切除も中四国でも1、2位を争う症例数となっております。令和2年4月より新たに保険収載される予定のロボット補助下腹腔鏡下腎盂形成術、仙骨腫固定術もすぐに開始できるように準備をすすめております。2009年に立ち上げた腎移植は、荒木講師を中心に、10年で100例を超え、1年生着率も100%を保っております。さらに、難治性過活動膀胱に対する仙骨神経刺激療法を導入しより広い領域をカバーしております。基礎研究では渡部新医療研究開発センター教授と定平助教を中心として、がん抑制遺伝子や再生医療、新規医療の研究開発およびその橋渡し研究を進めています。

教育面では学生や大学院生、研修医の教育に力を入れており、令和元年度も複数名の大学院生が卒業する見通しです。

関連病院の先生方におかれましては、今後とも益々のご指導ご鞭撻の程、宜しく願い致します。末筆ながら、同窓の先生方のご健康とご活躍をお祈り致します。  
(小林 記)

## 眼 科 学

主な学会等の発表や研究会の開催については、2019年8月31日(土)に、第100回岡山大学眼科研究会『白内障手術併用における低侵襲手術』が、ホテルグランヴィア岡山にて開催されました。慶應義塾大学 助教 芝 大介先生、杏林大学 臨床教授 井上 真先生、宮田眼科病院 院長 宮田 和典先生にご講演いただきました。2019年10月24日(木)～27日(日)にかけて、第73回日本臨床眼科学会が、国立京都国際会館、グ

ランドプリンスホテル京都にて開催されました。当院からは、松尾、森實、濱崎、土居、柴田、清水、河野が発表しました。2019年12月6日(金)～8日(日)にかけて、第58回日本網膜硝子体学会総会が、長崎ブリックホール、長崎新聞文化ホール・アストピアにて開催されました。当院からは、塩出、高橋、土居、的場、神崎勇希、神崎紗弓、野田が発表しました。2020年1月18日(土)に、第101回岡山大学眼科研究会『レジェンドが語る眼科』が、ホテルグランヴィア岡山にて開催されました。岐阜大学大学院医学系研究科眼科学分野 教授 山本 哲也先生、京都府立医科大学 感覚器未来医療学 教授 木下 茂先生、九州大学 理事・副学長 石橋 達朗先生にご講演いただきました。学会や研究会を通じて臨床や研究に関わる有益な情報や新知見が得られたかと存じます。

最後になりましたが、患者様をご紹介くださる先生方、関連病院や診療所の先生方にこの場を借りてお礼を申し上げます。引き続きご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。  
(濱崎 記)

## 耳鼻咽喉・頭頸部外科学

耳鼻咽喉科教室現況をお知らせいたします。学会関係では日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会、日本口腔・咽頭科学会、日本鼻科学会、日本耳科学会、日本めまい平衡学会、癌治療学会、日本人類遺伝学会、日本聴覚医学会、日本頭頸部外科学会、日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会などで医局員が多数の演題を発表いたしました。また2020年5月13日～16日、日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会を岡山にて予定しております。有意義な学術講演会となるように教室員一丸となって鋭意準備を進めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

人事関係では9月末に假谷彰文が岡山赤十字病院へ、10月より藤澤が帰局しました。また3月には小山が福山市民病院、藤本が国立がん研究センター東病院、赤松が国際医療福祉大学へそれぞれ異動し、西崎教授が退職されました。

臨床面では頭頸部がんセンターを中心に頭頸部腫瘍診療を積極的に実施しており、耳科手術(含人工内耳)、内視鏡下鼻手術も引き続き実績を伸ばしております。今後とも同門の諸先生がたのご支援をよろしくお願い申し上げます。  
(片岡 記)

## 放射線医学・放射線部

放射線医学教室の近況をご報告致します。いよいよ金澤教授の最終年度となりました。2021年3月13日(土曜日)に退官記念祝賀会を予定しております。

10月から4月にかけてミャンマーから医師2名、診療放射線技師1名が留学され、教室員も様々な刺激を受けました。

人事では、10月には画像診断グループリーダーの新家崇義先生が川崎医科大学総合医療センター 放射線科(総合放射線医学)の准教授に着任されました。また、片山敬久先生の異動に伴い、4月より小児放射線科科長は片山先生から松井裕輔先生となりました。

4月に西垣貴美子先生、衣笠里菜先生、山田実典先生の3名の  
新入医局員を迎えました。西垣先生は岡山大学病院、衣笠先生は岡山医療センター、山田先生は福山市民病院にて放射線科  
専門医を目指し後期研修を開始しています。

4月の人事異動として、岡山大学病院から片山先生が香川県  
立中央病院、福原隆一郎先生、渡邊菜津子先生が倉敷成人病セ  
ンター、岡本聡一郎先生、大槻花穂先生が岡山赤十字病院、左  
村和磨先生が永生病院、大野 凌先生が岡山労災病院、福岡省  
吾先生が福山市民病院、長尾良太先生が福山医療センターに赴  
任されました。また、香川県立中央病院から吉尾浩太郎先生、  
福山市民病院から馬越紀行先生、津山中央病院から杉山聡一先  
生、永生病院から北山貴裕先生、岡山赤十字病院から松田恵治  
先生、倉敷成人病センターから丸山拓夢先生、岡山医療センター  
から永田まりあ先生、岡山労災病院から鎌村真帆先生が岡山大  
学病院に異動しました。医局役員に関しては、医局長が生口俊  
浩から松井裕輔先生、副医局長は松井裕輔先生から富田晃司先  
生、教育医長は正岡佳久先生から児島克英先生に変わっており  
ます。大学外での異動は、清水光春先生が岡山医療センターか  
ら倉敷平成病院へ、三船啓文先生が尾道市立市民病院から金田  
病院へ、土橋一代先生が福山医療センターから尾道市立市民病  
院へ、岸亮太郎先生が三豊総合病院から岡山医療センターへ赴  
任しています。各先生方が、新天地ですばらしい御活躍をされ  
ていることと思います。(生口 記)

## 産科・婦人科学

増山 寿教授をはじめ教室員一同、臨床、研究、教育へと日々  
励んでおります。昨秋からも日本産科婦人科内視鏡学会、中国  
四国産科婦人科学会、日本女性医学学会などの学会・研究会で、  
教室から多数の演題を発表いたしました。ひき続き「チーム岡  
大」として、同門が一丸となって中国四国地方の産婦人科医療  
の充実を務めて参ります。

続いて人事の御報告ですが、10月には広島市立広島市民病院  
の中西美恵が香川県立中央病院の主任部長に。岩国医療セン  
ターの岡崎倫子が津山中央病院、津山中央病院の佐藤麻子と  
姫路聖マリア病院の柏原麻子が岡山赤十字病院、岡山赤十字病  
院の渋谷昇平が松江赤十字病院に異動、楠元理恵が帰局。岡山  
大学の玉田祥子助教が広島市立広島市民病院、岡田真紀が福山  
医療センター、西條昌之が姫路赤十字病院、杉井裕和が岩国医  
療センター、矢野肇子が愛媛県立中央病院に異動。育休中の谷  
川真奈美が姫路聖マリア病院に復職。そして山口大学出身の阿  
武恵子(平6卒)が中途入局しました。また後期研修1年目の  
上田菜月が岡山赤十字病院、大羽 輝が中国中央病院、岡本遼  
太が福山医療センター、兼森雅敏が広島市立広島市民病院、假  
谷奈生子が岡山済生会総合病院、川西貴之が三豊総合病院、白  
河伸介が姫路赤十字病院に異動。後期研修2年目の有澤理美が  
福山医療センター、入江恭平が姫路聖マリア病院、片山沙希が  
津山中央病院、三苫智裕が香川県立中央病院に異動。後期研修  
3年目の秋定 幸が愛媛県立中央病院に異動。岡山済生会総合  
病院の角南華子、津山中央病院の谷村史香が帰局し、研修の仕  
上げに入りました。1月には広島市立広島市民病院の依田尚之、

留学随伴中の春間朋子が帰局いたしました。なお教室内役職は  
これまで通り、医局長 鎌田泰彦、婦人科病棟医長 中村圭一郎、  
周産母子センター産科部門長 早田 桂、外来医長 小川千加子、  
教育医長 衛藤英理子の体制となっております。

年間出生数が86万4千人と減少した以上に、近年の産婦人科  
医減少は危機的です。関連病院の置かれた地域ごとに事情は異  
なってきますが、岡山市内でも各病院の「機能分担」、「分娩施  
設の集約化」は喫緊の課題です。

今後とも同窓の先生方の御指導ならびに御支援の程よろしく  
お願い申し上げます。(鎌田 記)

## 麻酔・蘇生学・集中治療部・周術期管理センター

令和初めてのお正月もあつと言う間に過ぎ、寒さが本格的に  
なってきた今日この頃ですが、同門の先生方におかれましては、  
ますますご健勝のことと存じます。昨年末からの教室行事、人  
事異動に関しましてご報告申し上げます。

8月24、25日に、恒例の直島での麻酔・集中治療セミナーが  
開催されました。今年は松岡義和先生を責任者とし、全国から  
参加して下さった51名の若手医師に対して、スタッフ総出で、  
講演・ハンズオンなどの運営を行いました。特別講演の演者と  
して、和歌山県立医科大学麻酔科学教室の川股知之先生、大阪  
市立大学大学院医学研究科医療統計学教室の新谷歩先生をお招  
きし、貴重な体験に基づいたご講演を頂きました。ワインパー  
ティーでは毎年好評のクイズ大会が行われ、他施設からの参加  
者とスタッフが一緒になって課題に取り組み、親睦を深めるこ  
とが出来ました。その後も夜遅くまで、将来の医師像、岡大で  
研修した場合のキャリアパスなどについて多くの若き医師たち  
が語り合いました。この2日間は我々スタッフにとっても、有  
意義な時間であったと感じております。今年も8月末に開催す  
る予定ですので、関連病院で研修中の麻酔科に興味のある先生  
方へのお声掛けの程、よろしくお願い申し上げます。

10月からは来年度の麻酔専攻医プログラムの募集が開始され  
ました。岡山県にも首都圏と同様に、登録できる専攻医の数に  
制限が設けられ、非常に厳しい状況でしたが、何とか9名が岡  
山大学のプログラムに登録してくれました。4月からはその内  
の8名が岡山大学病院の麻酔科レジデントとして、新しい環境  
で麻酔科専門研修を開始します。彼らが早く一人前の麻酔科専  
門医として、同門の先生方と一緒に仕事出来るよう、スタッ  
フ一同、精一杯教育に取り組む所存です。

昨年10月から、自治医科大学の芝順太郎先生が、主に肝移植  
の周術期管理を学ぶために、半年の予定で当科に研修に来られ  
ています。期間中には、生体肝移植だけでなく、脳死の移植も  
数例経験され、充実した研修になったことと思います。戻られ  
てからのさらなるご活躍を祈念いたします。11月からは、広島  
市民病院の伊加真士先生が姫路聖マリア病院に、岡大レジデ  
ントの根ヶ山諒先生が広島市民病院に赴任されました。今年も  
おめでたい事に、9月から坂本里沙先生、12月には田所瑠美先生、  
2月には西公香先生がご出産のためのお休みに入られました。  
皆様無事にご出産されたとの報告を頂いております。この場を  
お借りして心よりお慶び申し上げます。



松三昌樹先生が同門会長に就任されて初めての同門会が、5月23日にプラザホテルで開催される予定です。これまで参加者が少なかった同門会を改革し、有意義な会にすべく企画を行っております。入局年度毎に代表者を選出し、同門会誌への投稿、同期会の開催、同門会総会への出席などで教室との連携役をお願いできればと考えております。ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、2017年10月より賀来が務めて参りました医局長ですが、2020年4月から清水一好先生と交代いたします。関連病院部長先生方をはじめ、同門の皆様には人事の件などで、ご迷惑をおかけした事も多々あったかと存じます。何卒ご容赦ください。新しい医局長となりますが、同門の諸先輩方におかれましては当教室の運営に関しまして、引き続きご指導ご鞭撻頂けますよう重ねてお願い申し上げます。(賀来 記)

## 脳神経外科学

本年は伊達勲教授主催による日本脳神経外科学会 第79回学術総会が10月15日(木)から17日(土)の日程で岡山の地で開催されます。西本詮名誉教授(第31回)、大本堯史名誉教授(第60回)に続いて当科の主催は3回目となり大変名誉なことです。有意義な学会にすべく教室員一丸となって準備を進めております。同窓の先生方におかれましてはご協力のほどどうぞよろしくお願い致します。

慶事と致しまして令和元年11月3日に大本堯史名誉教授が瑞宝中綬章を受章されました。西本詮名誉教授に続く叙勲となり大変喜ばしい限りです。人事関連では、まず新入局者ですが、池町涼介先生(岡山赤十字病院勤務)、齊藤信幸先生(三豊総合病院勤務)、外間まどか先生(岡山大学病院勤務)、濱内祝嗣先生(川崎医科大学総合医療センター勤務)、西垣翔平先生(福山市民病院勤務)、大前凌先生(武田総合病院勤務)、家護谷泰仁先生(広島市民病院勤務)が入局されました。異動・昇任につきましては令和元年8月から令和2年1月の間について記します。令和元年10月1日には田宮隆教授(香川大学医学部脳神経外科)が香川大学医学部附属病院院長に就任され、小川智之先生が住友別子病院から津山中央病院勤務、服部靖彦先生が大学研究室から住友別子病院勤務、高橋悠先生が大学研究室から岡山大学病院勤務、馬越通有先生が大学研究室から岡山大学病院勤務、金一徹先生が大学研究室から福山市民病院勤務、桑原研先生が大学研究室から呉共済病院勤務、木谷尚哉先生が大学研究室から広島市民病院勤務となりました。令和元年11月には春間純先生がフランス ロスチャイルド財団病院から帰国後、岡山大学病院勤務となりました。令和元年12月には富田祐介先生が米国イリノイ州 ノースウエスタン大学に留学されました。

教室の役職は、医局長は菱川朋人が、外来医長は亀田雅博が、病棟医長は藤井謙太郎が、教育医長・教育企画委員は佐々木達也が務めております。

以上、簡単ですが、教室の近況を報告致しました。

末筆となりましたが、同窓の諸先生方の益々の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。(菱川 記)

## 総合内科学

大塚文男教授は、令和2年も引き続き「全人的医療のできる総合内科医の育成と大学院教育の両立」に取り組み、総務・企画運営担当の副病院長として、本院全体の運営に尽力しています。

教室の動きです。臨床面では、長谷川功病棟医長・小比賀美香子外来医長を中心に、各診療科や地域医療機関と連携を取りながら診療を進めています。病棟では、多臓器にわたる疾患症例、複数の問題を有する難治疾患症例など、多種多様な症例の診療を行っています。外来は、2020年1月に1階総合受付前に移転し、拡充されました。徳増一樹助教を中心とした「不明熱外来」は開設後半年間で約50名の患者様を中四国地方の医療機関よりご紹介いただきました。植田圭吾准教授を中心とした「漢方臨床教育センター」の活動も順調です。今後も地域医療現場の先生方・患者さまのニーズに応えるべく、大学病院総合内科の特徴と強みを活かした外来診療を発信して参ります。

教育面です。教育医長の谷山真規子講師のもと、卒前教育については教育企画委員の堀口繁助教を中心に、卒後教育については卒研コーディネーターの徳増一樹助教および岡浩介助教を中心に指導を行っています。学生や研修医対象に、教育熱心な若手医師が教育回診やレクチャーを行い、また藤井病院 太田茂非常勤講師による月1回のベッドサイドティーチング、かとう並木通りクリニック 光田栄子医師による専攻医指導も大変好評です。小比賀美香子講師を中心とした「哲学カフェ」、徳増一樹助教を中心とした「総合内科セミナー」も好評で、引き続き定期開催する予定です。また、2020年1月に当科の大学院生、大塚勇輝医師(初期研修医)が岡山大学病院長賞(権の木賞)を受賞しました。

研究面です。リサーチ・カンファレンス、ケースレポート・カンファレンスは引き続き定期開催し、大学院生の学位論文取得・英語論文執筆を目標に若手を中心に積極的に活動しています。学会活動としては、2019年10月の第121回内科学会中国地方会(岡山)、第6回日本糖尿病医療学会(京都)、第46回日本神経内分泌学会学術総会(東京)、11月の第27回日本ステロイドホルモン学会総会(浜松)、第29回臨床内分泌代謝Update(高知)、12月の第57回日本糖尿病学会中国四国地方会(徳島)などの国内医学会で多数の演題を発表しました。また海外でも2020年1月の第48回Myanmar Health Research Congress(ヤンゴン)では萩谷が薬剤耐性菌におけるゲノム解析の有用性について発表しました。2019年9月には岩田菜穂子さん、12月には長谷川功医師・本多寛之医師が医学博士を取得しました。

人事面です。2020年1月より片岡仁美教授が地域医療人材育成講座よりダイバーシティ推進センターに異動となりました。その他、2019年9月末で高原宏政助教が津山中央病院消化器内科に赴任し、2019年10月より消化器内科から新たに榮浩行医師が助教として着任いたしました。同時期に安田美帆助教が岡山済生会病院に赴任し、中野靖浩医師が医員より助教に昇任しました。2019年11月には瀬戸内(まるがめ)寄付講座の助教は山本晃医師から厚生労働省大臣官房国際課に外向していた西村義人医師に交代しました。西村助教は2019年10月に岡山で開催さ



れたG20保健大臣会合で岡山大学を代表して活躍し、海外からの多くの要人が来場された岡山大学病院でのエクスカージョンも盛会でした。2019年12月末をもって岡山県南西部（笠岡）寄付講座の山崎泰史助教が三朝医療センター赴任となり、2020年1月より消化器内科から安部真医師が同講座助教として着任いたしました。

引き続き、各診療科および地域の先生方にご協力頂きながら、地域・社会に貢献できる内科医・総合診療医育成を目指してまいります。今後とも、御指導・御鞭撻の程よろしく願いいたします。（萩谷 記）

## 循環器内科学

伊藤浩教授は臨床・教育・研究および学会活動を精力的に行っており、相変わらず多忙な毎日を過ごしております。

人事ですが、令和1年9月から江尻健太郎が岡山ろうさい病院へ、令和1年10月から森本芳正が津山中央病院へ赴任致しました。新天地での活躍を期待しております。また令和2年1月から三好章仁が三朝地域での医療支援を終え、岡山大学病院で助教として勤務しております。

学会・研究活動ですが、国際学会ではアメリカ心臓病協会や欧州心臓病学会で、関連病院含め多数の演題を発表しました。また日本の学会でも多くの演題発表をしております。第115回日本循環器学会中国地方会で浅田早央莉がYIA最優秀賞を受賞しました。第5回心臓リハビリテーション学会中国支部地方会で中山理絵が最優秀演題賞を受賞しました。

最後に教室の実務ですが、医局長に吉田賢司、新病棟医長に赤木達、外来医長に三好亨、教育医長に戸田洋伸の体制で執り行っております。今後も、臨床・研究・教育に励み、やりがいのある楽しい医局を目指したいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。（吉田 記）

## 心臓血管外科学

2019年8月から2020年3月の教室の動きをご報告いたします。

2017年8月に笠原真悟医師が第3代教授に就任しもうすぐ3年になろうとしています。当科の特色である小児心臓手術は引き続き精力的に診療を行っており、県内はもとより中四国、全国からの紹介を受け入れています。人事面では、川畑拓也医師が2019年7月に帰局致しました。川畑医師は広島市民病院で小児心臓手術の中心的役割を果たしていた背景があり、帰局後も小児心臓手術業務の一端を担っています。現在、小児部門は、笠原真悟教授をはじめとして、川畑拓也医師、黒子洋介医師、小谷恭弘の4名のスタッフで診療を行っております。成人心臓手術領域における今年度の目玉はTAVI（経皮的動脈弁置換術）の実施でありました。循環器内科のご協力も得て、2019年11月に第1例目を施行し、その後も順調に症例数を蓄積しております。今後も大学病院として、先進医療の増加を測りたいと考えています。成人心臓手術領域では、末澤孝徳医師、廣田真規医師の診療により今後ますますの症例数の増加が見込まれていま

す。血管部門は大澤晋医師が中心となり診療を行っております。臨床面では、今後も地域の中隔として診療を行っている小児先天性心疾患の治療を軸に、成人先天性心疾患に対する外科治療、成人後天性心疾患、血管疾患の多岐にわたる診療を行いたいと考えています。

研究面では、以前より行われてきた心臓移植をはじめ、単心室循環に対する補助循環・再生医療、医用工学を用いた新しい人工血管の開発など、10件の科研費を獲得し、5人の大学院生が積極的に活動をしています。他大学からの研究生も受け入れ、大学の垣根をこえた研究協力にも力を注いでいます。

教室としての国際貢献としてはJICA草の根パートナー型技術交流のプロジェクト最終年（5年目）を迎えました。プロジェクトマネージャーの小谷恭弘が中心となり、ベトナムからの研修の受け入れ、現地での指導を定期的に行いながら、ベトナムでの自立的な高度医療の確立に向けた支援に取り組んでいます。プロジェクトのさらなる発展を目指し、1年間の延長を行い、2020年12月まで活動を行う予定となりました。また、アジアを中心に短期見学者を受け入れて、国際協力を続けています。

今後も教室の広範囲での活動に御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。（小谷 記）

## 脳神経内科学

阿部康二教授は、世界へ発信しかつ世界をリードできるような、教育・臨床・研究の各分野でのさらなる発展を目指して教室員の指導を行い、国内・国際的学術活動において活躍しています。特に2016年11月に理事長に就任した日本脳循環代謝学会において、学会をさらに発展させるための精力的な活動を継続しています。また、複数の厚労省班会議の班員としての活動や山陽神経難病ネットワークや山陽脳卒中協議会などの社会的活動においても中心的役割を果たしています。また特筆すべきこととして2020年1月24-25日に岡山コンベンションセンターにて第43回日本脳神経CI学会を開催させて頂きました。この学会は神経疾患の診断および治療における画像検査の重要性を早くから認識し、脳神経外科、脳神経内科、放射線科や開発技術に携わる様々な分野の研究者が一堂に会して幅広く議論することを目的に設立された学会です。今回は特別講演3つ、シンポジウム8つ、教育講演9つ、口演66演題、ポスター47演題、合計163演題と多数の演題が発表されました。活発な意見交換や議論を通じてお互いの連携を深めることができ、盛況の内に終えることができました。

人事面に関しては、9月より倉敷平成病院から野村恵美が帰局ならびに病棟業務に復帰し難しい症例にも対応しています。またエジプトからMarwa Atallahさんが研究チームに加わり研究を開始しました。転出者としては、9月より角田慶一郎が倉敷平成病院へ、本年1月から小坂田陽介が大西脳神経外科病院に異動しました。また交換留学生として研究チームに加わり脳梗塞モデルの解析を行っていた下宇婷さんが英語論文を書き上げて中国ハルビンに帰国しました。今後の更なる活躍が期待されます。

臨床面では一般外来および専門外来（認知症、脳卒中、パー

キンソン、ALS、SCD/MSA、神経免疫疾患、ボトックス治療)のさらなる充実化を目指し、脳神経内科独自の外来検査を導入し、待ち時間の短縮と効率的な外来診療を目指して努力をしています。特に、患者数増加が著しい認知症については、認知機能などを簡易に評価可能な視線計測装置を導入するなど、基礎研究と並行して新たな診断法・治療法開発を精力的に推進しています。また、多くの神経難病ALS患者に対してedaravone療法を積極的に行っています。このように多様な専門外来の評判を聞いて岡山県外からも多くの患者さんが受診しています。今後もALSや脊髄小脳変性症、脳梗塞の病態解明や新規治療開発へ向けて更なる臨床研究を継続して行っていく予定です。

研究面では、脳卒中・アルツハイマー病などの認知症・ALSなどの神経変性疾患の分野において新規治療の開発を目指し、様々な観点から研究活動を継続しています。特に岡山大学神経内科と京都大学の共同研究で原因遺伝子を同定した、小脳失調症と運動ニューロン疾患の臨床的特徴を併せ持つ新たな遺伝性神経変性疾患Asidan (SCA36) の病態解明・治療法開発を目指した基礎研究やiPS細胞/iN細胞などの新たな手法を用いた再生医療分野の研究、認知症モデルマウスを用いた基礎研究など、様々な研究が進行中です。2020年5月には日本神経学会学術大会を岡山で開催予定であり、今後とも宜しくお願ひいたします。(山下 記)

## 救命救急・災害医学

救命救急・災害医学講座は平成30年4月に救急医学から講座名を変更し、中尾篤典教授のもと岡山県内だけでなく中四国救急医療の最後の砦として、多発外傷、広範囲熱傷、心肺停止、重症小児、敗血症など最重症救急患者の診療にあたっています。また平成30年7月豪雨災害の経験から、私共の教室ではこの災害の教訓を生かし、災害医療の発展に貢献すべく研鑽を続けております。

研究では、日本救急医学会や集中治療医学会などの主要学会や国際学会での発表を行うだけでなく、今年度は日本中毒学会中国・四国地方会、岡山救急医療研究会の開催にも携わりました。また多くの英文雑誌に論文を投稿することもできており診療のみならず学術面にも注力しております。基礎研究も本格的に稼働し始め、今年度は研究室に中国から1名の留学生を受け入れ、さらに来年度以降も大学院生や留学生も増え、さらなる成果を上げるべく邁進していきます。

学生教育では教室内でブラッシュアップを行うことで、近年は常に高い評価を頂いております。小児から成人まで救急医療のみならず、終末期医療、ACP(アドバンス・ケア・プランニング)などについて関心を持ち、各自考えてもらえるような内容となっております。また災害の講義や救急車同乗実習、シミュレーターを用いた救急対応トレーニング、BLSの指導など、講義や見学だけでなく、自ら考え行動できるような形での実習を組み込む工夫をしております。

より良い救急医療は院内のみならず、地域の医療機関との連携が不可欠であり、皆様方の御協力無しでは成り立ちません。急な診療依頼、転科や転院の依頼など御迷惑をお掛けすること

も多々あるかと存じますが、引き続き御指導、御鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。さらには地域への貢献、また国際的にも評価される研究成果を発信できるよう努力していく所存です。(藤崎 記)

## 形成再建外科学

2020年1月末までの当科の近況についてご報告いたします。人事につきましてはこの半年間で変更はございませんでしたが、ミャンマーよりWint Wah Phu先生がマイクロサージャリーおよび再建手術の勉強にこられております。2019年8月からの半年の間、非常に熱心に取り組み充実した留学となったようです。また毎年行っているミャンマーミッションですが、今年度は2月初旬に予定しております。今回は頭頸部外科領域の症例を中心に手術を行う予定ですが、当科で研修を行った現地医師も多数おり、また共に仕事ができるのが楽しみであります。また2018年からの性別適合手術の保険適応を受けてジェンダーセンターもより注目度を高めております。当センターではいまでも多数の見学者を受け入れてきましたが、昨年12月には亀田総合病院 泌尿器科から土岐紗理先生が3週間の短期留学に來られ幅広くジェンダー医療を学ばれました。その他にも頭頸部がんセンター、乳がん治療・再建センター、小児頭蓋顔面形成センターなどの各連携部門においてもこれまで通り多くの症例の診療に従事することができ、他にもリンパ浮腫や四肢外傷、悪性軟部腫瘍の再建など専門性の高い分野での診療を続けて参りました。臨床のみならず、国際マイクロサージャリー学会、国際クラニオフェイシャル学会を始め国内外問わず学会活動も活発に行っております。また来年以降、当科主幹で日本リンパ学会総会や日本形成外科学会基礎学術集会などの開催が予定されており、実りある開催となるよう誠意準備を進めているところであります。研究においてはリンパ浮腫に関する検査法の治験をはじめとして臨床研究を中心に多数行っております。今後も形成外科の発展、地域医療への貢献、また新しいものを世界へ発信できるように精進して参りますので、同窓の先生方におかれましても、引き続き変わらぬご指導・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。(太田 記)

## 臨床遺伝子医療学

腫瘍制御学講座 臨床遺伝子医療学分野の2019年度下半期の活動報告をさせていただきます。

診療面では、2019年6月にがん遺伝子パネル検査が保険収載されたことを受け、臨床遺伝子診療科がんゲノム医療外来として、ゲノム医療総合推進センターはじめ多くの診療科、部門の皆様と協働し、診療体制やフローの整備に取り組んでまいりました。2019年11月に当院で初めて保険診療でがん遺伝子パネル検査を実施して以降、月数十例のペースで出検し、着実に実績を積んでいます。がんゲノム医療中核拠点病院として、連携病院等との連携強化やエキスパートパネルの体制整備にも、日々尽力しております。

また、コンパニオン診断薬やがんゲノム医療の実地臨床導入



などを受け、遺伝診療についてもがん、非がん領域を問わず、院内外からの紹介が増加しています。引きつづき中央西日本医療圏を中心に、より充実したゲノム医療の提供を目指した取り組みを今後も続けていく所存です。

研究面では、遺伝性腫瘍コホート研究や、各種データベースへの登録事業の体制整備を行っています。

2020年1月より臨床遺伝子医療学分野客員研究員として坂井美佳が加わり、研究面の充実を図っています。

ゲノム医療の臨床実装や研究においては、職種・診療科・部門横断的な取り組みが必須であり、多くの、広い分野にわたる専門家、多職種の方々の御指導や御協力を頂いております。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。引き続き御指導御鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。(河内 記)

## 自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門

令和元年度後期の光・放射線情報解析部門鹿田施設の動向をお知らせします。昨年度から当施設で行われているライフライン再生工事(RI実験施設空調設備等)は今秋から施設の利用を停止して本格的な工事に入りました。給排気設備、空調設備、配管等を全て交換する大掛かりな工事です。順調に終了すれば年度末には全て終了し、新年度から更新された設備で、RIの使用を再開する予定です。また、この改修工事に合わせて、RIの使用数量、使用室を変更する変更承認申請の手続きも進めています。これは分子イメージング研究に用いる核種について、使用の利便を図る目的で行うものです。今年度後期の行事としては当施設の花房が大会長として日本アイソトープ協会の放射線安全取扱部会年次大会を10月24・25日に開催しました。この大会は全国の放射線安全管理に関わるものが研鑽を深める目的で集い、シンポジウム、講演、研究発表等を行うものです。今回は倉敷市芸文館で放射線事故時の初動対応や法令改正などをトピックとして開催し、シンポジストとして寺東が講演するとともに、座長として寺東、花房が司会進行を務めました。また、前施設長の小野俊朗先生も岡山にゆかりの仁科芳雄博士の業績をテーマにご講演されました。本大会では施設のスタッフの永松、今田、磯辺、寺田が裏方を務め、無事に開催することができました。その他、8月7・8日にSPECT取扱説明会を開催しました。また、医学科の基礎放射線学の講義実習(令和元年12月～令和2年1月)、放射線業務従事者に対する教育訓練講習会(日本語2回、英語1回)を行いました。再教育訓練講習会(日本語2回、英語1回)は例年通り3月に実施する予定です。研究では、16th International Congress of Radiation Research(寺東)、日本防衛防衛学会第46回年次大会(寺東)、日本放射線影響学会第62回大会(寺東・磯辺・花房)、ACEM/JEMS 2019(寺東)、第18回日本放射線安全管理学会(永松・花房・寺東)にて学会発表を行いました。なお、人事については、今年度後期は同前期と変更はありませんでした。(花房 記)

## 動物資源部門

動物資源部門鹿田施設では、今年度、ラット飼育室の整備を

行い、2月に一方向気流式セーフティーラック4台(120ケージ収容)を3階ラット飼育区域に設置した。また、鹿田施設利用者が使用するヤギ・ブタの長期飼育に対応するために、中型動物用の飼育ケージを本年度に空調改修その他工事を行った津島南施設に整備した。実験機器としては、中型動物用に超音波診断装置の共同利用機器化を行った。また、施設設備では、4階のマウス飼育区域のマウス収容数増に対応するために排気ダクトの改良工事を実施した。

施設の教育活動では、昨年度下半期に引き続き10月～11月かけてマウス及びラットを用いた取扱初心者&初級講習会を開催した。11月19日～22日には、本部門で3回目となる国立大学法人動物実験施設協議会の実験動物関係教職員高度技術研修2019-中型動物を用いた動物実験に関わる知識と技術の習得-を開催した。この直後の11月23日には、麻酔蘇生学教室主催の術中呼吸管理セミナー「最新の肺保護換気について」が、ブタを用いてメインウェットラボ室で開催、本部門が実施の支援にあたったので先の高度技術研修のオプションメニューとして実際の支援業務の見学を組み込む試みを行った。

人事では、津島北施設担当特任技術職員の岸田裕美が12月31日付で退職、鹿田施設の矢田範夫技術専門職員、及び長らくマウスコロニーを担当していた正司直美技術補佐員が3月31日に60歳定年を迎えた。両名はそれぞれ再雇用職員及び特別契約職員として4月1日以降も引き続き動物資源部門で活動してゆく予定である。なお、3月31日現在の職員数は教員を除き19名である。(樫木 記)

## 薬 剤 部

人事関係では、10月1日付けで薬剤部内に人工知能応用メデイカルイノベーション創造部門を設置し、医薬品に関する質問に対してAIが回答を導き出してくれるAI搭載型医薬品情報提供支援システム「aiPharma(アイファルマ)」の開発に着手した。本部門に神崎浩孝准教授、山路和彦助教を配置した。12月1日付で松木砂稚子薬剤師が入局し、臨床試験支援室に配置した。2月1日付で檜枝大貴(川崎医科大学附属病院より)と鋒山香苗(京都大学医学部附属病院より)の2名の薬剤師が入局した。さらに、技術補佐員として岡本千佳代氏が採用された。また、1月1日より東恩納司薬剤師が感染制御部の専任薬剤師として配置され、院内における感染対策活動への寄与が期待される。一方、3月31日付けで岡崎昌利副薬剤部長が定年退職、北村佳久准教授が就実大学薬学部教授へ就任、釜野純二、国富泰介薬剤師が退職となった。

業務関係では7月より手術室内に「薬剤室」を設置して頂き、手術に使用する薬剤および麻薬の管理、PCA(自己調節鎮痛法)に使用する麻薬の調製業務を行っており順調に業務を行っている。

学会活動として、第57回日本癌治療学会学術集会、第29回日本医療薬学会年会、第58回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会 中国四国支部学術大会、日本薬学会第140年会、Neuroscience 2019等において業務成果および研究成果の発表を行った。第31回・32回の創薬・薬理フォーラム岡山を主催した。



学術論文として、2019年は英文原著論文に16報、和文原著5報の研究成果を発表した。

教育関係では、薬学部5年次の長期実務実習が開始され、令和元年度第Ⅲ期（8月26日～11月8日）16名（岡山大学薬学部）、第Ⅳ期（11月25日～2月14日）16名（岡山大学11名、福山大学4名、徳島文理香川1名）を受け入れた。（北村 記）

## 卒後臨床研修センター 医科研修部門

2019年度マッチ結果としては、先進・小児科・産科婦人科特別プログラム併せて、43名がマッチしました。各診療科での研修の充実と協力型病院・施設との連携によるたすき掛けプログラムの充実によるものと思います。指導医の先生方にはこの場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。

2020年1月7日の岡山大学病院互礼会では、病院長賞である権の木賞を、研修医代表として研修医の意見をまとめ上げ、様々な勉強会の企画をすることで研修プログラムの質の向上に貢献した2年目 大塚勇輝 研修医が受賞しました。

各学会では、大塚勇輝 研修医が第116回日本内科学会総会で優秀演題賞を、山岡主知 研修医が第92回日本内分泌学会学術総会で学生・初期研修医ポスター発表優秀賞を、河村俊一 研修医が第61回日本呼吸器学会中国・四国地方会で初期研修医優秀賞と第121回日本内科学会中国地方会で奨励賞を、保野貴慶 研修医が第81回日本臨床外科学会総会で優秀演題賞を、三浦 望 研修医が第115回日本循環器学会中国地方会で研修医奨励賞を、山内菜緒 研修医が第112回日本消化器病学会 中国支部例会で研修医奨励賞を受賞しました。その他、多くの研修医が学会発表の機会を提供いただきました。ご指導頂きました先生方には、重ねて御礼申し上げます。

また、10月12日～13日には、卒後臨床研修指導医講習会を開催し、37名の指導医の先生方にご参加いただき、より良い臨床研修を考える2日間になりました。

人事面では、1月より、植田真司 助教が副部門長となりました。

若手医師がアカデミックに活躍し、切磋琢磨しながら成長することができるのは、日ごろから熱心にご指導頂き、教育の重要性を肌で感じ取る環境で育ってきた賜物と思います。各診療科の先生方、協力型病院・施設の先生方、今後とも研修医のご指導をよろしくお願いいたします。（三好 記）

## 先端循環器治療学講座

先端循環器治療学講座は平成22年4月に開講し、循環器疾患の新しい診断、治療に関連する研究を行う目的としています。開講から10年となりますが、当講座の母体である循環器内科の伊藤教授のご尽力により、次年度の継続が決まっております。スタッフは、森田（教授）、西井（准教授）で、2名と少人数でございますが、循環器内科とともに、研究・臨床に精力的に活動しております。臨床研究では西井が中心で行っている心臓植込み型デバイスを用いた多施設共同研究が論文化され、現在、治療介入を行った研究の解析を行っています。次の多施設

共同研究やデバイス、不整脈の新たな研究も進めております。研究・遠隔診療のデータ解析については循環器内科の三好章仁先生、宮本先生、木村先生など多くの先生にもご協力頂き、順調に進んでおります。学会ではアジア・太平洋不整脈学会（10月）、植込みデバイス関連冬期大会（2月）、日本循環器学会（3月）などで一般演題、シンポジウム等を発表致しました。今後、アメリカ不整脈学会（5月）、日本不整脈心電学会（7月）、ヨーロッパ心臓学会（8月）などでも、一般演題、シンポジウムの発表を予定しており、同時に論文作成も行っています。これからも広く循環器系の臨床・基礎研究に取り組んでまいります。多くの先生方の協力のもと、研究・教育・診療を行っており、ここに感謝の意を表させていただきます。今後とも、ますますのご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

（森田 記）

## CKD・CVD地域連携包括医療学講座

本講座は、2011（平成23）年11月に開講したCKD・CVD地域連携・心腎血管病態解析学講座の仕事を引き継ぎ発展させる目的で、2016（平成28）年11月から3年間の設置、さらに2019（令和1）年11月からもう3年の設置となりました。腎臓専門医と循環器専門医との連携を通じた慢性腎臓病（CKD）重症化や心血管疾患（CVD）合併の予防のための病診連携、県や市など自治体との連携、および一般市民の方への啓発活動、の3本柱を活動目標としております。現在、内田治仁教授（腎臓内科）と吉田賢司講師（循環器内科）より構成されています。

内田は引き続き、NPO法人日本腎臓病協会（JKA）の副幹事長、岡山県生活習慣病対策推進会議CKD・CVD対策専門部委員等を務めております。また厚生労働行政推進調査事業の「腎疾患対策検討会報告書に基づく慢性腎臓病（CKD）に対する地域における診療連携体制構築の推進に資する研究」研究班の研究分担員として、日本全国における今後のCKD対策に努めています。吉田先生は循環器内科の医局長2年目として多忙を極めております。

岡山県内各地で様々な活動を行っています。毎年開催される世界腎臓デーイベントおよびCKD県民公開講座、病診連携における岡山市CKDネットワーク（OCKD-NET）セミナーを、それぞれ2020（令和2年）年3月に開催予定しておりましたが、今年中止となりました。OCKD-NETでは病診連携患者の前向き追跡検討を継続して実施しております。県や市など自治体との連携に関しましては、岡山市、美作市について矢掛町でのCKD対策に参画しております。啓発活動としては、2019（令和1）年11月に勝央町、矢掛町および備前市で、2020（令和2）年2月に美作市および岡山市南区で、CKDに関する一般市民向けあるいは医療従事者向けの講演会をそれぞれ開催しました。

研究活動ですが、臨床研究としましてCVD進展リスク因子の解明・重症化予防診療システムの開発を目的とした多施設共同CKD・CVDコホート研究（Kakusyō 3C study）を継続しております。参加施設の先生方におかれましては、2020年度までのfollow upのご協力を何卒宜しくお願い申し上げます。基礎

研究としまして、内田は腎臓病・血管病の検討を、吉田はヒト心臓内幹細胞から心筋細胞への分化制御機構の解明を、それぞれ継続して実施しております。研究の成果は各学会にて報告しております。

末筆となりましたが、今後とも先生方の御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。(内田 記)

## 救急外傷治療学講座

平成26年11月に開講した本講座は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院を母体とした寄付講座です。聖マリア病院は西日本有数の救急病院であり、内外因・成人小児問わず多くの患者を受け入れ地域医療に貢献しています。

現在、当講座は山田、山本の教室員2名と少数ではありますが、臨床・教育・研究に勤んでおります。

臨床では、二人共に高度救命救急センターのスタッフとして、中尾篤典センター長のもと救急患者の受け入れに努めております。山田講師は外傷診療と災害医療の専門性を、また山本助教は小児救急医療と集中治療の専門性を有しており、部署内、院内そして地域の信頼も得られており、いまやなくてはならない存在となっています。

教育では、学生、研修医教育共に好評価を得られるようになり、加えて、コメディカルや救急救命士の教育にも盛んに取り組んでおります。

研究面では、国内外の学会で積極的に発表し、論文数も着々と増え結果に表れつつあります。基礎研究では、医局研究室も稼働し、山本は水素・ラットの小腸を用いた研究にも着手しており、研究活動も活発となってきました。

救急医療、外傷診療、災害医療、小児診療、集中治療と専門性を有した講座として、臨床・教育・研究へ邁進する所存です。皆様、今後とも、何卒御指導御鞭撻のほど宜しく御願ひ申し上げます。(山田 記)

## 陽子線治療学講座

津山中央病院での陽子線治療は、平成28年4月28日に自由診療として開始、7月1日に先進医療適応となりました。岡山大学は津山中央病院と共同でがん陽子線治療センターを運用しており、大学病院では勝井、丸川、放射線医学講座の吉尾、渡邊、杉山が診療にあたっています。今後も各診療科・センターの専門家の先生方とご協力して最適な放射線治療を提供してまいります。

陽子線治療は令和2年4月時点で脳腫瘍、頭頸部癌、食道癌、原発性肺臓癌（縦隔腫瘍や気管癌を含む）、転移性肺臓癌、原発性・転移性肝臓癌、胆管癌、膵臓癌、前立腺癌、直腸癌術後局所再発、小児腫瘍等に対して行っています。陽子線治療の保険適応は診断時20歳未満の小児腫瘍（限局性の固形腫瘍）に始まり、平成30年4月に、頭頸部癌の一部（口腔・咽喉頭の扁平上皮癌を除く）、前立腺癌（限局性）、骨軟部腫瘍（手術不適応）に対して適応拡大されました。その他の対象疾患は先進医療で運用され、技術料として自費にて288.3万円（津山中央病院の

場合）必要で、入院・薬剤・検査等は公的保険が適応されます。超希少がんを扱うことが多い小児・脳腫瘍は、岡山大学病院小児血液・腫瘍科、脳神経外科、血液・腫瘍内科とのカンファレンスにて方針を決定しております。症例数は徐々に増加、また中国からの患者も増加してきています。

陽子線治療の普及活動として、日本歯科放射線学会関西・九州合同地方会より特別講演の機会をいただきました。説明会は、姫路市医師会にて開催していただきました。市民向けとして、香川県立中央病院にて公開講座、広島ホームテレビのHOMEぼるぼるTV出演の機会をいただきました。同窓の先生方、関係者の皆様にはこの場をお借りして深謝申し上げます。

陽子線治療を皆様には是非ご利用いただき、お役に立てればと考えておりますので、引き続きよろしく御願ひ申し上げます。

(勝井 記)

## 三朝地域医療支援寄付講座

2019年3月から2020年2月までの報告をさせていただきます。

人事では、1月から6月まで、腎・免疫・内分泌代謝内科学より原孝之医師が、7月から12月まで、循環器内科学教室より三好章仁医師がそれぞれ半年間勤務しました。本年1月より消化器・肝臓内科学教室の山崎泰史医師が赴任・診療にあたっています。

当講座は、三朝医療センターの診療部を継続しながら、地域住民の健康意識向上にも取り組んでいます。本年度は芦田が鳥取県中部健康セミナー：骨と関節の日（10月06日）「年をとっても元気で過ごすために－フレイル・サルコペニアに気を付けましょう」等の市民公開講座を倉吉市・真庭市で開催し住民の参加を頂いております。(芦田 記)

## 血液浄化療法人材育成システム開発学講座

本寄付講座は平成28年に開講し、5年目に入りました。腎不全、特に血液透析を主体とする血液浄化療法に関する教育、研究等に力を入れております。腎臓病対策や腎不全・透析治療の更なる向上と地域連携による人材育成システムの開発を目的としております。

9月に岡山アクセスセミナー2019「アクセストラブルシューティング」を主催し、ハンズオンセミナーで大高助教が指導を行いました。透析施設より140名のご参加を頂き、盛会裏に終了しました。1月には岡山HIV透析医療講習会を開催し、HIV/AIDS患者の透析治療、今後の岡山HIV透析ネットワーク構築について議論を行いました。

杉山は10月に第49回日本腎臓学会西部学術大会・教育講演「レジストリー研究 update : J-RBR」、第77回岡山腎疾患懇話会・教育講演「腎疾患の超微形態診断と最新の高血圧診療」、第10回美作CKDネットワーク学術講演会・特別講演「最新のCKD対策と腎性貧血の診療」、11月に第2回岡山県慢性腎臓病(CKD)研修会「CKD患者の療法選択」、全国Webセミナー「ファブリー病の早期診断と治療：診療ガイドラインを含めて」、1



月に第7回日本腎臓研究会・指定講演「時代が求める地域のCKD対策と今後の展開」、第18回倉敷腎臓病談話会・特別講演「地域が求めるCKD対策と今後の課題」、2月に岡山県・医療費等の分析に基づく保健事業実施のための研修会「慢性腎臓病(CKD) 概論」の講演を行いました。この間、分担執筆した「腹膜透析ガイドライン2019」(医学図書出版)が出版されました。研究面では、学振科研費・基盤研究(C)の研究代表者、厚労科研費・難治性疾患政策研究およびAMED研究費・腎疾患対策実用化研究の研究分担者を務め、2019年に英文論文13報(原著10・症例3報、共著含む)が出版されました。

岡山県CKD・CVD対策専門会議長を務め、「岡山県国保ヘルスアップ支援事業(医療費等分析・評価)」の中で「岡山県における透析患者数の分布と推移に関する調査(ODN Survey)」をCKD・CVD地域連携包括医療学講座、腎・免疫・内分泌代謝内科学と共同で行い、2年目の報告書を作成して県内の自治体・保健所、透析施設に配布致しました。

本年9月13日には岡山アクセスセミナー2020を主催する予定です。今後も腎臓病・腎不全、血液浄化療法の研究、教育や診療を通じて人材育成に尽力して参ります。本講座は、岡山県医師会透析医部会を中心に透析関連施設よりご支援を頂いており、厚く御礼申し上げます。(杉山 記)

## 運動器外傷学講座

運動器外傷学講座は運動器外傷に対する治療法の研究・開発を行い、国内の運動器外傷に関する教育を牽引することを目的とした講座で開設4年が経過し、本年4月より第2回目の契約更新が承認されました。スタッフは野田知之(教授)、中田英二(講師)の2名で活動中です。

基礎研究では「人工知能を用いたインプラントと骨の適合予測システムの開発」、免疫病理・松川教授との共同研究で「抗菌性骨接合材」にかかわる研究を引き続き行っております。野田を研究責任者とする「脛骨遠位端骨折に対するDTN(ディスタルティビアルネイル)の有効性と安全性に関する多施設共同臨床研究」も当院を含む国内9施設で施行し、症例登録を終えたところで、今後最終成績をまとめ論文化に向かう予定です。

臨床面では救急科と連携しての多発外傷・高エネルギー外傷に関連した重度整形外傷に対する専門的・集学的治療、ならびに他院で対応困難な骨盤骨折・寛骨臼骨折など難治性骨折に対する受け入れや手術支援も積極的に行いました。また、骨転移による病的骨折などの骨関連事象に対する治療も積極的に行っており、これらも含めた外傷、骨折関連の治療成績や合併症について、国内外で精力的に学会発表、論文発表も行いました。

同窓・同門の諸先生方には引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒よろしく御礼申し上げます。(野田 記)

## 地域救急・災害医療学講座

2019年春から尾迫貴章、上原健敬の2名での活動となっております。

臨床においては従前と同様に重症患者の診療ならびに外傷患

者の治療を行ってまいりました。おかげさまで地域の皆様より重篤な患者様の紹介をいただき、精力的に診療を行っております。また病状の軽快した患者様につきましては、スムーズな後方連携をいただいております。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。今後とも患者様のご紹介ならびに逆紹介につきましてご配慮を賜りますようお願い申し上げます。

研究面では、救急分野ならびに整形外科分野の関連学会におきまして日々の診療により蓄積した業績を発表しております。

地域での活動としては令和元年度 岡山県臓器提供ワークショップに講師として携わりました。また前期に引き続き県内中高生を対象とした県医師移動会長室事業に参画し救急医療の魅力やAdvance Care Planningに関する講演をおこなっております。また、当院整形外科学教室が事務局として運営した第52回中国・四国整形外科学会にスタッフとして参加したほか、人体構成学講座主催の若手整形外科外傷医を対象とした臨床解剖実習も開催し、好評を得ております。

基礎研究も継続しておりますが、成果として公表可能となるにはしばらくの時間が必要と考えており、粛々と研究を継続しております。

今後も益々、臨床・教育・研究活動など講座運営に取り組んで参りたく考えております。今後とも宜しく御礼申し上げます。(上原 記)

## 岡山県南東部(玉野)総合診療医学講座

玉野市と岡山大学総合内科学への連携で開講している講座です。玉野市を中心とした岡山県南東部における地域医療に多面的な貢献を行うことを目標のひとつとして活動いたしました。

玉野市民病院においては、内科診療を担当いたしました。総合内科医として、離島を含めた地域の病院・医院と連携しつつ診療を行う中で、担当教官の専門である伝統医学(漢方医学)領域、循環器科領域の診療を積極的に行いました。循環器科領域においては心臓超音波検査の実施と同時に検査技師への教育も引き続き行い、診療内容の充実を図っております。

同院では内科専門医を目指す専攻医や、初期臨床研修医の受け入れが行われ、その指導に携わりました。また、昨年度に引き続き地域医療体験実習(2-3年生)を行う学生の受け入れも行われ、当講座の教員が実習の評価を行いました。地域の医療現場を肌で感じることでできる実習であり、貴重な経験になったという学生の言葉が多く聞かれます。専攻医・研修医・学生の受け入れにご協力いただきました関係者の皆様に深く御礼申し上げます。このような活動が将来の地域医療に貢献する医療人の育成に繋がるものと期待しております。

岡山大学においては、総合内科・総合診療科での診療を担当いたしました。教育面では総合内科において学生の基礎臨床実習および選択実習を担当し、医学部学生に対する内科総論、東洋医学の講義を担当いたしました。また、伝統医学の卒前・卒後教育として定期的に勉強会を開催し、その普及を図りました。薬学部のご協力により薬用植物の観察会を開催することができ、伝統医学をより深く学べる機会を提供いたしました。

(植田 記)



## 岡山県南西部(笠岡)総合診療医学講座

本講座は、平成29年4月に笠岡市と総合内科学への連携のもと、開講した寄付講座です。笠岡市は岡山県南西部、広島県との県境に位置しており、人口の34.5%を65歳以上がしめ、高齢化がかなり進行した地域です。また、瀬戸内の島嶼部を擁し、地域医療さらに離島医療が必要とされる岡山県の中でも特に医療過疎が進んでいます。医療環境を保つことは社会基盤のひとつとして大変重要であり、地域医療を担う医療従事者の育成が重要となっております。現在、医学教育においても、地域基盤型医学教育【Community-based medical education】が重要とされており、本講座が地域医療、島嶼部医療における全人的医療の教育と研究の拠点となれるよう、努力してまいりたいと思います。人事面では、本年1月より山崎泰史先生の後任として、安部 真が着任いたしました。笠岡地域にて9月に笠岡市立市民病院、11月には井原市民病院、笠岡第一病院にて救急医学会認定ICLS (Immediate Cardiac Life Support) コースを開催し、医療従事者のための心肺蘇生トレーニングを通して医療レベルの向上、医療人の育成に寄与するとともに、コース開催をとおして、同じ地域で働く医療を支える仲間として顔の見える関係を作るきっかけとしております。引き続き、多くの先生方のお力もお借りしながら、教育、研究、臨床のそれぞれの場面で、努力を重ねてまいりたいと思っております。引き続きご指導のほど、よろしく願いいたします。(小川 記)

## 高齢者救急医療学講座

本講座は、平成29年11月1日付で救急医学講座、中尾篤典教授のもと井原市の寄付を頂き開講をいたしました。この講座の設置目的は、高齢化のすすむ地域医療における高齢者救急医療の在り方についての課題を抽出しその解決に取り組むとともに、救急医療を含めた地域医療体制の構築や人材育成を実践することにあります。スタッフは万代康弘、青景聡之の2名でございます。大学においても、地域においても救急医療や人材育成は様々な方々のご支援を頂かなければ成り立つものではありませんので、お力添えをどうぞ宜しくお願い申し上げます。

井原市と岡山大学において、主に井原地域医療における救急体制の構築のための活動を行っております。また、医師不足が叫ばれる地域医療においてはチーム医療が必須な状況であり、医師だけでなく多職種にわたる実践能力向上を目指した人材育成とそのシステム構築を目指して活動を継続しております。平成30年度から井原・笠岡地区の5病院10回の救急対応研修会を実施し、井原市民病院と井原医師会で訪問看護師向け研修会を2回開催、ほぼすべての受講生が意識変容をきたしたという結果を得ております。そして今年度、高齢者のAdvance Care Planning (ACP) についての実態調査について外部資金を獲得することができました。

今後は更に課題を具体化するためのデータ収集そして解析を継続し、地域の急病患者的の初期対応を行うシステムを模索したいと考えております。その為に必要な要素として人材育成が必須ではありますが、前述のようにより実践的な研修会としてシ

ミュレーショントレーニングを継続的に開催しております。救急に携わる医師、看護師はもちろんですが、地域医療で重要な役割を果たす訪問看護師、ケアマネージャー、介護福祉士などの多職種にわたり人材育成を継続してまいります。

まだまだ未熟な本講座ではございますが、同窓・同門の諸先生方には引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。(万代 記)

## 瀬戸内(まるとめ)総合診療医学講座

本講座は、平成31年4月に香川県丸亀市のまるとめ医療センターと総合内科学の連携のもと開講された寄付講座です。総合内科学ではこれまでに岡山県内の玉野・笠岡・新見地域で3つの地域医療寄付講座を開講してきましたが、県外を活動首座とする寄付講座は初めてになります。丸亀市は人口約11万人で、香川県では高松市に次ぐ第二の都市として中讃・西讃地方の中心的役割を果たしています。丸亀市本島(ほんじま)には昭和23年に岡山医科大学附属病院の本島分院が設置(平成12年廃止)されるなど、岡山大学と丸亀市の間には医療連携の歴史がありましたが、現在、慢性的な医師不足を背景に急性期病院からの後方支援型医療が十分に提供されていない状況にあります。本講座は、まるとめ医療センターを中心とした中讃地域の地域医療実践に加え、臨床教育・地域医療研究を進めていくことで、若手医師が地域医療に従事しながら継続的なキャリアアップ(学位・専門医取得)を実現する体制を構築することを目的としています。さらに岡山県内の地域医療寄付講座と連携し、「瀬戸内マリンエリア」寄付講座群として、病院総合診療医育成の環境整備に向けた調査・研究と社会実装トライアルを目指しています。地域発信型研究としては、地域医療が抱える問題を日々の臨床業務から抽出し、解析データから地域ニーズに沿った形での解決策の提案をすることを目標としております。地域医療現場では人口の高齢化が急速に進んでいることからポリファーマシー・フレイルなど老年医学に着目した研究や、抗菌薬適正使用・薬剤耐性菌などの感染症分野に関連した研究を進めているところです。

人事面での変更として、2019年11月から山本晃医師に代わり西村義人助教が新たに着任しました。西村助教は、2018年より厚生労働省大臣官房国際課に出向し、2019年10月に岡場で開催されたG20保健大臣会合で岡山大学を代表して活躍いたしました。

今後とも、診療・教育・研究を通じて、SDGsに基づいた継続性のある地域医療の実践を目指して活動してまいります。

(萩谷 記)

## 災害医療マネジメント学講座

本講座は、平成30年西日本豪雨災害の直前に鳥取市の寄附講座として開講されました。令和元年後半は、鳥取県東部圏域の医療・福祉行政関係者を対象として、災害医療に関するメールマガジンを月1回配信しております。現在定期購読者は、103名で、11報までが配信されております。また、市民公開講座、

医療・福祉行政関係者を対象とした研修会を開催しております。

一方、2019年度 医療技術等国際展開推進事業にて「ミャンマーにおける救急災害医学教育人材育成事業」が採択され、ミャンマー共和国からの研修生（救急医2名、救急専任看護師2名）を受け入れ、3週間に及ぶ日本の災害医療について学んでいただきました。この研修カリキュラムは、病院前医療、外傷医療、災害医療（DMATを中心として）の研修方法についてですが、研修生はこれら研修内容を単に学習するだけでなく、自国に適したカリキュラムを将来自ら作成する術を学ぶためのものです。研修生と派遣元のミャンマー共和国関係者からは好評を得ることができました。このような評価を得られたのは、学内外の同窓会を中心とした多くのご協力・ご指導を得られたため、と実感いたしております。紙上で大変恐縮ではございますが、改めてお礼申し上げます。

本講座の主たる研究テーマは、Healthcare Business Continuity Plan (H-BCP) であります。実用的なH-BCPはまだ開発・運用されているとは言い難いのが実情でございます。その課題を解決することが世に求められているところですが、この根源にあるものが組織のマネジメント論でございます。

本講座の活動はいずれも、学内外の諸先輩方のご協力・ご指導があって成立するものでございますため、今後一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。（中尾 記）

## 検査部

総合内科大塚文男教授が検査部長を併任しています。本年度の退職者はいませんが、青江伯規主任が11月よりPMDAへ1年間出向しています。業務上では検査システムの更新が電子カルテと同様に12月30日に行われました。また、令和2年1月に超音波検査が旧生化学検査室の改修後に移転、2月10日に一般検査室が旧遺伝子検査室の改修後に移転し順調に稼働しています。教育関係では本学保健学科学生、倉敷芸術科学大学学生の臨地実習および本学医学科学生のポリクリを受け入れました。研究・学会活動では、全国学会で10演題、地方学会で4演題発表しました。また、邦文論文1編、雑誌に3人の執筆が掲載されました。資格関係では、9月に草谷ひなの技師が緊急臨床検査士、10月に大西巧真技師が日本臨床神経生理学会専門技術師認定証 術中脳脊髄モニタリング分野を取得しました。

（岡田 記）

## 循環器疾患集中治療部

循環器疾患集中治療部が行う中心的業務はハイリスクな心疾患患者の術前・術後管理です。高度で専門的な医療技術のみならず、多分野にわたるチームワークが要求されています。心房中隔欠損症や動脈管開存症のカテーテル治療はこれまでに1,200例に達する治療を実施し、国内トップの症例数と実績をあげて、同様の治療を行う各地の大学病院へ治療技術指導を継続的に行っています。

2019年12月には数年前から本学で先進的に実施してきた「潜因性脳梗塞再発予防を目的とした経皮的卵円孔閉鎖術」が新た

に保険収載されました。社会的に影響の大きい若年成人の脳梗塞再発を減少させる新しい医療技術として注目されています。すでに実際の症例数も上昇しており、今後循環器疾患集中治療部の新しい柱として期待しています。さらに国内初の医師主導治療として難治性片頭痛治療目的とした経皮的卵円孔閉鎖術も開始し、先駆けとなる臨床治療を目指しています。

心臓血管外科の手術症例の中でも成人期の先天性心疾患患者数が増加してきました。全国に先駆けて開設した成人先天性心疾患センターと協力しながら、診療のみならず教育・研究を含めた、国内の基幹施設として責務を果たしていきたいと思っています。（赤木 記）

## 総合リハビリテーション部

千田益生教授のもと、PT29名、OT7名、ST4名、看護師1名、クラーク1名で日常業務をこなしております。医師は助教1名、医員2名です。

毎週金曜13時からのリハカンファレンス（回診）を充実させ、症例1～2例を複数のスタッフで今後の方針やアプローチについて話し合っています。

学会発表は各自目標を決めて行っています。リハの発表は、様々な分野にわたり、多科の先生方にいろいろとご指導いただいております。大変感謝いたしております。他科のカンファレンスも担当者が参加し、連絡事項などはリハ部へ持ち帰り、全員で共有できるよう心がけております。

教育面では、医学科4・5年生が整形外科実習の中で、リハ診察・車いす・義足体験・筋電図実習・理学療法・作業療法など学んでいます。選択実習では、筋電図やリハ診察を積極的に学んでもらい、最終日にはリハ関連の課題についてプレゼンテーションを行っています。

今年度から卒後研修プログラムに参加し、2名の初期研修医（尾崎・濱崎）がリハ研修を行いました。12月1日に高知で行われた日本リハビリテーション医学会地方会で症例発表もしてもらいました。来年度、後期研修医が入ることが決まりました。今後もリハ医学の魅力が学生・初期研修医に伝えられるよう頑張ります。

1月には尾崎（理学療法士）、3月には上本（理学療法士）が退職いたしました。池田（医師）は4月より吉備高原医療リハビリテーションセンターへ転勤しました。

スタッフ同士でいつも連絡も密にとるよう心がけておりますが、行き届かない点多々あると思います。お気づきの点がございましたら、お知らせいただけると幸いです。引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。（堅山 記）

## 病理診断科・病理部

柳井広之教授のもと、スタッフ医師4名（都地友紘、谷口恒平、西田賢司、田中健大〔病理学（腫瘍病理）〕）、医員3名（小野早和子、柴田嶺、池田知佳）の合計7名で業務にあたっています。

学術・教育面では、11月に岡山で開催された第58回日本臨床



細胞学会秋期大会で柳井が副会長を務めました。12月にはマンマのヤンゴンより病理医1名の研修を受け入れました。2月には今回が9回目の開催となる岡山県がん病理診断実務者研修会を主催し、岡山県内だけではなく他県からも多くの病理医ならびに病理技師の方々にご参加いただきました。

業務面では、がんゲノム医療に関連した業務が増加しています。当院は全国に11施設あるがんゲノム医療中核拠点病院の1つです。6月にがん遺伝子パネル検査が保険適用となったことを受けて、遺伝子パネル検査を受ける患者数が飛躍的に増加しています。病理部門では、遺伝子パネル検査に提出する組織の選定や、遺伝子パネル検査の結果を治療に結びつけるための多職種による専門家会議（エキスパートパネル）への参加を行っています。がん遺伝子検査ではパラフィン包埋組織検体からDNAを抽出して検査を行うため、病理部門での組織検体の管理、選定が重要です。これまでの病理診断に加えて、がんゲノム医療の分野においても尽力させていただきたく存じます。

引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。（都地 記）

## 輸 血 部

2019年度は輸血部にとって多忙な一年となりました。昨年、その高額な費用でも話題となったキメラ抗原受容体T細胞（CAR-T細胞）療法の施設承認に際し、細胞採取、処理、保管にわたる厳格な基準が要求され、その準備に数か月を費やしました。無事監査をクリアし、血液腫瘍内科では患者さまへの治療が開始されています。監査の準備に際しましては、新医療開発センターのCell Processing Center（CPC）、血液検査室、臨床工学部、薬剤部、医療情報部、医事課など多くの部門の方々に多大なご協力を頂きました。この場を借りまして、改めて御礼申し上げます。今後、細胞療法は他分野にも拡大することが予想されますので、引き続きご支援のほどお願い申し上げます。

人事面では、中村真が昨年9月に高知大学血液内科、杉浦弘幸が12月に中国中央病院、清家圭介が本年1月にミシガン大学留学へと異動致しました。かわって、昨年10月より松田真幸、12月より近藤匠、本年1月より木村真衣子が輸血部医員として加わっています。

医療の発展とともに業務内容が多岐に渡るようになっておりますが、院内の安全な輸血療法を第一の使命として輸血部一同頑張っておりますので、ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。（藤井伸 記）

## 血液浄化療法部

血液浄化療法部は、和田淳部長（腎・免疫・内分泌代謝内科学教授）のもと、スタッフ医師2名（木野村賢、田邊克幸）、医員5名（谷村智史、川北智英子、加納弓月、森岡朋代、高橋謙作）で診療にあたっています。入院中の慢性維持透析患者の透析管理、新規の透析導入、急性腎不全患者の透析管理、難治症例に対する血漿交換等の体外循環治療について、看護師、臨床工学技士と協力して診療に取り組んでおります。

関連病院の先生方には多数の透析患者をご紹介頂いておりますが、血液浄化療法部への延べ受け入れ件数（アフレスシ療法を含む）は本年度も前年度より増加傾向であり、平成31年/令和元年（1月～12月）集計での延べ治療患者数は2346件と前年度より50件程度増加しております。特に循環器系の手術やインターベンションを受ける透析患者数が増加し、患者の重症度も高まっています。腎移植の術前とともに、膠原病や神経疾患に対する血漿交換療法も活発に行っています。血液浄化療法部に併設されているCAPD外来では、現在22名程度の腹膜透析患者の外来診療を行っており、週1回の血液透析とのハイブリッド治療は2名で継続中です。今後も可能な限り当院で血液浄化療法を必要とする患者の受け入れに対応し、安全な治療を提供できるよう取り組んでまいりますので、同門の先生方、関連病院の先生方におかれましては引き続きご支援をお願い申し上げます。（田邊 記）

## 高度救命救急センター

高度救命救急センターのご支援を賜り誠にありがとうございます。岡山市消防局や他病院からの受け入れの要請は65歳以上が人口の1/3となる2020年を迎えましたが、いまだ毎年増える傾向にあります。皆様のご支援により運営が成り立っております。年間の高度救命救急センターの救急集中治療室（EICU）への入院は2019年558例でした。これは2015年の入院件数の1.7倍程度、昨年度から同程度の入室を維持しています。内訳としては、重症外傷、広範囲熱傷、院外心停止、重症中毒例をはじめとし、特に管理の難しい小児重症事例や体外人工肺管理を要する重症呼吸不全などの症例のご紹介も毎年増加傾向にあります。重症外傷では現場（救急隊）からの直接要請が多数となっております。内因疾患等の搬送元はさまざまであり、自宅などからの搬送の他にも、中国・四国地方の他県からの病院間搬送も多いのが実情です。年齢層は概して他病院の集中治療室より圧倒的に低く平均年齢が40～50歳となっており、若い方の診療をお任せいただけることに一同、やりがいを感じております。一方、高度救命救急センターにおける高齢者の診療のあり方も現在非常に重要な問題であり、Advance Care Planning（ACP）のあり方や高齢者医療の研究などを積極的に取り組んで参りました。

高度救命救急センターの運営は現在16名で行っております。整形外科、脳外科、口腔外科からは、それぞれ1～2名の救急のスタッフを派遣していただいております。その他専門診療科の先生方には迅速に対応頂き、本当にありがとうございます。搬送数やEICUへの入室が増えたことで高度救命救急センターが求められている成果や課題を我々は理解して、精進して参ります。救急の対応能力は病院力にも繋がるものと考えていますので、今後ともよろしくお願いいたします。

高度救命センターとしての使命を果たすのはもちろんのことですが、さらに国際学会・国内学会（2019年：55題）への発表や英文・和文論文（2019年：41編）の発表も行い、教育活動（研修会）や各トレーニングコース等も積極的に実施しています。



今後ともご支援のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

(塚原 記)

## 周産母子センター

周産母子センターは、地域周産期母子医療センターとして、県内外から多数の症例をご紹介いただいております。

当センターは、合併症妊娠や習慣流産・不育症、周産期合併症などのハイリスク妊娠・分娩管理だけでなく、正常妊娠例や生殖補助医療（ART）にも積極的に対応しているのが特色です。分娩時大出血などの産科救急には、高度救命救急センターや麻酔科、放射線科などと協同で母児救命に取り組んでいます。また先天性心疾患に代表される胎児異常症例につきましては、小児循環器科、心臓血管外科、小児外科、脳神経外科、小児麻酔科など関係各科と協同で診療に従事しております。

当センターには産科部門（周産期および生殖内分泌）とNICU部門があり、増山 寿産科婦人科教授がセンター長、鎌田 泰彦が副センター長・准教授、産科婦人科の早田 桂が産科部門長、小児科の吉本順子がNICU部門長を務めております。産科部門は、周産期専従医および生殖内分泌専従医を中心に産婦人科専攻医とともに診療にあたっております。NICU部門は、塚原宏一小児医科学教授の指導下で、新生児専従医の鷲尾洋介、岡村朋香、森本大作および産科婦人科の大平安希子を中心に運営されております。

現在の病床数は、入院棟4階東病棟に産科（母体）18床、新生児集中治療室（NICU）6床、重症新生児病床12床。4階西病棟に産科（母体）5床がそれぞれ配置されています。また4月よりNICU専従の看護単位が追加され、地域医療への更なる貢献のため、病院を挙げて取り組んでいます。

地域の周産期医療の中核の一つとして診療にあたりとともに、日本周産期・新生児医学会の母体・胎児専門医の基幹研修施設、新生児専門医の指定研修施設として専門医の育成にも力を注いでおります。同窓の先生方におかれましては、引き続きご支援とご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。(鎌田 記)

## 内分泌センター

内分泌センターでは内科・外科Cフロアおよび西7階病棟にて内分泌内科・外科・コメディカルが一丸となって全身多臓器に及ぶ多様な内分泌疾患に対して関連各科と緊密に連携しながら日々診療を行っております。中四国を中心に全国の同窓の先生方から患者様をご紹介頂き、内分泌センターカンファレンス等にて各専門の立場から活発な意見交換を行いつつ、1症例毎に多彩な病態を呈する内分泌疾患に対してチームで取り組むとともに、専門医育成や学生・研修医教育にも尽力しております。

2019年度下半期の学会活動として、日本内分泌学会臨床内分泌代謝Update・日本甲状腺学会・日本神経内分泌学会・日本生殖内分泌学会・間脳下垂体副腎系研究会・間脳下垂体腫瘍学会・日本乳癌学会中国地方会・内分泌学会中国地方会・中国四国甲状腺外科研究会・岡山内分泌同好会など、内分泌代謝領域の主要な学会・研究会に参加し、数多くの学会発表を行いました。

た。

最後になりましたが今後とも同窓の諸先生方の御指導・御支援を何卒よろしくお願い申し上げます。(稲垣 記)

## 低侵襲治療センター

平成23年度岡山県地域医療再生臨時特例交付金によって整備されました低侵襲治療センターは平成24年の設立から7年余りが経過しました。センター長の藤原俊義教授のもと、消化管外科、肝・胆・膵外科、泌尿器科の専任、兼任スタッフが、当院での鏡視下手術を推進と若手外科医の育成に尽力するとともに、活発な学術活動に加え、学生教育から大学院教育、さらには県内外の関連病院への教育活動も継続しております。下半期では献体を用いて内視鏡手術に必要な外科解剖を勉強させていただく「臨床応用解剖実習セミナー」や各分野のエキスパートによる講演等も開催し、高度な手術手技が要求される鏡視下手術の術者育成に努めております。

手術支援ロボット「ダヴィンチ」による手術は保険適応となる術式が増え、従来からの泌尿器科手術に加え、胃、食道、縦郭、肺、子宮の手術も当院で保険診療として実施されるようになり、日常臨床として定着しております。病的肥満症の治療でも糖尿病センター他多職種と構成される肥満症外科治療チームの中で腹腔鏡胃縮小術を担当し実績を重ねております。消化器内科との十二指腸腫瘍に対する合同手術、腹腔鏡下肝切除、膵切除等、高度な鏡視下手術も推進しており、安全、安心な低侵襲手術の普及にセンターとして貢献をしてみたいと思います。なお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。(香川 記)

## 糖尿病センター

当センターでは、「岡山県糖尿病医療連携推進事業」の事務局に加え、平成26年度からは「糖尿病看護認定看護師チーム岡山」と「CDEJ（日本糖尿病療養指導士）チーム岡山」の事務局業務も担当しています。また、岡山大学病院における糖尿病診療では、多職種によるチーム医療の深化、インスリンポンプ、新規リアルタイム持続血糖測定器の導入、肥満外科手術等の先進糖尿病治療の推進に取り組んでいます。2017年2月から開始した肥満外科手術（腹腔鏡下スリーブ状胃切除術）は、2020年3月時点で14症例の手術を安全に行い、望ましい経過を得ています。

「岡山県糖尿病医療連携推進事業」では、県内における糖尿病診療レベルの向上と医療連携体制の構築及び県民への普及啓発を目的とした活動を進めており、平成26年度に新設された「おかやま糖尿病サポーター制度」では、令和2年3月現在で約1,800名が認定されており、糖尿病診療に関する知識とスキルの維持・向上を図っています。

また、県内で約340の施設が糖尿病総合管理医療機関（かかりつけ医）として岡山県知事および岡山県医師会から認定されており、かかりつけ医と専門施設との円滑な連携ならびにおかやま糖尿病サポーターも加えた地域密着型の糖尿病診療・連携

体制（「おかやまDMネット」）の構築を推進しています。さらに、国策でもあります糖尿病性腎症重症化予防対策につきましても、おかやまDMネットが中心的役割を果たす「岡山県糖尿病性腎症重症化予防プログラム（岡山方式）」を策定し、令和2年度以降、これまでの市町村における個別的な取り組みを全県で統一的に実施する方向で進めています。

最後になりましたが、同窓の先生方におかれましては、引き続きご協力・ご支援の程何卒よろしくお願い申し上げます。

（片山 記）

## IVRセンター

IVRセンターでは垣根を越えた多数科の医師と多職種のメディカルスタッフとの横断的な協力のもと、日々高いレベルの画像ガイド下の低侵襲な治療を行っています。

10月に岡山で開催されましたG20保健大臣会合ではIVRセンターはエクスカースション先として各国の大臣の見学をうけました。決して長い時間ではありませんでしたが、見学された皆様の反応は非常に好ましく当センターの素晴らしさを世界中に発信できたこと誇らしく思っております。また、本年も積極的な他施設からの見学の受け入れを行っており、2019年度には1月末現在で61名が訪れました。見学された皆様から賞賛のお言葉をいただいておりますが、現状に満足することなくより高いレベルを目指し続けております。11月から2ヶ月間ミャンマーより放射線科にIVRの研修のため1名の医師が留学されました。当センターの高いレベルの環境、手技、チーム医療に大変感銘して帰国の途につかれました。母国でのさらなるご活躍を祈願しております。1月30日には恒例となりましたIVRセンター新年会が開催され、職種を超えて親睦を深めました、これで今年も頑張れると思います。

IVRセンターでは2013年4月の開設以降、毎月1回センター運営会議を開催し、安全面など診療科間で情報を共有することに努めております。今後もさらに高度な医療を安全に行っていくたく思っております。

（生口 記）

## ジェンダーセンター

人事面では大きな変化はありませんが、以前お伝えしたように岡山大学ジェンダークリニック性別適合手術適応判定会議に、小児内分泌を専門とする長谷川高誠先生にご参加いただくようになりました。今後受診者数の増加が予想される思春期例に対して、専門的見地からのバックアップをいただけるようになり、心強い限りです。

2018年4月の診療報酬改定後で性別適合手術が保険適用となったものの、ホルモン療法の保険適用が認められていないことから、性器に関わる性別適合手術は混合診療とみなされる問題が続いています。この状況下で2018年度に当センターおよび協力病院では、162例の手術を実施し、そのうち62例を保険診療で実施しています。保険診療例のほとんどは、乳房切除術か修正術です。今後は特殊な状況下でホルモン療法が実施できなかったmale to female例に対する外陰部女性化手術を保険診療

で行うことも計画中です。

一部とはいえ、手術を保険診療で行えることは、受診者にとって福音であり、今後も着実に症例数を増やしていくよう努めております。一方、全ての手術が原則として保険で行えるよう、働きかけていくことも重要です。ホルモン療法の保険適用化の問題につきましては、関係者と協議して医師主導治験を検討中ですが、実現には相当の困難が伴いそうです。混合診療を特例的に認めてもらうことも視野に入れる必要もありそうです。いずれにしても早期に性別適合手術の全面的な保険適用が達成されるよう、当センターとしても力を尽くしたいと考えております。

（松本 記）

## 核医学診療室

核医学診療室では5名の診療放射線技師が常駐し、SPECT/CT装置2台、SPECT装置2台にて、核医学検査ならびに内照射治療を行っています。令和元年7月から令和2年1月までに、約1512件の核医学検査を行いました。全ての核医学検査に、放射線科診断専門医がレポートを作成しています。

核医学診療室では放射性同位元素を用いた放射線治療も行っております。子宮頸癌などに対するIr-192を用いた高線量率密封線源治療、前立腺癌に対するI-125を用いた低線量率密封小線源治療、甲状腺癌転移巣に対するI-131を用いた放射性ヨード内療法、悪性リンパ腫に対するY-90標識抗体療法などを継続して行っています。

医療法施行規則の一部を改正する省令（平成31年厚生労働省令第21号）の診療用放射線に係る安全管理体制に関する規定への対応を鋭意行っています。診療体制の強化のため核医学診療室副室長に新たに本田技師長、児島が指名されました。今後とも臨床各科の皆様方のご指導およびご協力のほどよろしくお願い致します。

（児島 記）

## 結石治療室

結石治療室では、おもに尿路結石症に対する体外衝撃波結石碎石術を行っています。この治療は尿路結石に対する最も侵襲の低い治療であり、入院せずに無麻酔で施行が可能です。

尿路結石の治療は、近年めざましい進歩を遂げています。特に内視鏡の進歩は著しく、細径化によって多くの症例が経尿道的内視鏡下手術や経皮的腎結石碎石術で対応可能となりました。そのため体外衝撃波結石碎石術は件数として減少傾向にあります。しかしながら、大学病院の性質上、他院での治療困難症例を受け入れることが多く、このような難治症例では複数の治療法を組み合わせる治療を行うことが必要となります。体外衝撃波結石碎石術は、以前の簡便な治療という位置づけから、今後は内視鏡手術の補助的役割という位置づけへ変化しつつ、引き続き尿路結石治療の重要な一翼を担い続けるものと考えます。

今後も積極的に体外衝撃波結石碎石術を含め、総合的な結石治療を推進してまいりますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

（渡辺 記）

## てんかんセンター

てんかんセンターでは包括的で高度な診療を行うべく、伊達勲センター長（脳神経外科）のもと、秋山倫之副センター長（小児神経科）、脳神経外科、小児神経科、精神科神経科、脳神経内科の脳神経系診療科、関連診療科・部・病棟が連携して日々診療を行っています。

脳神経系診療科と多職種からなるてんかん外科カンファレンスは月2回開催し、乳児から成人に至るまで幅広く治療方針の検討、診断の確定、てんかん外科の適応評価等を行っています。てんかん外科では難易度の高い例が徐々に増えてきております。また、厚生労働省のてんかん地域診療連携体制整備事業の診療拠点病院として、県内の診療連携の推進やてんかんに関する啓発活動を行っています。TVカンファレンスシステムを用いた県内医療施設間での症例検討会は月1回開催しており、参加機関数・参加者数は徐々に増加しています。また、岡山県てんかん診療ネットワークを新たに立ち上げ、診療連携機関の定期会議も始めました。

教育・啓発活動としては、8月中旬に幼稚園・学校教諭を対象とした研修会、8月末にデジタル脳波セミナーを行い、好評を博しました。また、1月末に岡山県障害者職業センターで開催されたジョブコーチ研修会でもてんかんの基本的知識に関する講演を行いました。

今後とも同窓の先生方のご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。  
(秋山 記)



下山 敦士



海外への留学者一覧

令和2年4月1日現在

分野名	氏名	卒年次	留 学 先	期 間
分 野 名 分 医 学	植 木 靖 好	平 6	Indiana University, Indianapolis, USA. E-mail: Uekiy@iu.edu	2000. 10~未定
	関 次 男	平 6	Department of Medical Education California University of Science and Medicine (CalMed) School of Medicine, U.S.A. E-mail: SekiT@calmedu.org	1998. 7~未定
	浅 野 恵 一	平30院	Icahn School of Medicine at Mount Sinai, New York, U.S.A.	2018. 4~未定
病 理 学 (腫瘍病理)	高 田 尚 良	平 16	British Columbia Cancer Centre, Vancouver, Canada	2016. 4~未定
消 化 器・臓 学 内 科	中 川 裕	平 1	University of Pennsylvania, Philadelphia, U.S.A.	
	恩 地 正 浩	平 19	Institut für Molekulare Biotechnologie GmbH, Vienna, Austria	2015. 10~未定
	赤 穂 宗 一 郎	平 19	University of California, Los Angeles, U.S.A.	2018. 4~
血 液・器 学 腫 瘍 呼 吸 内 科	荻 野 敦 子	平 12	Dana Farber Cancer Institute Lowe Center for Thoracic Oncology, Boston, U.S.A. E-mail:ogino8186@gmail.com	2009. 7~未定
	小 山 幹 子	平 12	Queensland Institute of Medical Research, Herston, Australia. E-mail: mokomoko125125@yahoo.co.jp	2009. 2~未定
	藤 原 英 晃	平 18	University of Michigan, Internal Medicine, Hematology and Oncology, U.S.A.	2015. 8~2021. 3
	藤 井 詩 子	平 18	McGill University, Montreal, Canada	2018. 4~
腎・免 疫・代 謝 内 科 学	清 家 圭 介	平 23	University of Michigan, Internal Medicine, Hematology and Oncology, U.S.A.	2020. 1~
	杉 本 光	平 1	Beth Israel Deaconess Medical Center, Boston, U.S.A. E-mail: hikarusugimoto@yahoo.co.jp	1998. 9~未定
	勝 山 恵 理	平 19	Beth Israel Deaconess Medical Center, Harvard Medical School, Boston, U.S.A	
	三 瀬 広 記	平 20	MD Anderson Cancer Center, Texas, U.S.A.	2019. 6~
小 児 医 学 学 器 学	山 村 裕 理 子	平 23	University of Glasgow, U.K.	2019. 1~未定
	野 坂 宜 之	平28院	Sinai Medical Center, Los Angeles, U.S.A	2016. 12~2020. 3
	柴 田 敬	平29院	The Hospital for Sick Children, Tronto, Canada	2019. 5~2020. 3
消 化 器 学 外 科	高 木 弘 誠	平 19	Erasmus Medical Center, Rotterdam, Netherlands	2017. 10~未定
	金 谷 信 彦	平 22	Brigham and Women's Hospital, Boston, U.S.A.	2019. 2~未定
	熊 野 健 二 郎	平29院	Baylor Research Institute, Dallas, Texas, U.S.A	2017. 11~未定
呼 吸 器・乳 腺 内 分 泌 外 科 学	佐 藤 博 紀	平 21	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, U.S.A	2018. 4~
	富 山 浩 司	平 12	Univeraity of Rochester, NY, U.S.A	
	植 村 忠 廣	平 16	Allegheny General Hospital Pennsylvania, U.S.A	
	目 崎 久 美	平 22	University of Tronto, Tronto General Hospital, Canada	2018. 4~
	田 中 真	平 22	Hospital Universitario Puerta De Hierro, Majadahonda, Spain	2018. 10~
	橋 本 好 平	平 22	Washington University in St. Louis, U.S.A.	2019. 4~
	高 橋 侑 子	平 22	European Organisation for Research and Treatment of Cancer, Belgium	2019. 7~
	難 波 圭	平 22	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, U.S.A.	2019. 12~
整 外 科 学	山 本 治 慎	平 23	University of Tronto, Tronto General Hospital, Canada	2020. 4~
	藤 原 智 洋	平 16	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, U.S.A	2017. 8~2020. 夏
	尾 崎 修 平	平 18	National Institutes of Health, Bethesda, U.S.A	2017. 8~未定
	中 道 亮 亮	平 19	The Scripps Research Institute, San Diego, U.S.A	2018. 2~未定
	篠 原 健 介	平28院	New York Presbyterian Och Spine Hospital, U.S.A.	2020. 4~2021. 3
	兒 玉 有 弥	平30院	University of Pittsburg, U.S.A.	2020. 4~2021. 3
泌 尿 器 学 病 態 学	堀 田 昌 宏	平30院	The University of Edinburgh, Edinburgh, U.K	2019. 6~約2年間
	光 井 洋 介	令 1 院	Cleveland Clinic, Ohio, U.S.A.	2020. 6~未定
耳 鼻 咽 喉・頭 頸 部 外 科 学 産 科・婦 人 科 学	片 山 聡	大学院生	Medical University of Vienna, Austria	2020. 4~1年間
	大 道 亮 太 郎	平29院	The University of Iowa, Iowa, U.S.A	2018. 2~2020. 2
放 射 線 医 学	長 谷 川 徹	平 21	Ottawa Hospital Research Institute, Ottawa, Canada	2019. 1~
	新 家 崇 義	平 13	Heidelberg University, Heidelberg, Germany	2019. 4~2019. 9
麻 酔 学 蘇 生 学	中 平 毅 一	平 9	Brigham and Women's Hospital Harvard Medical School, Boston, U.S.A.	2003. 11~未定
	岡 崎 信 樹	平 19	The Florey Institute of Neuroscience and Mental Health, Melbourne, Australia	2018. 9~未定
	岡 原 修 司	平 19	Monash University, The Alfred Center, Melbourne, Australia	
	木 村 聡	大学院生	The Royal Children's Hospital, Australia	2020. 2~
	佐 野 美 奈 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Sick Kids, Toronto, Canada	
脳 神 経 学 外 科	大 谷 理 浩	平 21	The Univeraity of Texas, Houston, U.S.A.	2017. 6~
	金 恭 平	平 22	The University of Alabama, Alabama, U.S.A.	2019. 2~
	清 水 俊 彦	平 22	The University of Texas Healyh Science Center at Houston, Houston, U.S.A.	2019. 5~
	富 田 祐 介	平 22	Northwestern University, Chicago, U.S.A.	2019. 12~
循 環 器 学 内 科	石 田 稜 治	平26院	The Hospital of Sick Children, Toronto, Canada	2018. 4~
	斉 藤 幸 弘	平 19	University of Wisconsin-Madison, Wisconsin, U.S.A	2017. 6~未定
	上 岡 亮 亮	平 20	Indiana Univeraity, Indianapolis, U.S.A.	2019. 9~未定
心 臓 血 管 外 科 学	川 田 哲 史	平30院	Toronto Congenital Cardiac Centre for Adults, Tronro, Canada	2018. 7
	甲 元 拓 志	平 1	University of Wisconsin Medical School, Wisconsin, U.S.A.	
	本 浄 修 己	平17院	The Hospital for Sick Children, University of Toronto, Toronto, Canada	2004. 12~未定
	大 崎 悟	平18院	University of Wisconsin Hospital and Clinics, Madison, U.S.A.	2006. 8~未定
	小 林 純 子	平26院	The Hospital of Sick Children, Toronto, Canada	2017. 9~未定
	奥 山 倫 弘	平29院	Univeraity of Kentuckey, Lexington, U.S.A.	2018. 2~未定
脳 神 経 内 科 学 救 急 医 学	佐 野 俊 和	平30院	The University of California, San Fransisco, U.S.A.	2018. 5~未定
	門 脇 幸 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Tronto, Canada	2019. 7~
森 原 隆 太	平 23	University of Tronto, Tronto, Canada	2018. 7~2020. 6	
西 村 健	平 21	University of Pittsburgh, Pennsylvania, U.S.A	2018. 7~2020. 6	



## 岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会について

今般の新型コロナウイルス感染症の爆発的な感染状況に鑑み、会員の皆様の安全を最優先に確保する観点から、令和2年6月6日（土）の午後開催予定としていました今年度の岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会並びに関連する一連の行事を中止することとしましたので、お知らせします。

会員の皆様におかれましては、国民の健康と福祉を守るため、困難な状況下、第一線で医療を支えてくださいますことに敬意を表します。

なお、岡山医学会賞各賞受賞者については、別途、授賞式の機会を設けますと共に鶴翔会会報及び岡山医学会雑誌の誌上で顕彰させていただきます。

令和2年4月

岡山大学医学部長 浅沼 幹人

岡山大学病院長 金澤 右

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長 大塚 愛二

(問い合わせ先)

鶴翔会事務局

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1 岡山大学医学部内

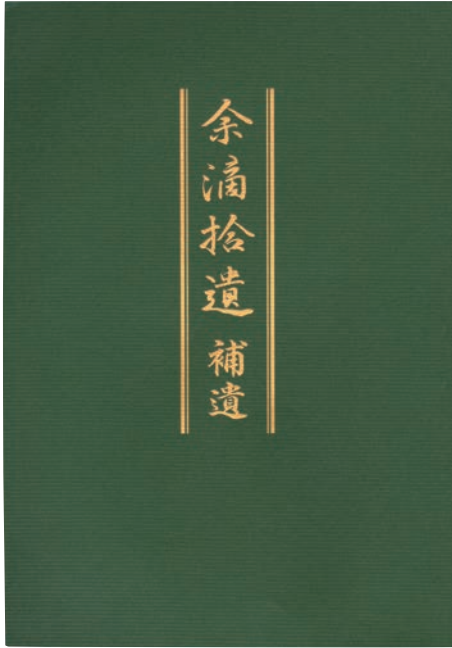
電話：086-235-7060 FAX：086-235-7052

e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

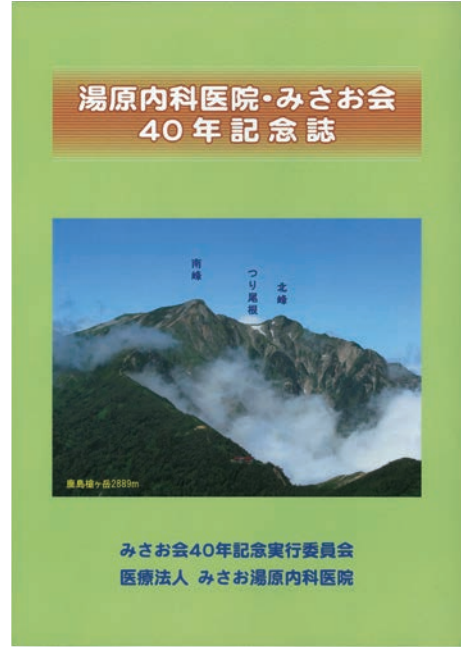
## ご寄贈いただきました

次の方々より、御著書等をご寄贈いただきました。ご厚意に対し深く御礼申し上げます。

金政泰弘先生（昭26）  
「余滴拾遺 補遺」



湯原淳良先生（昭33）  
「湯原内科医院・みさお会40年記念誌」





## 令和元年度 Student Doctor 認定式

令和元年12月26日（木）、岡山大学医学部医学科 Student Doctor 認定式がJ-Hallにて執り行われました。

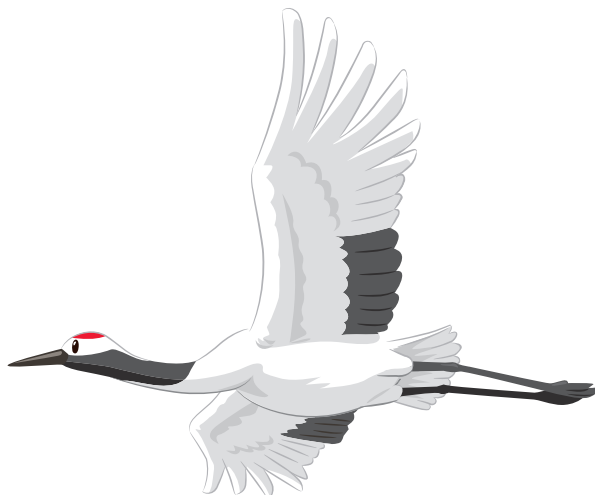


## 令和元年度岡山大学医学科学学位記授与式

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、今年度の岡山大学卒業式（学位記授与式）が中止されたことに伴い、恒例の医学部医学科学学位記授与式も中止になりました。卒業生並びに保護者の皆様には、この日を心待ちにされ心残りのことと思います。

119名の卒業生の皆様におかれましては、諸課題に果敢に挑戦し困難を乗り越えて、ご活躍されますことを心よりお祈り申し上げます。

鵬程万里 大きく羽ばたけ！



## 第114回 医師国家試験の結果

## 全国（国公立）の合格状況

	合格率 (%)	合格者数	受験者数
全国計	92.1	9,341	10,140
(参考：第113回)	89.0	9,029	10,146

## 中国・四国地区国立大学における合格状況

大学名	合格率 (%)	順位			備考
		中四国 (9校中)	国立 (43校中)	全国 (80校中)	
鳥取大学	94.7	2 (5)	12 (26)	32 (49)	
島根大学	89.5	7 (8)	38 (35)	69 (64)	
<b>岡山大学</b>	<b>89.3</b>	<b>8 (4)</b>	<b>39 (23)</b>	<b>70 (44)</b>	
広島大学	87.8	9 (9)	42 (36)	76 (65)	
山口大学	91.5	5 (6)	30 (29)	60 (51)	
徳島大学	92.1	4 (2)	28 (14)	56 (30)	
香川大学	95.3	1 (6)	7 (29)	24 (51)	
愛媛大学	92.6	3 (1)	24 (3)	51 (9)	
高知大学	91.1	6 (3)	33 (21)	63 (40)	

※ ( ) 内は、昨年度の順位を表す。

## 岡山大学の医師国家試験年度別合格状況

試験年月	新卒者	既卒者	受験者	新卒者 合格率	既卒者 合格率	計	順位		備考
							国立	全国	
16. 3	98	5	103	89/98 90.8	5/5 100.0	94/103 91.3	20/43	29/80	
17. 2	102	10	112	98/102 96.1	7/10 70.0	105/112 93.8	12/43	20/80	
18. 2	98	7	105	93/98 94.9	4/7 57.1	97/105 92.4	15/43	30/80	
19. 2	98	8	106	93/98 94.9	4/8 50.0	97/106 91.5	21/43	30/80	
20. 2	92	8	100	87/92 94.6	5/8 62.5	92/100 92.0	22/43	36/80	
21. 2	104	7	110	98/103 95.1	2/7 28.6	100/110 90.9	28/43	51/80	(新卒者1名は未受験)
22. 2	94	12	103	87/93 93.5	6/10 60.0	93/103 90.3	24/43	44/80	(新卒者1名は未受験)
23. 2	107	10	116	94/106 88.7	5/10 50.0	99/116 85.3	39/43	68/80	(新卒者1名は未受験)
24. 2	98	20	116	95/98 96.9	12/18 66.7	107/116 92.2	15/43	33/80	
25. 2	95	10	103	90/95 94.7	6/8 75.0	96/103 93.2	8/43	23/80	
26. 2	105	8	113	97/105 92.4	5/8 62.5	102/113 90.3	25/43	46/80	
27. 2	105	12	117	101/105 96.2	6/12 50.0	107/117 91.5	26/43	46/80	
28. 2	115	10	125	109/115 94.8	6/10 60.0	115/125 92.0	18/43	38/80	
29. 2	120	8	128	113/120 94.2	6/8 75.0	119/128 93.0	14/43	21/80	
30. 2	112	12	124	110/112 98.2	5/10 50.0	115/122 94.3	6/43	19/80	
31. 2	122	7	129	117/122 94.3	2/7 28.6	117/122 90.7	23/43	44/80	
2. 2	119	13	131	111/119 93.3	6/12 50.0	117/131 89.3	39/43	70/80	

## (公財) 岡山医学振興会より 大學の改革は改悪か？

代表理事  
難波正義

暖冬で過ごしやすい冬でしたが、地球の温暖化のせいだとすると、喜んでばかりではおられません。でも、同窓の諸先生にはご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。日頃から、当財団に対しまして、多大なご支援をいただき深く感謝いたしています。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

当財団では、皆様の教育、研究レベルが少しでも向上することをお手伝いできればという目的で頑張っております。しかし、日本の大学の世界ランキングが年々低下しているデータをみると、大変残念な気分になります。日本で数ある財団の中で、芥子粒のような当財団が（といっても、岡山県にある財団の中では当財団の助成金額はトップだと思いますが）、日本の大学のランキングの低下に悲憤慷慨してもどうしようもありませんが、考えてしまいます。

日本の大学を世界で通用する大学にするべく、1982年中曽根内閣発足以来、現在まで数々の大学改革が行われて来ました。留学生増員計画、大学院の強化、経営的手法の導入、法人化、認証評価、ガバナンスの強化、選択と集中など、あげればきりがありません。

選択と集中の改革の一つに、2014年に発足した「スーパーグローバル大学創成支援事業」があります。この事業の目的は、「10年間で世界大学ランキングトップ100に10校以上をランクイン」で、37大学に特別予算が配分されました（岡山大学も採択されています）。結果は、2019年の段階で、東大36位、京大65位です。みじめな結果です。

いろいろの改革で、大学は良くなったのでしょうか。私には現場から次のような悲鳴がよく聞こえてきます。「研究費が少なくなった。人員を削られた。雑用や会議が増えて、研究時間が少なくなった。」などです。

無駄な改革に多額の金が使われ、研究費は減少し、教員は雑用が増え、教育や研究時間が少なくなっているのではないかと思います。

大学というアカデミックな環境を整備して、教員が教育や研究を落ちついて楽しくできる環境をつくることが重要ではないかと思います。(2020-2-16)



福寿草

井上 一



令和元年度卒年次別会費納入状況

令和2年2月末現在

卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
昭16以前	25	0	0	-	39	54	46	27	59%	8	101	95	34	36%
17	2	0	0	-	40	57	47	35	74%	9	97	94	34	36%
17専	2	0	0	-	41	74	65	45	69%	10	105	97	37	38%
18	4	1	1	100%	42	72	68	42	62%	11	96	90	27	30%
18専	5	1	0	0%	43	78	70	41	59%	12	99	92	27	29%
19	2	0	0	-	44	78	68	41	60%	13	100	97	26	27%
19専	8	3	1	33%	45	77	72	46	64%	14	94	76	26	34%
20	7	2	0	0%	46	85	75	53	71%	15	92	80	27	34%
20専	9	2	2	100%	47	81	75	48	64%	16	98	77	19	25%
21	7	2	1	50%	48	97	93	56	60%	17	100	78	27	35%
22	6	4	0	0%	49	104	92	61	66%	18	98	80	26	33%
23	13	8	3	38%	50	76	71	45	63%	19	98	72	20	28%
23専	14	7	2	29%	51	108	99	58	59%	20	91	73	23	32%
24	15	9	2	22%	52	101	94	50	53%	21	104	82	25	30%
24専	32	19	6	32%	53	73	66	34	52%	22	94	81	36	44%
25	10	5	2	40%	54	120	113	60	53%	23	107	88	30	34%
25専	34	20	9	45%	55	114	110	64	58%	24	98	86	25	29%
26	16	11	9	82%	56	107	100	52	52%	25	95	89	39	44%
26専	16	8	4	50%	57	126	118	69	58%	26	105	92	32	35%
27	20	14	6	43%	58	114	107	59	55%	27	105	97	22	23%
27専	8	5	3	60%	59	123	119	56	47%	28	114	111	21	19%
28	28	18	10	56%	60	112	106	44	42%	29	120	113	14	12%
29	28	19	12	63%	61	112	104	59	57%	30	112	111	17	15%
30	32	20	12	60%	62	118	112	58	52%	31	122	122	119	98%
31	36	26	16	62%	63	129	123	55	45%	学部卒計	6,355	5,581	2,614	47%
32	41	26	17	65%	平1	107	98	59	60%	備考. 上記一覧表は本学部卒業者の状況であるが、他大学卒業後本学大学院の修了者及びその他会員の状況は次のとおり。				
33	42	33	24	73%	2	120	111	53	48%					
34	51	35	25	71%	3	111	97	52	54%					
35	59	47	27	57%	4	117	105	57	54%					
36	51	42	31	74%	5	110	105	36	34%	大学院計	1,380	933	280	30%
37	48	38	27	71%	6	120	115	53	46%	その他	1,741	1,577	858	54%
38	55	45	30	67%	7	109	94	31	33%	合計	9,476	8,091	3,752	46%

注：  
 ① 会費の前納制度として、一時に25年分・75,000円（終身会費）の納入方法の制度もありますので、ご利用ください。（会則第10条附則）  
 ② 会則第10条の規程により、満77歳に達したときは、会員の申し出により会費を免除することができますので、お申し出ください。

## おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています！

鶴翔会会員の先生方には、益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げますと共に、平素から岡山大学医学部及び鶴翔会に対して、ご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

鶴翔会では、総会、会報の発行、会員名簿などの同窓会としての一般的な活動だけではなく、医学科学生に関係する大学行事への協賛、3年生授業の医学インターンシップの支援、卒業生への記念助成など医学科の教育研究の支援活動をおこなっております。こうした活動は会員の皆様からの会費に支えられております。会費納入に皆様のご理解ご協力をお願いします。

鶴翔会では多様な会費納入に対応しています。先生方のライフスタイルに合わせてお選びください。毎年お手を煩わせております手間を省いていただけるものと存じます。

### ○ 会報に同封の払込用紙

会報に同封の「払込取扱票」をお使いください（手数料は鶴翔会負担です）。

下に示す金融機関の口座にお振り込みいただいても、また、鶴翔会へ直接お持ちいただいても結構です。

### ○ インターネット・モバイルバンキング

先生方がご利用の金融機関のネットバンキング申込をされていまして、デスクのパソコンから、何時でもお振り込みできます。振込口座は下の金融機関の口座です。

### ○ 自動引き落としサービスもご用意しています

毎年払い込むのが面倒…というお忙しい先生方に便利です。手続きをご希望の方は鶴翔会事務局まで、電話・FAX・e-mailなどで、お気軽にお問い合わせください。手続用紙をお送りします。

### ○ お得な会費制度もいっぱい！

一時に25年間分の会費（75,000円）を終身会費としてお納め頂きますと以後の会費は納めて頂くことはありません。振込用紙の金額欄を75,000に訂正してお振り込みください。

満77歳になられたときは、お申し出により会費が免除になりますので、お申し出ください。

### 【振込金融機関名、口座番号等】

中国銀行 清輝橋支店 （チュウゴクギンコウ セイキバシシテン）

普通預金 1591434 鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

### ゆうちょ銀行

#### ※ ゆうちょ銀行からの振込の場合

ゆうちょ銀行（ユウチョギンコウ） 記号、番号 15410、38020041

鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

#### ※ ゆうちょ銀行以外からの振込の場合

ゆうちょ銀行（ユウチョギンコウ） 店名 五四八（ゴヨンハチ）

店番 548 番号 3802004

鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

### 【お願い】

○ お振り込みに際しては、同封の払込取扱票により振込金額をご確認いただくと共に、会員番号（払込取扱票の氏名右側の番号）及び氏名を必ず入力してください。

○ 鶴翔会会費についてのお問い合わせは、鶴翔会事務局へお願いします。

電話：086-235-7060

FAX：086-235-7052

e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

## 岡山大学医学部・病院発祥の地へ案内板設置される

岡山大学医学部創立150周年記念事業の一つとして、井上一名誉教授（昭和39卒：整形外科）からご提案のありました「医学部発祥の地へ記念碑設置」について、発祥の地（現岡山市中区東山公園）を管理する岡山市へ相談、調整の結果、「岡山歴史のまちしるべ事業」の令和元年度事業で、東山公園の入り口近くに案内板設置が決まり、令和2年3月6日（金）に案内板設置の工事が無事完了しました。

会員の先生方ご存知のとおり、岡山大学医学部・病院は、明治3年（1870）、備前国上道郡門田村操山の麓（現岡山市中区東山公園：利光院及び台崇寺跡）に開設された岡山藩医学館及び大病院が祖です。東山公園は今は閑散としていますが、先人達の「大いに医学の進歩を図る」熱い思いが込められた地です。

「岡山歴史のまちしるべ事業」では、岡山の医学に因んだ案内板が岡山市内に次のとおり設置されています。岡山医学歴史探訪の街歩きはいかがでしょうか。

岡山医学専門学校跡（岡山市北区内山下）、上坂熊勝先生居宅跡（岡山市北区番町）、  
岡山孤児院跡（岡山市中区門田屋敷）、難波抱節（岡山市北区御津金川）、  
岡山藩医学館・大病院跡（岡山市中区東山）





岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧

病院長 金澤 右  
 副病院長〔診療(医科)担当] 増山 寿  
 同〔教育(医科)担当] 豊岡 伸一  
 同〔研究(医科)担当] 前田 嘉信  
 同〔医療安全管理担当] 塚原 宏一  
 同〔総務・企画運営担当] 大塚 文男

令和2年4月1日現在

診療領域	診療科	科 長	副 科 長	医 局 長	外来医長	病棟医長	教育医長
内 科	総合内科・総合診療科	大塚 文 男	花 山 宜 久	萩 谷 英 大	小比賀 美賀子	長谷川 功	谷 山 真規子
	消化器内科	岡田 裕 之	高 木 章乃夫	川 野 誠 司	岩 室 雅 也	松 本 和 幸	原 田 馨 太
	血液・腫瘍内科	前田 嘉 信	松 岡 賢 市	西 森 久 和	大 橋 圭 明	藤 原 英 晃	浅 田 騰
	呼吸器・アレルギー内科	木 浦 勝 行	松 岡 賢 市	西 森 久 和	大 橋 圭 明	谷 口 暁 彦	浅 田 騰
	腎臓・糖尿病・内分泌内科	和 田 淳	江 口 潤	木野村 賢	当 真 貴志雄	松 本 佳 則	江 口 潤
	リウマチ・膠原病内科	和 田 淳	松 本 佳 則	木野村 賢	当 真 貴志雄	松 本 佳 則	江 口 潤
	循環器内科	伊 藤 浩		吉 田 賢 司	三 好 亨	赤 木 達	戸 田 洋 伸
	脳神経内科	阿 部 康 二		山 下 徹	武 本 麻 美	菱 川 望	表 芳 夫
感染症内科	草 野 展 周						
外 科	消化管外科	藤 原 俊 義	白 川 靖 博	黒 田 新 士	寺 石 文 則	野 間 和 広	菊 池 覚 次
	肝胆膵外科	八 木 孝 仁	榎 田 祐 三	黒 田 新 士	吉 田 一 博	枕 瀬 崇	安 井 和 也
	呼吸器外科	豊 岡 伸 一	山 根 正 修	枝 園 忠 彦	岡 崎 幹 生	山 本 寛 斉	大 谷 真 二
	乳腺・内分泌外科	土井原 博 義	平 成 人	枝 園 忠 彦	枝 園 忠 彦	枝 園 忠 彦	平 成 人
	泌尿器科	渡 邊 豊 彦	荒 木 元 朗	小 林 泰 之	佐 古 智 子	枝 村 康 平	荒 木 元 朗
	心臓血管外科	笠 原 真 悟		小 谷 恭 弘	末 澤 孝 徳	黒 子 洋 介	藤 井 泰 宏
	小児外科	野 田 卓 男			納 所 洋	谷 本 光 隆	納 所 洋
	小児心臓血管外科	笠 原 真 悟					
緩和・支持医療科	田 端 雅 弘	片 山 英 樹					
感覚・皮膚・運動機能科	整形外科	尾 崎 敏 文	西 田 圭 一 郎	島 村 安 則	中 田 英 二	古 松 毅 之	宮 澤 慎 一
	形成外科	木 股 敬 裕	難 波 祐 三 郎	松 本 洋	渡 部 聡 子	渡 邊 敏 之	妹 尾 貴 矢
	皮膚科	森 実 真	山 崎 修	平 井 陽 至	横 山 恵 美	三 宅 智 子	梶 田 藍
	眼科		森 實 祐 基	濱 崎 一 郎	塩 出 雄 亮	細 川 海 音	土 居 真 一 郎
脳・神経・精神科	耳鼻咽喉科		假 谷 伸	片 岡 祐 子	菅 谷 明 子	丸 中 秀 格	野 田 洋 平
	精神科神経科	山 田 了 士	寺 田 整 司	井 上 真 一 郎	松 本 洋 輔	藤 原 雅 樹	岡 久 祐 子
	脳神経外科	伊 達 勲	黒 住 和 彦	菱 川 朋 人	亀 田 雅 博	藤 井 謙 太 郎	佐 々 木 達 也
小児・産科・小周産科	麻酔科蘇生科	森 松 博 史		清 水 一 好	松 岡 義 和	松 崎 孝	谷 真 規 子
	小児科	塚 原 宏 一	岡 田 あゆみ	馬 場 健 児	近 藤 麻 衣 子	八 代 将 登	吉 本 順 子
	小児循環器科	大 月 審 一					
	小児神経科	小 林 勝 弘	秋 山 倫 之	秋 山 倫 之	花 岡 義 行	柴 田 敬	岡 牧 郎
	小児血液・腫瘍科	塚 原 宏 一					
	小児麻酔科	岩 崎 達 雄					
	小児放射線科	松 井 裕 輔					
産科婦人科	増 山 寿	中 村 圭 一 郎	中 村 圭 一 郎	鎌 田 泰 彦	小 川 千 加 子	衛 藤 英 理 子	
放射線科	放 射 線 科	金 澤 右	平 木 隆 夫	松 井 裕 輔	富 田 晃 司	宇 賀 麻 由	児 島 克 英
救急科	救 命 救 急 科	中 尾 篤 典	内 藤 宏 道	内 藤 宏 道	塚 原 紘 平	藤 崎 宣 友	小 崎 吉 訓
病理診断科	病 理 診 断 科	柳 井 広 之		都 地 友 紘			谷 口 恒 平
臨床遺伝子診療科	臨 床 遺 伝 子 診 療 科	平 沢 晃	河 内 麻 里 子	山 本 英 喜	河 内 麻 里 子		山 本 英 喜

## 鶴翔会会報 投稿内規

項目	字数(程度)	内容
ご挨拶	800	(学内) 学長・学部長・病院長就任、定年退任、教授就任 (学外) 学長・教授就任、関係機関の長就任等
謹弔		名誉教授・名誉会長・会員などご逝去のとき
医学部(病院)の動き		医学部・附属病院の変革、新設部門などについて
会員の近況		受賞・表彰、近況報告等
学会・研究会だより		学会・研究会等報告、開催通知
支部だより	1600	各支部の支部総会報告
同期会だより	1600	同期会報告、開催通知
関連病院だより		岡山大学関連病院長会 新規入会病院紹介
学生だより	1600	西医体報告、解剖実習体験記等
海外だより	2000	海外留学、在住時の体験記や海外旅行記等
歴史の広場		岡山大学医学部にまつわる歴史について
随想	1600	
会員のこえ		会員の意見・感想等
教室だより	800	医学部・大学院・病院診療施設の現況報告
岡山より		事務局より報告事項
編集後記		会報担当幹事又は事務局が担当
挿絵		

1. 字数はあくまで目安です。
  2. 4月号のメ切は1月末、10月号のメ切は7月末です。
  3. 上記以外の内容であっても受け付けております。ただし、特定の個人への誹謗中傷等、掲載に相応しくないと  
思われるものについては、編集委員会において審議後、掲載をお断りする場合があります。
  4. 原稿、挿絵はデータ(一太郎、word、JPEG等)にて下記メールアドレスまでお送りいただければ幸甚ですが、  
紙原稿やお写真を下記宛てご郵送いただいても結構です。
- ※メールにてお送りくださった場合、必ず当方より原稿受領及び御礼の返信をさせていただきます。当方からの返信がない場合は、メールが正しく届いていない可能性がありますので、お問い合わせ願います。

原稿送付先・連絡先

鶴翔会

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

TEL: 086-235-7060 FAX: 086-235-7052

E-mail: dosokai@md.okayama-u.ac.jp

## 編 集 後 記

会報128号をお届けします。

今春、119名の卒業生を送り出しました。良き医療人、研究者を目指して果敢に挑戦し幾多の壁を乗り越えて前進してくれることを期待しています。新たにフレッシュな112名の新生を迎えました。岡山大学での成長に大いに期待すると共に、諸先生方のご指導、ご協力よろしく申し上げます。

病原ウイルス学山田雅夫教授、ウイルス腫瘍学加藤宣之教授、眼科学白神史雄教授と耳鼻咽喉・頭頸部外科学西崎和則教授の4名の先生が定年退職されました。永年にわたり医学部の教育研究にご尽力いただき、ありがとうございました。ご退職後も、引き続き、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

創立150周年の節目の年となりました。地元岡山の経済界、関連病院をはじめ多くの個人、団体から絶大なご支援を賜り、誠にありがとうございました。念願の

旧生化学棟大講堂の改修工事も完成しました。11月3日には創立150周年記念式典を予定しています。会員の先生方と一緒に150周年を祝い、次代へ続く扉を押し広げ未来に向かっての第一歩を踏み出したいと思っています。

今号の編集委員会に学生代表に参加していただきました。若い視点でのご提案等、会報の充実につながることを大いに期待しています。良きものは残し求められる改革は進めていきたいと考えています。

今冬は例年にない暖冬でした。またコロナウイルスの猛威等、予測不能ないろいろな事象が私たちの前に立ち塞がって来ると思いますが、英知を集めて対応し乗り越えていきたいと思っています。

時には花を楽しみ春風に吹かれてみましょう。

(伊達 勲)

発 行 鶴翔会 (岡山医学同窓会)  
会報幹事 伊達 勲  
鶴翔会会報編集委員 阿部康二、  
大塚愛二、加藤宣之、金澤 右、  
木浦勝行、伊達 勲、土居弘幸、  
豊岡伸一、西崎和則、森実 真、  
柳井広之、関 美月

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

電 話 (086) 235-7060・7061

F A X (086) 235-7052

E-mail : dosokai@md.okayama-u.ac.jp

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mdosokai/>

印 刷 友野印刷株式会社

電 話 (086) 255-1101

F A X (086) 253-2965

乱丁・落丁はお取りかえします。



## 鶴翔会会員向けサービスのご案内

### ○ 岡山大学勤務医師責任賠償保険サービス

鶴翔会では会員の方々を対象に、(株)損害保険ジャパンの団体勤務医師賠償責任保険を取り扱っています。  
パンフレットを鶴翔会ホームページに掲載していますが、ご連絡をいただければお送りいたします。

#### 特徴・メリット

- 個人で保険に加入するより、断然保険料がお得（20%も割安）
- 会員の先生であれば勤務先に関係なく利用できます
- 期間中に、勤務先を異動しても保険は有効
- 契約は1年更新

※加入又はパンフレットを希望される場合は、必要書類をお送りしますので、鶴翔会事務局までご連絡ください。

鶴翔会事務局まで TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052  
e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

2020年2月現在

### ○ クレジットカードサービス

鶴翔会では、三井住友トラスト・カード(株)と提携して、「VISAゴールドカード」と「VISA・Master Card 加盟店契約」をご案内しております。

▶三井住友トラストゴールドカード(会員の先生が開業されている場合、従業員の方もお申込みできます)

- VISAゴールドカード 年会費が2,750円(税込)(⇔通常11,000円(税込))
- ロードサービスVISAゴールドカード年会費が3,300円(税込)(⇔通常12,100円(税込))  
割引は2年目以降も続きます。ご家族会員年会費は1,100円(税込)です。
- キャンペーン実施中！！(2020年8月31日まで)  
→VJAギフトカード1,000円分プレゼント(本会員・家族会員)



〔端末の一例〕

▶VISA・Master Card 加盟店契約

- ご利用見込額等に応じた優遇手数料となります。
- キャンペーン実施中！！(2020年8月31日まで)  
→クレジット端末1台が本体・ピンパッド・工事費とも無料です。



#### ＜ご留意事項＞

- カード申込・加盟店契約申込ともカード会社所定の審査がございます。
- 加盟店契約申込において、既にVJAグループのカード会社と加盟店契約のある会員様は対象外となります。

※詳しい資料、お申込書の請求は、三井住友トラスト・カード(株)まで

FAX:03-6737-0834 メール: Moushikomi@smtcard.jp

電話:0120-370-070(通話無料) <受付9時~17時(土・日・祝日・12/30~1/3休)>

- ◎必ず、「鶴翔会会員であること」、「お名前」、「ご住所」、「電話番号」、  
「希望サービス(カード・加盟店)」をお伝えください。



## 裏表紙の写真

### 臨床研究棟

日夜を問わず医学、医療の発展を目指して基礎及び臨床研究や医療技術の開発、工夫並びに後進の教育、指導が行われています。この不断の活動が岡山大学医学部・病院の成果として医学、医療を支え社会に還元されています。



# 鶴翔会

岡山医学同窓会報